

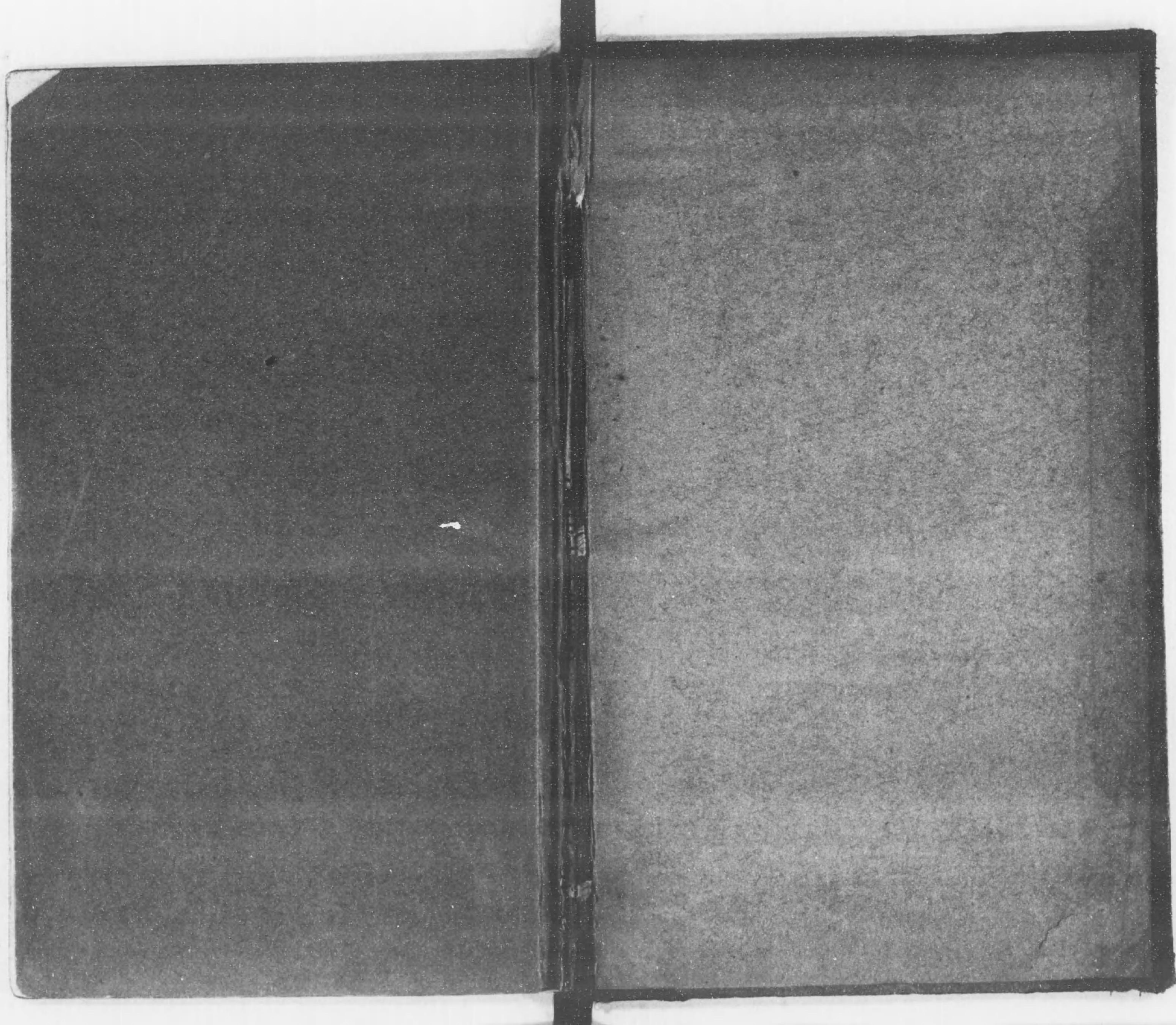
40



始









說 小

多 達 婆 提

珂 那



---

版 出 社 潮 新



501-40



多

那

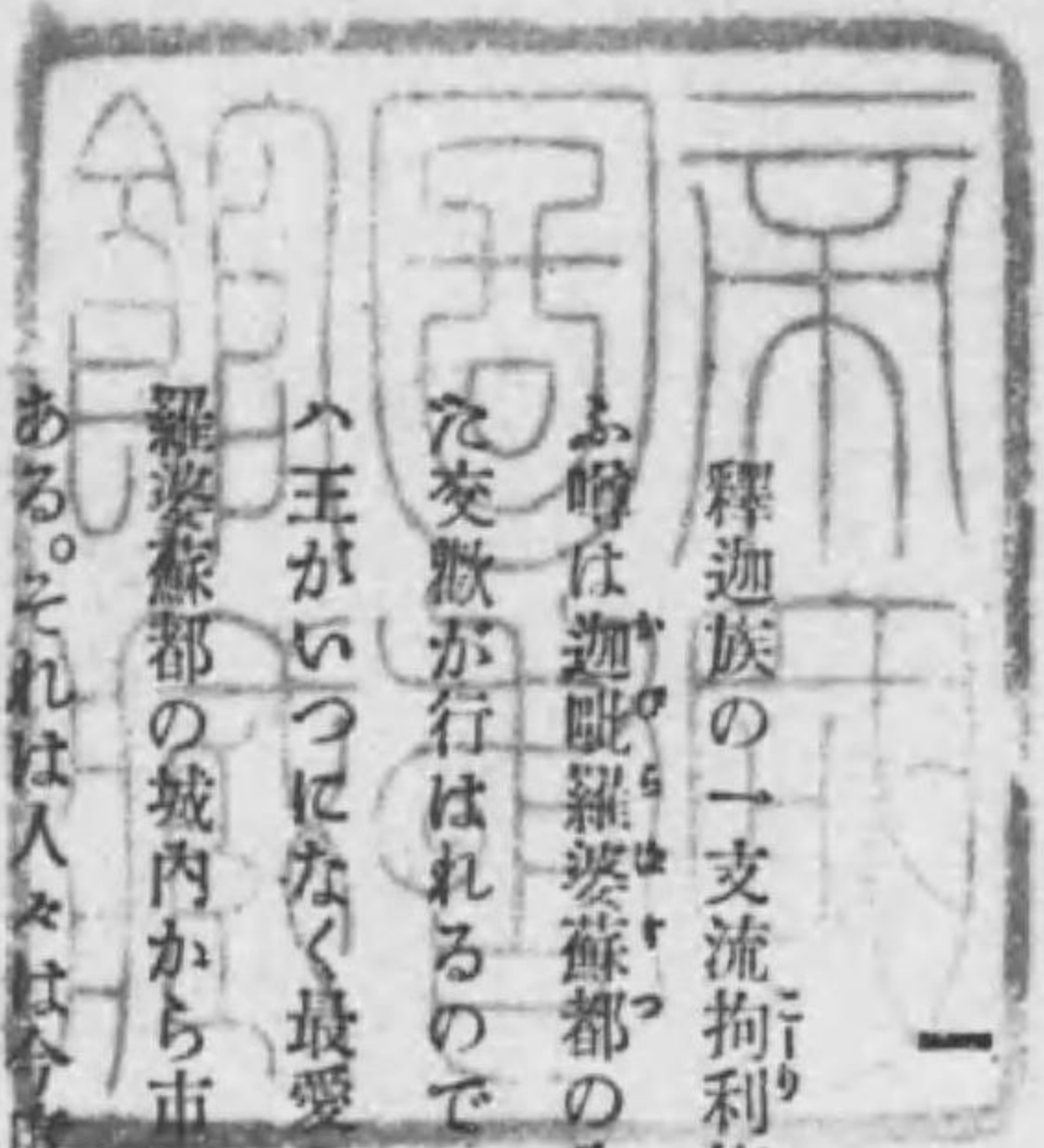
珂







前編



釋迦族の一流拘利族の王にして拘利の城主なるスブラブツドハ王が首圖駄那王を訪問するといふ噂は迦毗羅蘇都の全市を揺動した。従來釋迦族の諸王のあひだには色々な理由から時々かうした交款が行はれるので、たゞそれだけならばなんの不思議もないのであるが、今度はスブラブツドハ王がいつになく最愛の王女を同伴してくるといふことがなにか一大事でもあるかのやうに迦毗羅蘇都の城内から市の外壁の外にある賤民の小屋の隅々までに非常な期待と騷擾を惹起したのである。それは人々は今度の訪問をひとつには王女の解選のためのものであると考へたからであつた。

さて當の王の意中は知らず、此際慣例として同族の諸王のところから各王子たちが歓迎の宴に列るために名代として迦毗羅蘇都へ派遣され招待されるので、當推量とはいひながらかやうな想像もまつたく據處のないものではなかつた。主客雙方の重なる人々は、主人側では、首圖駄那王、王子悉達多、同難陀、來賓側では、スブラブツドハ王、王女耶輸陀羅、阿彌都檀那王の名代、王子提婆達多、



途盧檀那王どろいのだなの名代摩訶那摩まはいたしまん及第二王子阿寔樓駄あじつどぼ、シヌクロードナ王の名代跋提喇加ばはどりか、そのほか扈從の貴族高官たちであつた。スブラブツドハ王は別として、これらの諸王は皆兄弟なので、従つていふ迄もなくこれらの王子たちは従兄弟同士であり、首圖駄那王とは伯父甥の間柄であつた。

迦毗羅婆蘇都は國賓歡迎の準備に湧きかへつた。天恵を享けて豊饒な國土に比較的安穩にして單調なる生活を營んでゐた古のこれらの人々——國王も臣民も——にとつてはかやうなお祭騒はその政略上の理由はさておいてもやはりなくてはならぬ最楽しい行樂のひとつであつた。そのうへ極めて善良であると同時にかなりな虚飾家であつた首圖駄那王は、小國ながら全釋迦族の盟主たる己の地位に對して出来るだけ大な自信と矜恃とをもつてゐたので、その富と力を有利に且愉快に誇示することの出来るこの絶好の機會を到底空しく看過することは出来なかつた。彼は大袈裟な國賓歡迎の最熱心な計畫者であつた。すべては手順よく運んだ。拘利と迦毗羅婆蘇都をつなぐ道路は貴賓の行列の通行にさしつかへないやうに注意深く修繕され掃除された。隊商の車の轍はうづめられ、邪魔になる藪や倒木は截拂はれた。そして市外十町あまりのところを流れる川の渡渉場のこちらの岸から市城に接近して程よく擴つてゐる美しい草原まで一定の距離をおいて涼しげな綠門が建てられた。そこには豊滿限りなき印度の自然が供給するあらゆる色、あらゆる形、あらゆる匂の花と葉をもつて

様様な縞や模様がつくられ、道路には一面毛氈のやうに柔い草木の葉が敷きつめられて惜しげもなく種々の香水がふりそゞがれた。そして迦毗羅婆蘇都の城は極樂鳥のやうに紅白紫黄の大旗小旗をもつて飾られた。まことにそれは熱帯の國のみがひとり誇り得るところの豪奢であつた。



當日太子の悉達多は美々しく装うた一隊の儀仗兵を率ゐて道の半程にある椽果樹の森まで出迎へた。第二王子の難陀はこれも慣例に従つて前日から到着してゐる名代の王子たちの接伴役として後に残つた。恐しくたどくしいそして妙に落ちつかない幾時か過ぎた。城壁の内外を問はず路傍、廣場、木の下、物蔭、到處蟻のやうに群つて早朝から待ち草疲れてゐる市民の耳に遙に奏樂の音が聞えて彼等の胸を轟せた。それは國賓の行列が渡渉場を越えたことを知らせるための相圖に始められた先頭の迦毗羅婆蘇都宮廷音樂隊の奏樂である。それと同時に首圖馱那王をはじめ各王子大臣以下は城門から出て綠門の一方の口が例の草原に一大圓堂を造つてゐる處まで行つて行列の來るのを待ちうけた。樂の音は次第に高くなりそれに歩調をあはす人馬の足並がだんくはつきりと見えてくる。武器や甲冑やその他の金具の眩く光るのが見える。行列は綠門の切目へくるとはばつと日光に照されてはまた次の綠門の蔭に沈んでしまふ。さうかうするうちに見るも美しく可愛らしい先驅の一隊が現れた。それは迦毗羅婆蘇都の貴族の子供たちで、彼等は行列のはるか先に雪白の駒を驅りながらその振立る頸の兩脇につけた花籠から間なく暇なく色々な花を散らして歩く。彼等は待設

けた群集の最初の歡呼に無邪氣な笑顔をもつて答へながら王や貴賓たちのはうに一禮しつゝ草地を横ぎつて城門のはうへまでも花を撒きながら進んで行つた。波濤のやうな奏樂が歩一步と近づいてきた。それは滿身花をもつて飾つた樂人たちが今日を晴れと力をこめて奏する大鼓、小鼓、笛、箏……等の合奏であつた。その次に牛皮製の大盾を背負つた歩兵がつゞいた。彼等の或者は等身の弓を持ち、或者は短い投槍を持つて、そしていづれも重たい段平を帯びてゐた。それから思ひくゝの武装をしたそれくの一隊が續いた後に最後に一樣に紺黒の馬に跨つて小盾と二筋の長槍を携へた騎兵の一隊が來た。人間の息と、獸の息と、汗の匂と、皮具の匂と、踏蹴られる葉や花の匂と、香水の匂とが甘酸ばく濛々といきれたつたなかを少し間をおいて、大なる好奇心と期待をもつて目をみはつてゐる市民と若い王子たち——彼等は重要な利害關係をもつてゐるだけそれだけ一層緊張してゐた——のまへに、東道の悉達多太子の後から山のやうな額を並べてすばらしい二頭の白象が現れた。それらは貴い香油で皮膚を磨かれて、鞞も、轡も、韃も、悉く金色に輝いてゐた。そしてそのかた方の象輻には寶冠をいたゞき、半白の長髯を垂れたスブラブツドハ玉、他の方にはまだやうやくに綻びそめた蕾の花の耶輪陀羅姫が乗つてゐた。萬人の眼は期せずして皆王よりはこのはうに集つた。



提婆達多の大な眼は鷹のやうに貪婪に輝いた。姫は純白の絹布を纏つて眞珠の頸飾とおなじ珠の手纏をつけてゐる。彼女は人々の眼にけおされるやうに伏目になつてゐるのでやさしげな瞳が長い睫毛になかばかくれてゐる。彼女はどこもかしこも尋常に出来てゐるがどこかといつてとりたてゝ人目をひくやうなところはない。たゞ體が程よくすらりとしていかにも釣合がよい。そして流石に王女にふさはしくどことなく靜に奥ゆかしく情深さうにみえる。

提婆達多は見た。そして

「なんだ」

と思つた。彼は勝手に孔雀のやうな乙女を想像してゐたのであつた。

「己はまあまつびらだ」

いたくも期待を裏切られた彼は首圖駄那王や他の王子たちと一緒に行列にくははつて城門をくゞりながらなんだかうま／＼と騙されたやうな不満を感じた。まことに耶輸陀羅はひとたび翼をふるつて衆鳥を驚かすところの孔雀ではなかつた。やさしい鷓鴣であつた。

提婆達多は幼少の時から宮女たちの寵兒であつた。彼がまだ十歳をこすかこさぬほんの子供であつた時から既に彼を戀する女さへあつた。彼は彼等の嘆聲を耳にしましたその抱愛をうけていつしか己の容姿について抜きがたい自信、自負心をもつやうになつた。そしてそれが強くなればなるほど美しくない者に對する侮蔑の念が深くなつた。容姿、それは彼がすべての人間を評價するにあつて常に最初の條件であつた。やうやく長ずるにしたがつて女たちの讚嘆は戀となり、抱愛は狂しい肉となつた。彼が眉目秀麗なる一個の青年となつて烈しい慾望に戦きつゝ若い獸のやうに色を漁つた時彼の的となつた女は悉く手の下に狂喜して身心を獻げて奴隸となつた。提婆達多王子、それは三千の佳麗の耳朵に、嬉しく、甘く、懐しく、快い響をつたへる名であつた。彼は獅子のごとく雄々しい容貌と肉體をもつてゐた。加之彼の性格、所行とは似てもつかぬ、最初の一瞥をもつて全き信頼と愛慕、を獲得するに足るところの天成の氣品をそなへてゐた。そしてひとたび彼が相手の歡心を得ようとして笑顔をつくる時にかの獅子は忽然として愛すべき鳩となり、その巧妙な態度と話ぶりとはあらゆる彼の容貌の缺點——彼とてももとより缺點はあつた——を蔽ひかくすに十分であつた。かやうにして秋波と密語のうちに人となりつゝ、幸多き日のもとに生れて、自位と富と力に事を缺かなかつた彼は、ひたすら女の渴愛の的となり、女に貪り飽くことをもつて第一の望とした



のである。

翌日には城外の廣場で種々の競技が行はれた。廣場の一方をかぎつた涼しい尼拘樓陀ニグロウタの森の蔭に天幕が張られて、その柱は悉く花をもつて包まれた。迦毗羅婆蘇都の城主は拘利の城主と席を並べた。その傍にある意味で今日の競技會の司であるところの耶輸陀羅姫が座を占め、左右には各王子、貴族、そのほか宮女たちが綺羅星のごとくに列つた。廣場の周圍は兵卒、庶民等の群集によつて寸隙もないほどにとり圍まれた。

四

競技は萬人の胸を轟かす撃々たる太鼓の連打によつて始まつた。競馬、徒歩競走、相撲、槍術、競射等凡そ戰場に役立つべきあらゆるものはおほかた残らず行はれた。雄壯な戰車競走がすんで最後の劍術の仕合になつた。首圖馱那王はこの仕合を特に王子たちのために選んだので、それは競技者にとつても見物にとつても容易ならぬものであつた。人々はその選手が各の支族を代表する王子であるといふことのほかになんとなくそこに優勝者への褒美として耶輸陀羅姫が賭けられてゐるやうに思つた。高貴な選手たちもおなじ思であつたが、よしそれが事實とならうとなるまいと、假にも各我一族を代表して、二人の王と、一人の若い王女と、並居る廷臣と、宮女と、幾萬の人民のまへに、ひと度敗れては再び雪辱の日を期しがたい大事の仕合であると思へば、彼等の胸は流石に烈しく鼓動せざるを得なかつた。彼等は支度のために席を立つて彼方の天幕のなかに姿を消した。

やゝあつて相圖の太鼓がひとときは力強く鳴り渡つた。場内の空氣は妙にひきしまつた。その時王子たちは各甲冑に身を固め、面頬だけは着けずに小姓に持たせて、かた手に小形の圓盾をさげながらしづ／＼と現れた。彼等の武者振はあつばれ六人の神將のやうに見えた。中にも二人他に擡んで



て丈高く牡牛のやうに屈強な難陀と提婆達多の姿はあたりをはらつてゐた。彼等が王たちの玉座にむかつて敬禮した時に首圖駄那王はこれらの頼もしい未來の釋迦族の支配者に對して抑へきれぬ矜と喜の微笑をもつて點頭いた。その時スブラブツドハ王よりこの晴の仕合の一の勝利者への曳出物として前日王女の乗用となつたあのすばらしい白象が曳出された。それは鞦も、轡も、轡も、悉く黄金をもつて飾つたうへに、金銀の瓔珞を纏はれ、珠玉を綴つた流蘇をかけられて、その背後には純白の絹布を、そのうへに燃えたつやうな緋を敷き、さらに濃い紫をかさねてあつた。彼がその山のやうな頭をゆさ／＼とゆりながら象師に曳かれてのつさ／＼と歩み出た時に人々は皆覺えず讚嘆の聲をもらした。もはや誰一人この象と／＼もにかの王女が賭けられてゐるのだといふことを疑ふ者は無かつた。利口な象は現在己の位置の如何なるものであるかをさ／＼とつたかのやうに大きな耳朵をあふつて心地よげに瓔珞の音をき／＼ながら鼻を巻きあげてひと聲高く吼えた。古の印度の日は驚嘆の眼をみはつてこの場の光景を見降した。首圖駄那王は我劣らじと、釋迦族の重寶といはれてゐる、かの驍勇かくれなかつた父シンハハヌ王の手馴の弓を賭けた。それは故王が數しれぬ戦に於て双向ふ敵の膽を寒からしめた名だたる強弓である。王子たちは身うちの戦くのを覺えつゝ首圖駄那王の手から籤をひいた。

彼等は籤によつて二人づゝ三組に分れた。跋提唎加と難陀、阿菟樓駄と悉達多、摩訶那摩と提婆達多、そして各組の勝利者三人のあひだに仕合が繰返されて最後の優勝者が稀代の賭物を授かる名譽と福德とを得るのであつた。



難陀と提婆達多は易々と勝つた。悉達多は苦戦の末はづかに勝利者の數に入つた。首圖駄那王は二人の王子が揃ひも揃つて勝利者となつたことを内心ひどく喜んでゐた。三人のあひだにふたゝび籤がひかれた。そして先づ難陀と提婆達多とが勝負をすることになつた。提婆達多はやをら立ちあがつて小姓の捧げる面頬をうけとりながらじつと相手の様子を見た。王子たちはいづれも釋迦族の名を辱めぬほどの武藝のたしなみはもつてゐたけれど就中難陀と提婆達多ははるかに一頭地をぬいてゐた。それ故最初から提婆達多の眼中には難陀のほか敵はなかつた。その堂々たる容姿といひ、力量といひ、手練といひ、彼のみが恐るべき敵であつた。難陀のはうでもおなじであつた。人々の思もおなじであつた。それ故二人が立ちあがつた時に場内はどよめき渡つた。人々は異様に緊張して二人の一舉一動をも見逃すまいとした。首圖駄那王は氣が氣でなかつた。彼は管に我子の一人を勝利者たらしめたかつたのみならず一族の重寶をなるべくならば我家にとどめておきたかつた。

難陀は提婆達多を見て微笑みながら面頬をつけた。提婆達多も面頬をつけた。彼は頭をふつて二三遍兩腕をあげて肩をゆるするやうにしてみた。重たい甲冑の皮具がきゆつくと鳴つた。彼等は長

劍をすらりと抜いて互に右手をまつすぐに敵のはうへのばしてちやうど劍尖と劍尖とが觸れあふ點に姿勢を正して心に因陀羅を念じつゝ一禮をかはした。勿論劍は危険のないやうに刃をひいて切先を鈍らしてあつた。禮が終ると同時に彼等は「やつ」と聲をかけて左手の盾を前に右足をひいて斜に身を構へた。磨きあげた青銅の盾がきら／＼と日光を反射した。人々は鳴をしづめて固唾を呑んだ。二人は盾で身をかばひながら敵に毛ほどの虚もあらばつけ入らうとして窺ひあふ。彼等のあひだにはなにか目に見えぬ軌のやうなものがあつて支へるものの如く一定の距離をとつたなり二匹の牛の戦ふやうに凄じくしかも靜にじり／＼と一進一退する。熱しやすい提婆達多はもうこみあげてくる敵意が抑へきれなくなつた。彼の眼は血走つた。ぶる／＼と五體のふるふるのを感じた。そこで彼はわざとすこし退くやうに見せかけた。そして難陀がつけ込んで踏み出さうとするはずみを捕へて後へひいた右足で碎けるばかり地を蹴つて約のごとく身を躍らせながら「ほう」と聲をかけて鐵壁もとほれと敵の胸を目掛けて突込んだ。難陀は身を退く暇もなく電光石火と盾をもつて撥ねのけながら反對に鋭く一突を加へるのを提婆達多は巧にがちりと盾でうけとめてさつと飛びしさつた。人々の口から我知らず感嘆の聲が漏れた。二人は最初の一回で互に敵の恐るべきことを知つた。それからやゝ暫の間彼等は互に虚を見出さうとして右へ右へと廻りあつてゐたが忽ち雙方同時に突進して



猛烈に突きあつた。盾と劍と、劍と劍と、盾と盾と、打ちあひ觸れあふ音がひとしきりつゞいた。さうして息をつぐまもなく喚き叫んで戦つてゐるうちに終に提婆達多が最初の一點をとつた。その次には難陀が一點を得た。

## 六

戦は頂點に達した。闘士は逸りに逸つた。彼等は野獸のやうに叫び、野獸のやうに喘いだ。難陀は決勝の一點をとるべく盾を高くあげ頭を低く上體を屈めて敵の腹をねらつた。提婆達多は盾をさげて専ら防禦の位置に立つやうにみえた。その時いかなる虚を見出したか難陀が猛然と飛込んで微塵と突出す劍をこなたは得たりと盾で叩き落すや否や敵が思はず低くした盾をこえて割れるばかりの一撃をその腦天に加へた。人々は覺えずわつと聲をあげた。難陀は終に敗れた。提婆達多は得意の微笑をとゞめ得なかつた。

さてそのつぎの相手は悉達多であつた。當の提婆達多は固より人々も、首圖駄那王さへもこの勝負については悉達多のはうに殆ど期待どをかけなかつた。とかく冥想好きな隠者めいた彼は平生からあまり武藝に身を入れるやうにはみえなかつた。先刻の彼の勝利も寧ろ僥倖といつたはうがよいかもしれない。一方に提婆達多は日頃武術の鍛錬には頗る熱心であり従つてそれだけの腕前も自信も名聲ももつてゐた。それはひとつには彼の生來勇武な氣性からであつたが、ひとつにはそれが直接間接に婦人の愛慕を得るのに必要缺くべからざることゝ考へたからであつた。それで今日の仕合も



彼は初から己一人のために備されるものゝやうな気がしてゐた。悉達多の腕前はわかつてゐる。提婆達多は己の勝利を豫感した。併しながら彼はどうせ勝つものなら悉達多に對しまた首圖駄那王に對してあまり愛想のない勝ちやうはすまいと決心した。そしてそれが結局自分の奥ゆかしさを人に示す所だと思つた。

それはさうと悉達多にも流石に今日は若い血が湧くやうにみえた。彼は兄弟の讐をかへしかつは名譽ある一の勝利者とならうと思つたのであらうかいつになく意氣込んでゐた。彼等は一禮して立合つた。提婆達多は一生懸命に戦ふやうに見せながら乗すべき機会を殊更に見逃した。悉達多は盛んに突込み打込みした。それを程よくあしらひながら提婆達多は頭を見はかつて敵に一點を與へた。人々はわつと喝采した。それほどそれは悉達多にとつての手柄であつた。提婆達多は苦笑した。彼はやつぱり自分が故意に譲つたのだといふことを皆に知らせたかつた。その次に彼は苦もなく一突を敵の胸に加へて一點を得た。悉達多は急込んだ。彼はどうかして決勝の一點をとらうとして猫のやうにねらつた。提婆達多はそれをしをらしと見ながら右に左にあしらつてゐた。彼は綺麗に立派に勝たうと思つた。彼はまた今あの女たちの眼は悉く自分一人に注がれてゐるのだ、あの王女の眼も自分を見つめてゐるのだ。そして彼等は皆自分の勝利を願つてゐるのだと思つた。さう思ふと彼は

急にかつと昂奮した。そしてふら／＼と足が浮くやうな気がした。はつと思ふまに敵は彼の盾をこして心臓部を目がけて猛烈な刺突を加へた。しまつた！ 提婆達多は盾をもつて危く敵の劍を撥ねあげた。が已に遅かつた。劍尖ははづかにそればかりで彼の肺部をづんと突いた。彼は思はずたじ／＼として後ろにどうと倒れた。人々はどつと聲をあげた。首圖駄那王は飛立つほどの喜を抑へるためにしかと玉座の端をつかまへた。スブラブツドハ王は無遠慮な大聲をあげて悉達多を譽めた。



提婆達多は器量悪く起きあがつて面頬をぬいだ。彼は茫然自失した。大地が足下に沈んでゆくやうな気がした。彼は凡ての他の人々とおなじく悉達多が將來佛陀となることを知らなかつたごとくこの太子が今日の優勝者であらうとは夢想だもしなかつたのである。提婆達多は我知らず王女のはうを見た。彼女は顔を赤めて伏目になつて身じろぎもせずにある。彼は譬へやうのない失望落膽のうち辛うじて慰藉を得た。それは彼女が彼の不幸な敗北を悲しんでくれるのだと思つたから。その時悉達多はかの白象に乗つて退場しながら思に沈んで立去りかねてゐる提婆達多にむかつて挑戦するやうに呼びかけた。

「提婆達多」

提婆達多は愕然として顧みた。そしてこれ見よがしにかの弓を振りかざしてゐる悉達多を見た。提婆達多はさつと顔色をかへた。そして唇をふるはせながら無言のまゝにはたと相手を睨めつけた。悉達多は嗜みのない我ふるまひを悔ゆるやうに顔を背けてさりげなくそのまゝ退場した。提婆達多は他の王子たちの後に一人はなれて退場しながら今もなほ彼女の温みの残るかと思はれるその紫の

敷物のうへに坐つてしづ／＼とひきあげてゆく敵の後姿をいつまでも／＼見送つてゐた。

悉達多は何故かゝる思慮をかいだ無作法をしたか。それはあまりに自分にも意外であつた勝利に有頂天となつた若者のその場かぎりの出来心であつたか。またはその父とおなじく稀代の重寶を危く我手にとどめ得た狂喜からであつたか。或は……いづれにせよ彼は提婆達多に對して些の敵意をももつてはゐなかつた。彼は自今日の勝利の僥倖であることを知つてゐた。それ故彼の行爲は寧一場の戯と見るべきであつたかもしれない。さりながら彼に於てそれが事實戯であつたにせよ提婆達多にとつてはそれは決して一場の戯として見逃すことは出来なかつた。彼はすでに萬人の目の前に、殊に幾百の宮女とかの耶輸陀羅のまへに敗北者となつてその平生の矜持に相當した屈辱、訴ふるところもない不平に面もあげ得ずにある。彼は幾萬の人にとり圍まれた競技場のまん中で獄門にかけられてゐる氣持であつた。彼は全身に無数の耳目が出来て凡ての觀衆が彼のために同情の言葉を囁き同情の眼を注ぐのを見るやうな気がした。彼はそれがたまらなかつた。彼は常に勝利に輝く者であらねばならぬ。彼は常に讃嘆され渴仰されねばならぬ。彼は常に光背を負うて歩かねばならぬ。然るに今や彼は最もよく考へても他から同情され憐まれる者であつた。敗北。それは已に彼にとつて十分であつた。かゝる地位に蹴落されたうへに他人から同情され憐まれる。それは口を開いた傷



口をせよられるに過ぎない。

「これは何事だ」

提婆達多は思つた。彼はせめて相手が難陀であつたらと思つた。おなじく敗れるならば敵らしい敵に敗りたい。いはゞ名もない雑兵に首をかゝれたこの屈辱。

八

彼は常々己と全く性格を異にした、陰氣臭い、瞑想好きな、徒に瘦せて長大な、武藝や風采を念とせぬ、彼の考に従へば男らしい男ともみえぬ悉達多を好かなかつた。竊に輕蔑してゐた。然るにその醜い腑甲斐ない雑兵は彼の不意を襲つて首をかいたばかりかその面に唾を吐きかけた。彼の血は燃えあがつた。彼はこのまぐれあたりの弱敵に對して消しがたい鬱憤と憎惡を抱いた。彼には今度の出來事の全體が彼を陥れんがために殊更にたくらまれた詭計のやうに考へられた。そしてその卑劣な張本人が悉達多であつたかのごとくあらゆる敵意がそこに集中した。たゞこの際提婆達多の唯一の無二の慰藉は耶輸陀羅の心が己に注がれてゐると思はれることであつた。彼の負けた時に彼女は顔を赤めてさしうつむいてゐた。

「姫は私の勝利を願つてゐたのだ」

「姫は私の不運な敗北を悲んでくれたのだ」

それは彼が彼女を愛するからではなく、また彼女が拘利の王女であるからでもなく、たゞ彼女が今日の仕合の本當の賭物だと思はれ、そしてそれが今や相手の手に渡つたものであるゆゑに一層彼



が喜んで得意にうけることのできる唯一の同情であつた。

「悉達多、誇るなら誇れ、弓や象は貴様にやつた。だが女だけはこつちのものだぞ」  
これが彼の苦しい胸のうちであつた。

第三日めの夜には愈聖朝王女をつれて歸城するスブラブツドハ王と王女たちのために盛大な別宴が張られた。人々は、殊に若い王子たちは、さうした場合屢人の感ずるやうな、強くはないがやるせない、淡いけれども深い一種の寂しさを感じてゐた。就中提婆達多は折角懐にはひつた鳥が逃げていつてしまふやうな氣持であつた。

會場の周圍には適當の間を置いて背の高い大香爐がおかれ、白檀の煙が絶えず立ちのぼつてゐる。到る處に華曼が懸けられ、花瓶には色の濃い香の高い花が照るやうに盛られた。汁の多い熱帯の果物は山のやうに積まれ、甘蔗酒と葡萄酒は甕に溢れた。人々は皆赤い顔をして元氣のよい笑聲が時々どつと起る。酒豪のスブラブツドハ王は迦樓羅鳥のついた盃からたてつづけに葡萄酒をあふつた。首圖駄那王も無類の上機嫌でいつになくよく飲んだ。その時王の自慢の迦毘羅婆蘇都宮廷の踊子たちが現れて満場の大喝采のうちに踊をはじめた。囃子方は一方に座を占めて琴、笛、箏篋等

を合奏する。踊子たちはたゞ腰のまはりに短い絹布を纏ひ、そのうへにいろ／＼の花を綴つた流蘇を腰袋のやうに垂れたばかりの裸體で、猫みたやうに軽く爪立ちながら、囃子にあはせて面白く踊る。彼等のかた手に孔雀の羽をつけた手鼓をもち、かた手の指先で巧に拍子をとりながら、環になり、列になり、往きちがひ、廻りあひながら、紺黒の大きな眼に蜜のやうな媚を湛へ、柘榴の花のやうな唇のあひだから貝のやうな齒をみせながら、褐色の兩腕をしなやかに揺かしながら、乳房や、腹や、背なかや、臀や、腓や、そんなところの筋肉を奇妙にふるはせながら、足くびにつけた鈴の音をかしく踊りまはつた。彼等は寧ろ美しい、若い、馴らされた獣のやうにみえた。若い王子や貴族たちの血は湧きたつた。けれども提婆達多の眼は絶えず耶輸陀羅の眼ばかりを執念く追つてゐた。その眼は逃げるやうに始終彼方此方にそらされた。



その歡樂の最中にスブラブツドハ王はつと立ちあがつて、白髯をゆるがせながら、この度の欺待に對して懇に謝意を述べたのち、更に言葉をあらためて、この交誼の礎を永久に固めんがために耶輸陀羅を悉達多太子の妃に納れたいと申出した。このことは實はこの三日間の滞在の中に既に内談が調つてゐたので今はいはゞ假の披露に過ぎなかつたのである。それ故それは一も二もなく即座に承諾された。耶輸陀羅はさつと頬を染めてさしうつむいた。そこに隠しきれぬ嬉しさが漂ふやうにもみえた。悉達多の顔にも流石に喜の困惑が見えた。提婆達多は二人の顔を見くらべて憤怒と嫉妬に燃えた。彼は思はず佩劍の柄を握りしめた。一同は立ちあがつて盃をあげて一齊に、迦毗羅婆蘇都と拘利の萬歳、首圖駄那王とスブラブツドハ王の萬歳、そして多幸なる花嫁花婿の萬歳を唱へた。提婆達多は過失を装つて殊更祝盃をとり落して微塵に打碎いた。その時歌女たちは音樂の音にあはせてことほぎの歌をうたひだした。

拘利と 迦毗羅婆蘇都と

阿夷羅跋提と 祈連禪跋提と

ならび立ち ならび流るゝ

そのごとく ならびませる

さく花の 榮ゆる君

千代にもが 萬代にもが

千代にもが 萬代にもが

翌朝貴賓たちは各その城に歸つた。

提婆達多は地獄の苦惱をうけた。彼は殆ど狂暴な狩獵に氣をまぎらさうとしたが何のかひもなかつた。さしにも強い彼の肉體も身心の過度の試練に疲れはてた。彼は眠ることも食ふことも出来なかつた。彼の頭には絶えず一つ事が水車のやうに廻つてゐた。迦毗羅婆蘇都、耶輸陀羅、仕合、悉達多、別宴、迦毗羅婆蘇都……そしてそれはさながら同じ事實が眼前に繰返されるかのごとく彼にまさしくと同じ苦痛、憤怒、憎悪、嫉妬を喚起した。彼は一方にその苦悶から逃れよう／＼とあせ



りながら一方には反對に飽くまでも我からその苦い記憶を呼びさましてその苦悶に身を委ねた。悪念は悉達多のはうへのみ向けられた。提婆達多はいかなる場合にも決して眞に女を憎むことが出来なかつた。なぜならば一切の女は本來彼に好意をもちまた彼の薬籠中のものと考へてゐたので。彼は自ら陥つた笑止な惘然な地位に對する羞恥をそのまま悉達多に對する憎惡にかへた。

「悉達多がなんだ」

彼は思つた。

「あの陰氣臭いひよろ長い男が。腕前なら男前なら己の足を甜めるにも足りないじやないか。」

とはいへそれはなんの足しにもならなかつた。その腑甲斐ない男にまんまと女を渡はれたのは彼であつた。彼はまた思つた。

「あんな女がなんだ」

そして自分がこれまでに弄んだ、これから弄び得る美しい女の大勢について考へた。また悉達多との艶福の差について。併し今更そんなことは氣休めにさへならなかつた。事實彼はみじめな敗北者であつたから。

## 十

ト笠と占星によつて定められた婚姻の日が日一日と近づいてきた。釋迦族の諸王の城市はその噂で湧きかへつた。悉達多と耶輪陀羅は恰も古譚中の勇士と美人のやうにつくりあげられてしまつた。提婆達多の惱は譬へやうもなかつた。彼の頭には「殺害」の考が絶えず往來した。彼は實際短劍の刃に毒を塗りさへした。そして彼に些の休息も安眠も與へぬ臥榻に身を横へながら膾にしても飽足らぬ悉達多を刺殺す光景を想像した。彼は思つた。

「ひと思に殺してはいけない。苦痛が永引くやうにすこし急所をはづさなくてはいけない。肺を刺してはならぬ。心臓もよけなくてはならぬ。脇腹を程よくあまり深くないやうに……」

彼はとつぷりと毒を塗つた短劍の先がぶつりと相手の肉へくひこむところを思つた。それから傷口が糜爛して柘榴みたやうに口をあいて紫色の腐れがだん／＼内臓のはうへひろがつてゆくところを、五體を痙攣させて七顛八倒して呻くところを、……そんな惨忍な想像に耽つてゐる時彼の歪めた口もとにはさも氣味のよさうな微笑がもれた。併しながらこんな復讐は到底彼を満足させることは出来なかつた。彼はまた思つた。



「彼奴を刺して暫の間のたうちまはらせてそして自分も死ぬ。自分が死なないうまでも相手を無理やりに獲物からひきはなすと同時に自分もそれを放棄する。それが何になる。それはとりもなほさず我と我が敗北を自證するものではないか。悉達多は死んでも永久に勝利者の名を得るであらう。そして耶輸陀羅は彼のために泣いて自分を呪ふであらう。それは結局恥の上塗ではないか。この屈辱に對する唯一の最もふさはしい報復手段は勝ちほこつて有頂天になつてゐる相手の手から女を奪ひ取ることだ。現在の敵の勝利をしてよりみじめな敗北の前提たらしめることだ」

彼はかう考へた。そして毒双よりも一層有毒且有効らしい、自信ある彼の天賦の魅力、手練手管の悪辣な武器をもつて如何にしても耶輸陀羅を我物にしようと思ひ切つた。もとよりこの冒険の頗大膽であり困難であることはよく承知してゐた。併し結局の成功を疑はない故にそれはそれだけ張合のあるものとなつた。實のところ彼は耶輸陀羅そのものに對してはたゞ一般に男が女に對してもつほどの單に性の相違からくるところの牽引のほか殆ど何も感じてはゐなかつた。けれども今彼女は指もさされぬ他人の持物であつた。殊に憎んでもあまりある敵によつて克取られたところの。そして相手はそれによつて無上の幸福を得たやうにみえる。それ故彼は無理にも非道にも女を手に入れねばならなかつた。彼は他のものに食はせまいとしては己の吐いた物をも食ひもどす大であつた。

耶輸陀羅は悉達多の新妻となつた。招かれたるその日提婆達多は驚くべき平靜をもつて迦毗羅婆蘇都の祝宴に臨んだ。そのうち彼は影の形にそふがごとく悉達多に附纏つて乗すべき機会を窺つた。彼は己の悪辣なる企について何等良心の呵責を感ずることはなかつた。それが意識的なるは無意識的なるとを問はず苟も彼の自尊心を傷けた者は即ちあらゆる復讐……といふよりは寧ろ懲罰……に彼を権利づける者であつた。そしてその者は己が犬猫以上懲罰に値するものとせられたることについて彼に感謝すべきであつた。



提婆達多は急に性格が一變したやうにみえた。彼は狩獵や、武術や……彼の生活の最後の目的であつた女を漁ることさへもふつゝりとやめてひたすら當時の形而上學の研鑽に没頭した。生來明敏な頭腦をもつてゐた彼は間もなくその方にかなりな造詣をもつやうになつた。その間に彼はまたいつしか悉達多の無二の友となつてゐた。人は屢白馬を驅つて程近い阿彌都檀那王の居城と迦毗羅婆蘇都のあひだを往來する彼の姿を見かけた。

悉達多と耶輸陀羅のよそめにもしるき睦しさを、その些々たる一舉一動、たとへば彼等が不用意に嬉しげなひと目を見やつたこと、甘いひと言を交したこと、それらは悉く提婆達多の胸に烙鐵をあてた。悉達多が彼に對する遠慮から彼のまへで自分の耶輸陀羅に對する感情を出来るだけおしかくすことさへが一層彼の嫉妬をあふつた。彼にはそれが「この女は私のものだぞ、お前のゐない處では何でも思ふやうにされるのだぞ」といふことを見せつけられるやうな氣がした。彼の苦悶は恐しかつた。とはいへ彼は輕率に淺慮にそれを色に見せるやうなことはしなかつた。そして驚くべき隱忍自制をもつて平然と眺めてゐたのみならず屢新婚の夫婦の相互の愛情をそゝのかすやうなことをさ

へいつた。耶輸陀羅の無邪氣な無思慮からして楽しい嬉し忘れがたい思ひ出としてかの競技の日  
のことが語り出されることがあつても彼は微塵も不快の色を見せず上手に相槌を打つた。彼は現  
在與へられるこの苦痛をいつかは十倍にして返すべき預物としてじつとそれを耐へ忍んだ。復讐の  
決心は石のごとくに堅くなつた。

悉達多が新妻の愛に酔つて浮々と夢うつゝの日を送つたのも暫の間であつた。日を経るに従つて  
彼はまた従來の憂鬱と思案の生活にかへりはじめた。彼は若い貴族たちの無上の快樂として耽溺す  
るところの女や、酒や、賭博や、狩獵や、……から遠ざかつた。それは彼の仲間をして内心やうや  
く彼を侮らせ、嫌はせ、疎んぜしめた。今や提婆達多のみが彼の唯一の友であつた。提婆達多は悉  
達多の一風變つた隠者めいた生活の無二の同情者、理解者、助長者、そして伴侶であつた。二人は  
度々手を携へて小暗い森の奥に遣ひいりつゝ日を暮し、また人氣なき城樓に夜をふかして語りあつ  
た。

悉達多のさうした傾向の著しくなるにつれてあはれた耶輸陀羅の胸にはやうやく抜きがたい寂し



さが根をおろした。それを彼女は草の芽のやうに幾度かつんだけれど終にそれは丈夫な草のやうに成長してもはやどうすることもできなくなつてしまつた。彼女は夫がいかに深く自分を愛してくれ  
るかを知つてはゐたけれどしかも彼女が夫を愛するやうなしかたでは愛してくれなかつた。彼女は  
花のごとき貴族生活の盡くることなき歡樂の離るべからざる伴侶でありたいと希つた。それにもか  
かはらず彼女はもはや夫の没頭せる新生活——寧ろ舊生活——の侘しい傍觀者に過ぎなかつた。二  
人の愛の泉は甘くまた温かではなくはなかつたけれどその底にひとつの冷い石がかくれてゐた。提婆  
達多は己の遠大なる姦計の次第に成就するのを見てひそかに舌を吐いた。かくのごとくにして提婆  
達多にとつては苦しい試煉の、冒險の、悉達多にとつては光明の探求の十年が過ぎた。

十二

この時思設けぬ耶輸陀羅の妊娠は提婆達多にとつて新なる痛撃であつた。彼は今さらのやうに目  
のまへに悉達多と耶輸陀羅のを見せつけられるやうな氣がした。また彼女の肉體をとほしてそ  
のふくれた胎内に蠢いてゐる小さな悉達多をまさしくと見るやうな氣がした。彼は烈しい嫉妬に瘦  
せた。そのうへ彼はこのことのために折角成就しかけた謀計が根柢から覆されてしまひはせぬかと  
いふ懸念を抱かざるを得なかつた。性慾は愛なき夫婦をもなほ力強く結びつける。我々は單なる性  
慾によつて結びつけられたる多くの人間の一對を見る。彼等は交尾期に於ける畜生が相互の好惡も  
適否も顧る暇なくたゞ鼻をつく異性の臭氣に盲目的にひきつけられるやうに互にひきつけられてゐ  
る。そしてその性慾さへが牽引力を失つた時にもその性慾生活の記念物なる「子供」はなほ恐しい肉  
鎖となつて無慙に醜惡にその生産者を一緒に縛りしめぬ。

に つながれ  
て痴態をさらすやうに。提婆達多の危惧には十分根柢があつた。耶輸陀羅もまたこのことによつて  
悉達多との融和がとりかへせるであらうといふ望を抱いてゐた。併しながら事情の困難、形勢の不  
利は愈益提婆達多の惡念を狂暴ならしめるに過ぎなかつた。



ある時、ある日、城外の廣野で例年の耕耘祭が行はれた。茫々とした廣野の草はしとどに露にぬれ、露は朝日の光をうけて玉のやうに光つてゐる。數十頭の白牛は足先に快い冷を覺えつゝ濛々とたちのぼる陽炎と甘い草の香に酔つて、あるものはけだるさうににれがみ、あるものは抑揚のない豪放な聲を爽な朝空にあげてゐる。王の牛には角にも軛にも金をまき、貴族の牛には銀がまいてゐる。天も地も日光に溢れてゐる。野なかに築かれた祭壇のまはりには法服をつけた僧侶のほかにも首圖駄那王をはじめ、悉達多、難陀、たま／＼來合せた提婆達多、そのほか大勢の貴族たちがならび、その外側を人民たちが圓くとりまいてゐる。嚴な祈禱僧の監督のもとに物々しい祭式がはじまつた。因陀羅を勸請する勸請僧の聲。音樂にあはせて歌ふ詠歌僧の讃歌。低聲に唱へる行祭僧の祭詞。堆く積みあげた香木の薪から炎々と立ちのぼる祭火のなかへ、牛乳、酪、その他種々の供物、就中因陀羅の最も好むところの蘇摩酒がさかんにふりそゞがれる。蒸氣は迸り、煙は渦巻きのぼる。神は祭壇にあつてその匂をとるのである。首を後へひき縛られた犠牲の山羊が祭壇のまへに横へられ、その伸びきつた喉へ小刀がぐさつきさゝれる。血が滾々と流れだして地にしみこんでゆく。その時悉達多は敬虔にみちて聲を呑んでゐる人々のなかゝらそつとぬけだして、そこからすこしはなれたと

ころに立つ大きな闊浮樹の涼しい蔭にはいつて佇んだ。提婆達多もまた式場をはずし悉達多の跡を追つておなじ木蔭へきた。



「提婆達多、私はあのいたづらに倦怠を催させるなが／＼しい祭式に些の意義も価値も見出すことができない。そればかりかあの愚な血腥い習慣に對してたまらない厭惡を感じる。」

「悉達多、私もまつたく同感である。私も實は殆ど座に堪へなかつた。併し人々、殊に王に對する遠慮から辛うじてこらへてゐた。その時卿が席をはづしたので私もこれ幸と跡を追つてきたのである。」

悉達多ははづかに微笑を浮めながら黙つてうなづいた。そしてじつと足もとへ目をおとしてなにかほかのことを考へてゐた。が、やゝあつて彼のそばに同じやうな姿勢をとつてゐる友のはうをかへりみながら呼びかけた。

「提婆達多」

提婆達多は顔をあげた。

「この頃度々卿に語つたあの事を私は愈決行しようと思ふ」

「……………」

「これまですでにあまりながく考へ過ぎた。今は實行に入るべき時である」

提婆達多は困惑の色を見せた。

「私はなんと答へてよいかわからない。私は卿のためには雙手をあげてそれを祝ひたいと思ふ。とはいへ卿を愛し卿を力とする人々を思へば私は……」

「いや／＼もはや今となつては卿の意見をきくまでもない。提婆達多、私は卿にこれまでの厚誼を感謝しておく。我々は暫く相見ることがないであらう。或はこれが最後とならぬとも限らない。提婆達多、私はくれ／＼も卿に頼んでおく。私のこの企てについてはゆめ／＼人に口外してくれぬやう。唯一人の道の友と思へばこそ卿にのみうちあけるのである」

「悉達多よ、安んぜよ。私がどうして卿の邪魔をしようぞ。私こそ卿にくらべればはるかに自由の身でありながらこのやうに意氣地なく卿に後をとつてしまつた。私は卿のまへに心から己の怯懦をはぢる。併しながら私とても終には卿の跡をふんでゆく日がくるであらう。卿もしはやく先に道を見出したならば希くはその幸福をわかつに吝ならざれ」

その時二人の會話は祭壇に神を祭り終つてさらに耕耘の式をはじめべく彼等のはうに近づいてくる人々によつて妨げられた。

數十頭の白牛は王のをまんなかに、貴族のもの、人民のもの、といふ順序に一列にならべられた。



日はかうくと金銀の飾金具を照してゐる。首圖駄那王は手づから牛を馭して荒地を鋤きはじめた。人々は皆一齊にそれにならふ。牛はぎし／＼と軋る輓の下に逞しい肩を張つて鋤をひく。肥沃な赤土が長い隴となつて鋤先のうしろに走る。小鳥の歌は叢林に響き、栗鼠は梢を渡り、甲蟲は飛び、蜘蛛はすべる春の野に、かやうにして耕耘の式がをはつた。

その夕、提婆達多はひとりほくそゑみつゝ心地よげに馬を驅つて己が城に歸つた。

#### 十四

併しながら事は提婆達多の期待し希望したやうに迅速に運ばなかつた。悉達多の胸中にいかなる戦があり、何故の逡巡があつたか。彼は彼の友の待ち焦れる或事を決行する様子もなく唯これまでよりは一層沈鬱な幾日を過した。提婆達多はもどかしさに堪へなくなつた。併し彼は躁急に輕擧して折角こゝまで仕上げた仕事を自ら打壞すやうな淺慮なことはしなかつた。彼はじつと辛棒して熟柿の落ちるのを待つてゐた。

ある日悉達多は従者の闍鐸迦ちやくだともに出遊した。そして日暮まへに河岸の花園に疲れた身體をやすめてゐた。やゝあつて城に歸らうとして馬車に乗つた時に父王から使がきて耶輸陀羅が男子をあげたことを告げた。悉達多はそれをきいて冷に

「羅睺羅らうらが生れた」

と獨語した。首圖駄那王は使者からそのことをきいてなんの思慮もなく王孫を羅睺羅と名けた。悉達多が城門を入らうとするとき宮殿の上階から眺めてゐた従妹の枳婆羅多彌こたみは歌つた。



かゝる子をもつ父母は幸なるかな  
かゝる夫にかしづく妻は幸なるかな

悉達多の覺めたる心はこの歌をきいてひたすら眞實の幸福を思つた。そしてたゞ／＼自分にこの高い思念を思起させた彼女に感謝のしるしとして寶玉の頸飾をはづして與へた。彼女は悉達多の心を知らず、悉達多は自分を戀してゐるのであるとの儂い思を抱いてゐた。

それから七日の後、夜半、悉達多は竊に城をいでた。父母を棄て、妻子を棄て、富と名と力とを棄て、歡樂盡くることなき太子の生活を棄て、いづこをあてともなく、甘露のごとく甘く、眞珠のごとく美しき眞理の果を見出すべく。

傳説によれば、悉達多は閻鐸迦と出遊の際、路に老人と病者と死屍とを見、最後に威儀ある沙門の姿を見て終に出離の心を決した。彼は城を出ようとするにあたつて耶輪陀羅の寢室へ行つた。彼女はかた腕を子供の頭にあて、靜に眠つてゐた。悉達多は子供を抱いてみたいと思つたが耶輪陀羅の目をさますことをおそれて

「私は佛陀となつてからこの子を見よう」

と思つてそのまゝそこをたち去つた。

追手は空しく歸つてきた。彼等は太子のあとを尋ねて跋伽仙人の苦行林へ行つた。彼等は仙人から太子が一宿の後そこを去つて阿羅邏迦蘭のところへ行つたといふことをきいて急いで跡を追つた。そして路で沙門の姿となつた太子が一樹の下に端坐思惟してゐるのを見出した。彼等は人々の悲嘆の有様を語つて太子の歸城を勸説し哀願した。太子の答はかうであつた。

「私として恩愛の情を知らぬことがあらうか。たゞ私は我人のために永く生老病死の苦を除かんがために家を棄てたのである。今私が人々に背き去るのは將來一層深く眞實に彼等と和合せんがためである。私はこの願をもつて家を出た。私はどうあつても歸ることはせぬ。お前たちは歸つてこの旨を人々に傳へよ。」

太子はいひすて、彼等と別れてひとり阿羅邏迦蘭のところへ向つた。



首圖駄那王はもとより、耶輸陀羅の嘆はよそのみる目もいたはしかつた。おそらく彼女自らもこれほどまでに自分が夫を思つてゐるとは知らなかつたであらう。何人も何物もはや彼女を慰めることは出来なかつた。夕暮彼女はつきせぬ涙を人なきところに一人泣きたいと思つて、侍女たちをしりぞけて宮殿の望樓へのぼつて行つた。まだひよわい體のよろめくのをかた手を壁にあて、支へながらうす暗い廻り梯子を力なく踏んでゆく。なにかそのうへに救でもあるかのやうに。そしてあへぎ／＼からうじて望樓の頂にのぼりついた。それは天井の低い、四方に窓を開いた、狭い方形の室である。彼女がそこに姿を現した時にちやうど太陽が地平線の彼方に沈んで、今まで横に照されてゐた室のなかゝ急に暗くなつた。眼下に黒く見える迦毗羅婆蘇都の町にはすでに此處彼處に火影がきらめきはじめた。その外側には垣々として際涯なき耕地と牧場がひろがつてゐる。人々は皆家に歸つて、野は靜である。家畜は草地に群をなして眠に入らうとしてゐる。彼方此方にほの白く光る貯水池と溝渠の水。到る處巨怪のごとくに横はる森林。その森林のひとつを貫いて遙に東南のかたにうねつてゆく路。それは悉達多が彼女を棄て、逃れ去つた路である。耶輸陀羅はなほそこに悉達

多の影が見えもするかのやうにその路にそうてどこまでも／＼目を走らせた。それは心なく夕闇の底にかすんで思ふ人のゆくへをとざしてしまふ。

「悉達多」

彼女はその消えてゆく路の末を眺め、眺め、眺めつくして呼んだ。そして誰憚らず聲をあげて泣いた。大なる夜は潮のごとくによせて平野を呑みつくした。満天の星のもとに迦毗羅婆蘇都の城は今自らがかゝる悲をつゝめることを知らぬ顔に巍々として靜に聳えてゐる。

望樓の軒をかすめて夜鳥の群がひそかに過ぎ、風は冷かに涙の頬を吹く。

「悉達多」

彼女は今や自分の周圍、城、町、國、あらゆるものがみなもぬけの殻になつてしまつたやうな氣がする。そして自分と世界との間にうす黒い隔の幕があつて凡ての事はみなその向うに起るやうな氣がする。その病み惱める頭に鮮にうつるたゞひとつのことは我身の棄てられたことである。否それさへも屢夢かと疑はれる。彼女は過ぎし昔を思ふ。そして今一度そこにかへりたいと思ふ。さう思へば彼女は兩手を高くのばしながら底なしの淵へ沈んでゆくやうな心細さ、やるせなさを感じる。彼女の愛はなまじひに拒まれなかつた。とゞもに充分に報いられもしなかつた。彼女はなまじひに



愛された。がそれは風に似て捕へやうもない愛であつた。彼女は悉達多を恨んだ。棄てられたる者の心、それは棄てられたる者のみ知ることが出来る。彼女は泣きつゝ、思ひつゝ、泣きつゝ、夜の更けるまでもそこに立ちつくした。

十六

悉達多出城の報を得て誰より先に駆けつけたのは提婆達多であつた。彼が耶輸陀羅の部屋へ行つた時に彼女は彼を見るや否や兩手に顔をかくしてわつと泣きふした。提婆達多は石像のやうに立ちすくんで面をふせてひと言も得いはなかつた。がやゝあつて涙ぐんだ眼をあげてまだそのまゝに泣沈んでゐる姫の姿をじつと見つめた。形のよい手のひらからなかばはみだした頬が涙にぬれてゐる。なんとといふよい恰好だらう。彼は彼女の悲嘆のさまをみてむら／＼と嫉妬を起した。とはいへ彼は恐る／＼聲をふるはせながら呼びかけた。

「耶輸陀羅」

姫は顔をあげようとしたがとめどのない涙に妨げられてたゆたつてゐる。

「耶輸陀羅、ゆるしてください、私はあなたにあはせる顔もない……」

耶輸陀羅はやうやく顔をあげた。眼のふちがほんのりとして可憐にすこし腫れてゐる。艶麗といふよりはまじめな落ちついた彼女の顔にはそれがことのほかよく似ついて心をそよるやうにみえる。提婆達多は貪るやうに涙に濡れた長い睫毛を見つめた。



「提婆達多、私はなにもあなたにおゆるしすることはありません。あなたはいつも私たちの親しい友でした。私はたゞ……悉達多が恨めしい。悉達多は何故私を棄てたのでせうか。そしてこの……」

「耶輸陀羅、私はあなたの言葉をきくに堪へない。私は悉達多の出家を豫知してゐた。私たちはながらくそれについて語りあつた。耕耘祭の日彼は愈近々にそれを決行するといふことを私に語つた。私は彼のためにその勇猛な決断を祝つた。とはいへ私の感情、王やあなたに對する同情は私の理性に反して理不盡に彼を思ひとまらせようとした。併し彼は男らしくきつぱりと拒絶した。私は自分の女々しさを恥ぢて口をとぢた。そして彼に祕密を守ることを誓つた。耶輸陀羅、私は敢ていふ。私をあとにとゞまらせたものは私の怯懦である。未練である。私はそれについては今も悉達多に對し、あなたに對し、また凡ての人に對して慚愧に堪へない。と同時に悉達多の出家についてはあなたにまへに恐しい心の呵責を感じる。これは卑怯か、愚痴か、なにか知らない。私はたゞあなたにまへに凡ての事實をうち明けてあなたの思のまゝにならうために來たのである」

彼は重罪を負うた罪人のやうにうなだれた。

彼の告白はその最後の部分を除いては殆ど全く事實であつた。彼は大膽にこの明かに己に不利なるごとき事實の告白を敢てした。不思議にも彼は生來最も正直を愛した。それ故彼はその不正直な

復讐計畫を出来るだけ正直に遂行しようとした。彼はなるべく堂々の陣を張つてその惡の戦を戦ひたかつた。今や彼は最後の勝利について確乎たる自信をもつてゐる。何を苦しんでそれしきの事實を彼女のまへにかくさうか。もし望み得るならば彼はかく揚言しつゝまつしぐらに彼女に襲ひかゝつたであらう。

「降服せよ、私は復讐のために悉達多の手から卿を奪はうとするのである。逃げられると思ふなら逃げてみよ」と。



さうした性格にもとづく理由のほか、最初に己をみづから多少不利の地位に陥れることが假面を一層眞實らしくみせるといふ考があつたかどうか。また萬一悉達多が歸りでもした時にこの場合に於けるなまじな虚構がとり返しのつかぬ破綻のもととなりはせぬかといふことをおそれたためであるかどうか。ともあれ彼は出来るだけ大膽に且つ正直であつた。

耶輸陀羅はよゝと泣いた。

「あなたはそれを知りながら……あなたは私の悉達多に対する愛情を知らないかなぞのやうに……私はあなたを恨む。あなたを恨む。……それにしても悉達多にはどうしてこの心がとどかないのであらう。そして悉達多はこの羅睺羅をあはれとは思はないのであらうか」

「耶輸陀羅、悉達多はあなたをも羅睺羅をも心から愛してゐた」

さういひながら彼は吐きだしてしまひたいやうな忌しさを感じた。

「これが己の口からいへることか」

と彼は思つた。が今が肝腎の時である。美しい魚は餌につきかゝつてゐる。辛棒して巧く鉤を吞ま

せなければならぬ。

「私は悉達多に對する義務として、またあなたに對する罪の贖のために、私はこの後あなたの友となるであらう。杖とも柱ともなるであらう。さうしたならば私もせめてすこしはこの心の呵責からのがれることができるかもしれない」

耶輸陀羅は嬉しく承引するやうにうなづいた。その口もとにかすかに寂しい微笑の影が過ぎた。

絶望の涙にぬれたる微笑、それは提婆達多の心をそゝるに足るものであつた。はた彼にとつてこよない吉兆でもあつた。

「しめた。魚はとう／＼かゝつた」

彼は程よく別を告げ、再會を約して歸つた。

命と頼む夫に棄てられた耶輸陀羅は奈落におちてゆくやうな心細い思をした。彼女は目にふるゝものならば熱鐵の棒にでもすがりついたであらう。そんなにして彼女はさし出されたる提婆達多の力強い美しい手にすがつた。彼女は提婆達多を恨んだけれどもどうしても彼を憎むことはできなかつた。またその理由もなかつた。彼女は彼が悉達多の出家の同情者、賛成者、補助者であるだけそ



五二  
れだけこの場合かへつて彼が頼もしかつた。提婆達多はまことに巧に安全にその兩刃の劍を使った。はじめのほどは流石にもしやとのそら頼を抱いてゐた耶輸陀羅も日がたつにつれてせんかたなく夫の歸城をあきらめるやうになつた、併し彼女の女らしい感情はなほ強い未練をもつて、冷酷な事實に反抗して彼女に悉達多復歸の有望なことを證據だてようとするかのやうに、ありし相愛の日のことどもを細々と残りなく思ひおこさせた。こゝに棄てゝ残されたる寂しき人々を慰めるといふ口實のもとに屢彼女のもとに訪れる提婆達多に耶輸陀羅はそれらのことを包むことなく語りきかせた。

十八

「提婆達多、私たちはあの新婚の春をどんなに楽しく暮したでせう」  
彼女は夢みるやうな眼さしをして語りだす。

「私たちはほんに瓔珞の玉のもつれをとくまさへもとりあつた手をはなすまいとした。そしてさばかりのことをも仰山らしく互に解いたかた手で助けあふことがどれほど嬉しかつたであらう」

提婆達多は息のつまるやうな妬に苦みながらさりげない笑顔をつくつてきいてゐる、しかもその妬が意地悪く彼をして熱心に根ほり葉ほり若い夫婦の交情の委曲をきゝたゞさせる。そしてそれが益その妬をあふる。いかなる場合にいかに強く悉達多が彼女を抱きしめたか、いかに熱い接吻を二人はかはしたか……そんなことを彼は巧に調子をあはせながらきゝほじつた。耶輸陀羅は女らしい羞恥に頬を染めつゝしかもまつたき清淨と無邪氣の賜物なる子供らしい天真の大膽をもつて包みかくさず何から何までうちあげた。提婆達多は責えかへる胸のうちにそれがあだかも悉達多が謀つて殊更彼をかやうな地位において彼女をとほして自分の幸福をひけらかすかのやうに悉達多に對して烈しい憎惡を感じた。



「よし／＼今のうちはどうなりとするがよい。併し總勘定の時には何もかも綺麗に返してやるぞ」  
さう思へばこの地獄の苦みも結句かへつて一種の張となつた。

耶輸陀羅は夫の愛の復活を思ひきつた。と同時にそこに彼女の胸のうちに大きな缺陷が生じた。親の愛、子の愛、それはいかに深くとも異性に對する愛とは本質的にちがつたものである。そして此は彼を代償し得るとも彼は此を代償することができない。そこに消しがたい悲があつた。寂寥があつた。空虚があつた。そしてそれがまた一層彼女の心を愛人の形見にして二人の愛の結晶なる羅喉羅に對する溺愛に轉せしめた。

彼女は屢羅喉羅を抱きあげて若い母の初子に對するこぼれるやうな愛情を示しながらいふ。

「提婆達多、このまあ口もとをごらんさい。悉達多に生きうつしではありませんか。そしてこの小さな耳朵の形は私に似てはゐませんか」

羅喉羅は母そのまゝで父の佛などは微塵もなかつた。それにもかゝらず彼女は無理にもそこに悉達多を見出さうとした。といふよりは寧ろ拵へてゐた。彼女はまた度々自分とおなじ溺愛を要求するやうに、心に當惑してゐる提婆達多に子供をさしつけて抱かせずにはおかなかつた。そして自分がするとほりに頬ずりをさせたりした。さうしておきながら彼女はちつとのまも人に渡しておく

のが惜しさうにちきにとりかへさうとする。提婆達多はいはれるまゝに羅喉羅を抱愛しながら熱鐵を呑まされる思をじつとこらへて彼女の乳くびから乳のたれるのを見た。



「これが彼奴の子なのだ」

彼は思った。

「これが彼奴の胤なのだ」

「彼奴はこの女に

たこの女に似てくるのだ」

こいつをこしらへたのだ。此奴がだん／＼大きくなつて彼奴に、ま

それはもはや單に競技に負けて賭物の女をとられた人間の妬ではなかつた。牝獸を争つて命がけの嚙合をする野獸の妬であつた。たゞ人間の巧慧がそれをおほひかくしただけのことだ。

提婆達多はその人の氣をみることの敏捷と、芝居上手と、回轉滑脱の才とをもつて、耶輸陀羅のよき友となるかたはら首圖駄那王をはじめ宮廷の人々の好感と感謝とを得ることを忘れなかつた。彼は今や迦毗羅蘇都王宮の寵兒となつた。

さうかうするうちにやがて一年が過ぎた。そのあひだに耶輸陀羅の提婆達多に対する感情は埋れ

たる種子の芽となり、苗となり、立派な若木となるやうに、目には見えずに次第に成長し且つ形をかへた。それをおそらく彼女自らも氣がつかなかつたであらう。とはいへ提婆達多は決して見逃さなかつた。困難ではあるが望のある許されぬ祕密の戀は——これをしも戀といふべくば——彼の心を有頂天にした。

耶輸陀羅は最初提婆達多の友情に對して感謝した。そして彼の深切な訪問を歡び迎へた。それがいつしか彼を待設けるやうになつた。そして終に彼は彼女にとつてなくてはならぬものとなつてしまつた。提婆達多は厚い友情、美しいやさしい心のために、愉快な能辯のために、男らしい輕快な氣質のために、その颯爽とした容姿のために彼女の無二の親友となつた。彼女はもとよりそのあひだ悉達多に對しては最も貞淑な妻であり、羅睺羅に對しては最も愛情深き母であつたけれども、しかも彼女にもまた美しいものは醜いものよりも美しく且つ快かつた。

一方に彼女の夫に對する貞節と、子供に對する慈愛は、おそろしい嫉妬をとほして間接に提婆達多の慾望をそゝつたのみならず、それらの美德そのものゝ美しさが直接におなじ慾望をそゝつた。凡ての肉體的の美のみならず精神的の美もまた彼の熾烈なる肉慾の焰をやしなふ油となつた。そのうへひとへに得難いものを得ようとする一種の名譽心、好奇的野心も手傳つてゐた。そして彼女の



心がやうやく彼のほうに靡いてくることが彼の慾望を一層性急にした。彼はじり／＼とひき寄せたいやうな慾望を抑へるのに苦しんだ。彼の醜惡な夢のうちに耶輸陀羅はすでに久しく彼のものでもつた。

## 二十

提婆達多の迦毗羅婆蘇都訪問は急に足が遠くなつた。彼は何事にかひどく胸を痛めてゐるらしく憂鬱になつて時々我にもあらず太息をもらした。そして耶輸陀羅のまへにさへその貴重な快活を失つてしまつた。彼は折々なにかの考に捕はれてぼんやりとひとつところを見つめてゐる。そんな時にはその大きな眼に涙がさしてゐるやうに見えた。耶輸陀羅はそれを見のがさなかつた。そしてそれとなく譯を尋ねたけれど提婆達多はとかく寂しい笑にまぎらしてしまつた。彼女の善良なやさしい心はそれをそのままに見過すことができなかつた。

「きつとなにかあるにちがひない。今度こそ是非ともきいてやりませう。」

彼女は卓のうへに頬杖をついてそんなことを思つてゐた。そこには大きな花瓶に彼女の好きな白い香の高い花が一杯にさしてあつた。ちやうどそこへ侍女が提婆達多の來訪をとりついで。侍女の姿が部屋のそとに消えると間もなく背の高い提婆達多の姿が現れた。彼は耶輸陀羅を見て懶げに會釋した。そして氣むつかしくきつと口を結んで頼にはものをいはうともしない。耶輸陀羅は立ちあがつてにこやかに迎へながらことさら聲を和げていつた。



「提婆達多、まああなたはどうなすつたのですか。私をお忘れになつたのですか。随分お久しいではありませんか。」

提婆達多は浮かぬ顔して口のうちに答へた。

「すこし気分がよくなかつたので……」

「あなたはいつもおなじ言譯ばかりなさる。ほんとうに……」

さういひながら二人は花瓶のそばに卓のおなじ側に間近く向ひあつて座をしめた。

「……私はもうとうから氣にかゝつてゐたのです。あなたは私の不幸な時に……それは今でもおなじことですけれど……私の力になつて深切に慰めてくださいつた。私はどんなにかそれを感謝してゐるでせう。それでなにかの時には及ばずながらその十に一も御恩がへしがしたいと思つてゐますのに。あなたはなぜさうよそ／＼しくかくしだてをなさるのですか。私ふぜいとお思ひになつてか。私今日といふ今日は……もしお差支ないことなら……今も今それを考へてゐたところです」

提婆達多はすこし身をかゞめて感謝の意をしめした。

「ありがたう。いつもいふとほりたゞすこし……」

「さあそのおすぐれにならないことはよくわかつてゐます。それでその譯をお尋ねするのです」

提婆達多はさしうつむいて黙つてゐる。耶輸陀羅はじつとその様子を見てゐたがその無垢な正直一途な同情深い心はもう我慢がしきれなくなつた。彼女は身を屈めて相手の顔をのぞくやうにしながらじれつたさうにいつた。

「さあ、提婆達多」



提婆達多はずぶかに顔をあげた。その眼には涙がたまつてゐた。

「私はどうすればよいのであらう」

彼は力なくさも當惑したやうにいつてまた思に沈んでしまつた。がやゝ暫してきつと身を起して立つた。

「私は思ひきつていつてしまはう。耶輸陀羅、ゆるしてください。私は……私はあなたを戀してゐる。……」

「え」

耶輸陀羅は石像のやうに居すくまつた。そして慄へながら啞のやうに提婆達多を見つめた。提婆達多はけおされるやうに悄然とさしうつむいた。併し不思議なことに彼女はこの告白をきいて全然夢想もしなかつたことが降つて湧いたやうには感じなかつた。提婆達多は訴へるやうにいふ。

「私ははじめてあなたを見た時からあなたを思つてゐた。あの競技の日私が思はぬ不覺をとつたのもあなたゆゑであつた。私はあなたのみへに氣おくれがした。私の腕は鈍つた。私の心は相手の胸

甲よりもあなたのはうへそれてしまつてゐた。耶輸陀羅、私はあの時からあなたを思つてゐる。私がかた時もあなたを忘れたことはない。……」

「あなたは悉達多のものとなつた。私は氣も狂ふばかりであつた。もしそれが悉達多でなかつたら。……友情は私の思慮を助けた。私は一生この戀を自分ひとりの胸に秘めておかうと決心した。耶輸陀羅、その時の思を察してください。……」

「併し戀が友情を減さなかつたやうに友情も戀に勝つことができなかつた。思ひなほしても、あなたはやつぱり戀人であつた。それをあなたはちつとも知らない。知つてくれない。あなたは悉達多の花嫁として私のまへにでる。あなたは新婚の幸福に酔つて夢みるやうな顔してゐる。私はつかつた。つかつた。憎むとも蔑むともなさるがよい。私は正直に白状する。私は悉達多を妬んだ。あなたを恨んだ。そのいはれのないことは知りながら私はどうしてもさうせずにはゐられなかつた。それほど私は苦しかつた」

彼の告白はその主要な點に於て嘘であつたけれどしかも全然虚構といふ譯でもなかつた。そこに多くの眞實があつた。従つてそれだけの魅力があつた。提婆達多はその眞實を弄んで虚偽をおほひかくすに足るだけの腕をもつた役者であつた。彼はまた芝居をやりながら己の扮した人物そのもの



の涙を流した。そこに人のめつたにもたない、もちえないほどの熱があつた。耶輸陀羅は雛鳥のやうにたわいなく網にかゝつた。彼女は途方にくれて泣いた。提婆達多は聲をふるはせていふ。

「耶輸陀羅、せめて戀人と呼ぶことだけを……」

耶輸陀羅は泣伏したまゝうなづいて彼の乞をゆるした。彼女のうぶな心はかゝる關係に於て己を戀人と呼ばせることは結局自ら相手を戀人と呼ぶにひとしいといふことに氣がつかなかつた。提婆達多はそれをよく承知してゐた。そしてそれが彼のつけめであつた。

二十一

光り輝くこの日の國に夜は慈悲深くだつた。我らが夜よりもひとしほ靜に甘やかに。それは椽果の赤らみ阿輪迦の蜜のふくらむ制咀羅月のひと夜である。耶輸陀羅は提婆達多と肩をならべながら高い石階をのぼつて園池を見降す廣い廊の一隅に座をしめた。彼等はたゞ二人この人げなき高殿に月光をあびつゝ消き夜の醜を樂まうとするのである。月は柔い光をなげて喬木の影と格子形の欄干の影とを廊に落してゐる。池の面に水鳥の羽音がさわ／＼ときこえてまたしづまつた。いろ／＼の花の薫は吹くともなく流れてくる夜の氣にはこぼれて酒の香のやうに人を酔はす。

「戀しい人」

提婆達多は滴るばかりほゝゑみながら耶輸陀羅の耳に口をよせ聲をひそめて呼びかけた。それははじめのうちなんといふ譯もなく彼女に軽い苦痛を與へた。が間もなくそれを平氣できゝ流すやうになつた。そして今け彼女にとつて嬉しい呼び名となつてしまつた。彼女はにつと笑つて提婆達多を顧みた。彼はたゞちよつと呼んでみたのだといふ風に黙つてじゝと彼女の眼をみつめてゐる。姫は彼を美しいと思つた。彼女はいふ。



「私の眼はればつたくはありませんか。うたゝ寐をしたもので」  
「えゝ、すこし」

さういひながら提婆達多はそれが可愛くてたまらないらしく恍惚として彼女のすこしふくらんだ上眼瞼をみつめた。姫は我にもあらずさつと頬を染めて眼をふせた。提婆達多はその眼を追ふやうにしたがふと欄干にかけてゐる彼女の左手の釧の玉の露のやうにきらめくのをみつけて、己の右手を彼女の手頭のうへにそつとかさねるやうにしてなにげなくそれを弄びはじめた。彼はいつまでもいつまでもさうして玉に見惚れてゐた。そのうちに彼の手は次第に強く姫の手頭を欄干におしつけて二本の指がしつかりと玉をつまんでしまつた。と彼は徐に身をかゞめてふつくらした彼女の手の甲へ唇をつけた。姫は戦きながらその全身に燃えるやうな彼の唇を感じた。

「提婆達多、どうぞもうそのやうなことを」

姫は哀願するやうにいひながら手をひかう／＼としたがその手はおさへられるまでもなくおのづと欄干に膠着してはなれなかつた。提婆達多は思ふ存分接吻をしてしづかに顔をあげた。耶輸陀羅はせつなげに息をはずませてうちそむいた。とはいへそこに不快の色は微塵もなかつた。提婆達多はすでに心の動搖した女に對する肉體の接觸が如何なる効果をもたらすものであるかをよく知つて

ゐた。それは癩病の最初の斑紋のやうにやがては全身を腐爛させずにはおかない。彼はまたひと度男を知つた女の脆さを知りすぎた。それは異性の肉に對する處女の本能的恐怖と羞恥をもたないのみが奪つ返つてなくもがなの寛容と慢性的欲求とをもつてゐる。



提婆達多は女がもうあらまし自分のものになりかけてゐるのをみた。そしてそれがおそろしく彼の欲望をそゝつた。彼は涎をたらすほどの欲情をもつてじつと女の體をみつめた。初産のあとの程よく柔な乳房を、うすい絹布にまきしめられた腰のへんを、あらゆる筋肉の運動を、しばらく息苦しい沈黙がつゞいた。やゝあつて提婆達多はまたさりげなく話しかけた。

「耶輸陀羅、あなたはあの燈籠流の晩のことをおぼえてゐますか」

「えゝ、よくおぼえてゐます。ちやうどこんな静な晩でした」

それは彼女が迦毗羅婆蘇都の花嫁となつてのち間もなく催された夜遊であつた。

「あのときほどあなたが氣高くみえたことはなかつた……」

「またそのやうなことを……」

「あなたは水晶を頭に巻いて兩方の耳のうへに青い蕪華をさしてゐた。そして白孔雀の羽を綴つた扇をつかつてゐた……」

「まあよくおぼえてゐらつしやる。私だとて忘れはしません。私あの晩くらゐ楽しかつたことはあ

りませんでした。私たちの乗つてゐた舟のへさきには鶯鶯鳥の形をした燈籠が立てゝありました。

そしてほかの舟にもみんな思ひくの趣好をこらした燈籠をたてゝ、そしてこの廣い池のあちらこちらに紅いのや黄色いのやいろくくに彩色した燈籠がいくつとなく浮いてゐました。ほんたうに静な晩でした。水が鏡のやうにすんで火影が玉の柱のやうに長くうつゝてゐました……」

「そしてその燈籠をめあてに漕いでゆくと蓮の匂がうつとりときてそして花や葉がゆらくと權の波にゆれて……おぼえてゐますかあのとき私が笛を吹いたのを」

「おぼえてをりますとも。でもあなたが始終私のはうばかり見てゐらつしやるのでなんだか羞しうございました」

「それだのにあなたは一度も私のはうを見てはくださらなかつた」

「……」

「あの晩とはかぎらない。いつでも私はあなたのはうばかり見てゐたのにいつもあなたは知らぬふりをしてゐた」

「でもあたくし……」

「私はどんなにあなたを恨んだか。いゝえ、今でも恨んでゐる。あなたは不人情だ。無慈悲だ。冷



酷だ。私の戀をゆるすなど、いつて、みな嘘だ。みな嘘だ。……」

提婆達多は急に苛立つて身をふるはせながらきつと唇を噛んで耶輸陀羅を見つめた。彼女はおどおどして訴へるやうにいつた。

「提婆達多、まああなたは……」

その眼にはもう涙がいつばいたまつてゐた。そしてその一滴がほろりとこぼれるやいなやもうたまらなくなつて欄干のうへにわつと泣きふした。

## 二十四

提婆達多は女たらしらしい輕薄な氣持で仔細に女の體を見まはしはじめた。その弾力をもつて撓んでゐるうなじを、若々しく脂づいた背筋の凹みを、蜂のやうに曲つてゐる腰のあたりを、頭のさきから足のさきまで。彼はその爛らすやうな刺激のために出来るだけ肉感的な容貌と肉體とを好むと同時にまたそれとは正反對に最も冷かな嚴肅な感じを與へるところのものをも同様に嗜んだ。その觸れがたく犯しがたく見えるところのものがいかに

となるか

を見ることの愉快のために、耶輸陀羅はそのどちらの型にもはまらなかつた。彼女はたゞまじめなやさしい感じを與へる尋常な顔をもつてゐた。彼女の體はやゝ痩せぎすにすらりとしてゐた。併しその五體の立派な釣合が烈しく彼の肉慾をそゝつた。彼はこの恰好のよい犠牲が彼の飽くことゝな

彼は彼

女の泣きやむのを待つて後れ毛の亂れかゝつた耳もとに——その形のよい耳朶が好きだつた——口をよせてさも悔いたらしい調子でいつた。

「ゆるしてください」



さういひながら長い腕を肩を越えて投げかけて横顔のぞきこむやうにした。涙の匂がする。泣きじやくる熱い息がくる。耶輸陀羅は力なく首をふつて

「いゝえ、あたくしなにも……たゞどうぞあなたもすこしは……」

またもや泣き沈まうとするのを両手で抱き起しながら

「ゆるしてください。……私はたゞあなたが戀しい、……あなたが可愛い……」

提婆達多は彼女をしつかりと抱きしめた。彼女の乳房は強く彼の胸におしつけられた。彼の五體の毛孔は悉く口となつて濃な女の肌を吸つた。頸をきつくまきよせられて彼女の顔は斜に彼のほうに仰むきながら丸つこい頸をその胸板にくつゝけてゐる。彼は矢庭に己が顔のしたに喘いでゐる彼女の口に蓋をするやうに唇をおしつけた。彼はいつまでもく唇をはなさなかつた。それはちやうど蜘蛛が餌食を巻き締めておいてその喉をくひ破る形であつた。彼の舌さきからどす黒い毒血が迸出て彼女の五臟六腑にしみわたるやうにみえた。彼女は手足も痺れて喪神したやうに彼のするまゝになつてゐる。いつしか月が傾いて喬木の影がまっ黒に二人のうへにかゝつてゐた。星が流れた。

欠



# 欠

## 二十七

凄しい驟雨がすぎた。雲はまだ中空に車輪のやうにまはりながら次第に淡くなつて消えてゆく。恰もその雲を吸ふやうにひろがつてゆく蒼空から赫々と日光が迸出てそのふちを金色に耀かす。地上の塵埃は猛烈な雨に洗ひさられて濛々とたちのぼる水蒸氣とゞもにすが／＼しい涼氣が湧出すかとおもはれる。夕がちかづいた。二人ははた／＼と雫の落ちる木下路を園亭のはうへと歩いてゆく。雨のためにできた水溜のところへきたときに彼等は思はずちがつたはうへよけたのでとりあつてゐた手がいつばいにひつばられた。それでも姫は提婆達多の手をはなさうとはせず指のさきをつかまへてやつと越すことができた。そしてほつと顔を見あはせてにつこりとした。彼等は木立にはさまれたS字形のかなり長い路を小聲に語りあひながらとある小池にちかい木蔭の園亭へきた。こゝはかつて悉達多が耶輸陀羅との密語になれた處であつたゞけそれだけ提婆達多にとつて嬉しいかくれがであつた。二人がすれ／＼に並んで腰をおろすやいなや耶輸陀羅はおさへにおさへた思がこみあげて提婆達多の胸に額をよせながら

「うれしう」



とうかさされたやうにいつて目をつぶつたなりじつと身じろぎもしずにおる。たど／＼しい人間の言葉をもつてつたふべくもない思が觸れあふ肉をとほして人の胸にしみこんでゆくやうな気がする。彼女は戀人の手をとつて大事さうに両手のうちにおきながら今はもうそれを握りしめる力さへない。まことにこれは耶輸陀羅にとつて初戀であつた。それははじめて呑む強い酒のやうに彼女を酔はせた。提婆達多の手練手管は毒酒のやうに胸若しく彼女を酔はせた。

「提婆達多」

姫は息をはずませながらきくとれぬほどにいふ。

「いつまでもみすてずに……私はもうなにもかもすてしまつたのですもの……」  
なにもかも棄てはしなかつた。棄てたいとも思はなかつた。たゞかやうな戀がしれたならば凡てのものは理不盡に彼女を棄てるであらう。恐らくは羅睺羅さへも。彼女はそれを思ふだけでもたまらなかつた。彼女はあらゆる周囲の不興と敵意に身をさらすのかと思へばなんともいへぬ寂しい情ない氣持がした。そしてさう思へば思ふほど生憎に提婆達多が戀しかつた。今や彼は彼女の頼みうる唯一の凡てのものであつた。彼女の戀は命がけであつた。姫は目をとちたまゝ聴く人の耳よりは心に語るかのやうに甘やかにさゝやく

「私毎朝目をさますとすぐあなたのことを思ひますの。夜だとして……」  
げに夢にも現にも提婆達多を忘れたことはなかつた。



提婆達多はこの身心をさゝげた女を流石に可憐と思はずにはゐられなかつた。彼は無言のまま、しづかに首をかゞめてほんのりと熟した果物みたいな頬に頬ずりをした。そして梅檀の香にまじる女の肌の匂をかいだ。彼はまたなけば髪にかくれた格好のいゝ耳朶をみてかろくそこに唇をふれた。姫にはさうした彼の愛撫が身にしみてうれしかつた。彼女の長い睫毛はいつしか涙にぬれてゐた。提婆達多はそのとちた眼の媚薬を施した臉のふくらみをみた。そしてそこにもかろく唇をふれた。耶輸陀羅はばつちりと眼をあいだ。そして五體をとろかすやうな戀人の目ざしにであつた。

「私昨夜もあなたの夢をみましたの」

提婆達多はにつこりしてみせた

「どんな」

彼女はさつと顔をあからめた。そして初々しくたゆたひながら何か口ごもるのを彼は首をかしげてその口もとに耳をよせた。

提婆達多は近頃不思議にも自分の心が次第に彼女のほうにひかれてゆくのをおぼえた。彼は彼女

の戀を嬉しいと思ひはじめた。折々は彼女をはなしたくないやうな氣持さへ起つた。彼は最初彼女のうぶな馬鹿正直、生真面目を嘲笑しながらその容色の缺點のほうばかり氣にしてゐた自分がいつしか無意識に彼女の美しいところをさがしださうとしてゐるのに氣がついた。あだかも彼女を宿命につながれた棄てることのできぬ自分のものとしてせめて出来るだけそれを高く評價して自ら慰めやうとするかのやうに。彼 自分に對して苦々しい羞恥を感じた。彼は渾身これ矜であつた。その多くの矜のなかで最も大きな最も愚な矜であつた容色の矜から彼は自分を耶輸陀羅のものと假にもきめてしまふことに堪へがたい屈辱、不満を感じた。恐らく彼はいかなる女を獲てもさうであつたらう。彼は女に對する不斷の攻撃者、不斷の勝利者であらねばならなかつた。

「何事だ」

彼は思つた。

「己はこんな女につかまつてたまるものか。己はこの女を慰むのだ。己はたゞ意地と復讐のためにこんな女にかゝりあつてゐるのだ」

姫はやうやく彼の胸から頭をはなして彼を見あげてにつこりしながらその手をそつと唇へもつていつた。眼のふちになまめかしく涙のあとがのこつてゐる。彼女はうつむいて頬を染めながら



「あたくしあなたに棄てられれば死んでしまひますわ」

といふ。提婆達多は胸のうちに

「どうなりとも御勝手に。なんといふ厚かましい女だらう」

と思ひながら

「私こそ。もと／＼私からお願してやつとかなへていたゞいた戀ですもの」

「またそのやうな……」

といひながら姫は日の暮れかゝつたのに氣がついて残り惜しげに

「今度はいつきてくださいますの。あたくしいつでもお別れしたときからすぐもう待つてをりますのよ」

二人は立ちあがつた。

二十九

提婆達多はやうやく耶輸陀羅の誠心に動かされることが強くなつてきた。彼はちやうど彼女が彼の肉にひきずられてゆくやうに次第に彼女の美しい心に捕へられてゆく。彼は戦ひ且つ戦つた。とはいへ戦のはじまつたときすでに敗れてゐるのだといふことをしらなかつた。かやうにして彼ははじめてそこに「誠實」のあることを知つた。それは驚異であつた。夢想もしないところのものであつた。彼は何人の誠實をも信じない故に己もまた不誠實であつた。従つてまた誰にもそれを要求しなかつた。彼は寧ろ不誠實を知らなかつた。然るに今こゝに彼をして否應なしに誠實の味をしらしめたものが現れた。彼のあはれなる虜より買がれたるその果の味、それは奇怪にも彼の意志に反して彼をしてその奉獻者を忘れかねさせた。彼は自分の歩いてきた路が索漠たる沙漠であつたことをしつた。彼は知らず識らずその寂寥を感じてゐたのであつた。それは彼を後にひきかへらしめることなしにかへつてま一文字に奥深く、あだかもそこに命の泉があるかのごとく、幻惑的な蜃氣樓のはうへ突進させたところの。彼の心は纔に目さめた。彼はやうやくひとつの接吻、ひと綴の言葉に誠をとめて彼女に報ゆるやうになつた。かやうにして終に二人は互に解放されることのない捕虜となつ



てしまつた。それと同時に提婆達多は自分の姫に対する行爲の動機と態度と結果とについて痛烈な悔恨に悩んだ。彼は自分の戀が二重の意味に於て誠實であらねばならぬことを思つた。彼は己を蘇らしめたこの戀を凡てをこえて高く肯定した。彼は新に獲得した。同時に新に經驗した戀に狂つた。そして悔恨の苦悶に呻くともにも勝利の歡呼をあげた。遮莫、悉達多の名はいつしか二人のあひだの禁句となつてしまつた。

閻鐸迦と別れてから悉達多は沙門の姿となつて跋伽、阿羅迦邏蘭、鬱陀羅迦羅摩弗の諸師を訪ねて道を問うたが満足することができなかつた。そこで彼はひとり尼連禪那河邊なる優婁頻螺の樹林に入つて當時の求道者によつて屢なされたやうな嚴酷な苦行を修した。そこは跋伽の南岸に威をふるつてゐた摩伽陀の領域であつた。偶彼を見た五人の比丘は畏敬の念を生じて彼が佛陀となつたらば弟子とならうと思つてかたはらにとどまつて同じく苦行を修した。彼らの名は憍陳如、跋伽羅闍、十力迦葉、波羅波、阿濕婆多氏といつた。悉達多は極度に少量の食をとつて靜坐思惟すること六年、終に見る影もなく瘦せ衰へてしまつた。がしかもなほ解脫の道は見出されなかつた。ある日彼

は靜に立つて歩いてゐたとき衰弱の極地上に昏倒した。比丘たちは「彼はとう／＼死んだ」と思つた。併し悉達多は間もなく我にかへつて起きあがつた。彼は苦行の無益なることをさとつた。そこで彼は尼連禪那河に入つて沐浴し木の枝にすがつてからうじて岸へあがつた。折から牛飼ひの女の難陀婆羅といふものが樹神に供養するために乳糜をこしらへてゐたが悉達多が樹下に憩ふのを見てそれを彼に供養した。彼はそれをうけて久しいあひだの苦行に衰へた氣力をやうやくにとりかへすことができた。さきの比丘たちはこれを見て悉達多が退轉し、苦行を棄てたと思ひ、この墮落者を見はなして西のかた婆羅奈斯へと去つてしまつた。



悉達多はひとり静坐思惟に適する地を求めて此處彼處と彷徨くうち一本の畢波羅樹——このとき彼にやさしい蔭をかしたばかりに今も菩提樹といふ貴い名に呼ばれる——をみつけ、遂に草刈の男の捧げた軟い草を敷き、正覺を成じなければこの坐をたぬと心に誓つて、結跏趺坐して黙想に入つた。彼はそこで幾日の間烈しい心の戦をつづけたのち一夜豁然として大覺を得た。彼は降魔と呼べるこの戦に於て常に我々が戦つて敗れるところのものに戦ひ勝つたのであつた。彼は佛陀となつた。それは曉の明星のいづる頃、悉達多が三十五歳の時であつた。夜は佛陀のごとく靜に明けそめた。藪をいづる白蛾のやうにすがやかに。それは一切の衆生にとつて眞の朝となつた。

佛陀は清き解脱を樂みつゝ幾日をすごした。傳説によれば偶暴風雨が起り、天地晦冥にして、冷風と疾雨と七日のあひだしばらくもやまなかつた。そのとき目眞隣陀龍王は宮殿よりいで、大なる蛇身をもつて佛陀の身を七重に纏ひ、七頭をもつてその頭上を蔽うて佛陀を守護した。七日のち天が靄に晴れて日が金色に耀いた。佛陀は三昧よりいでた。龍王は少年の姿と化して合掌胡跪して佛陀を拜した。佛陀は調を説いていふ。

寂靜にして知足なるは樂し

諸法を觀察するは樂し

世間を憫まらず能く衆生を慈むは樂し

一切の慾を離れ恩愛を棄つるは樂し

能く我慢を伏するは是れ最上の樂なり

佛陀は人々が了解し得ぬであらうことをおそれて新に見出した眞理の宣傳を躊躇したが、しかも慈悲愛憐をもつてのゆゑに終に布教傳導の意を決した。彼はまづ阿羅邏迦蘭を濟度しようと思つたが仙人は已に死んでしまつた。鬱陀羅迦羅摩弗を濟度しようとしたがこの仙人も死んでしまつた。そこでかの五人の比丘を思ひ起して波羅奈斯にむかつた。途中ある林中で結跏趺坐してゐたときそこを過ぎた二人の商主が彼を見て密を施した。佛陀はそれをうけて彼らをして佛と法とに歸依せしめた。僧はまだなかつたのである。

佛陀は波羅奈斯にゆき、夕刻鹿野苑ウリキダノについた。かの比丘たちは遙に彼のくるのをみて互に誠めあ



つていつた。

「あそこへ喬答摩沙門がきた。彼は苦行をすて、世樂をうけた。我々は彼に敬意をはらふことをせぬであらう」

とはいへ佛陀が靜に近づいたときに彼らは思はず立つて恭しく彼を迎へた。しかも彼らはなほ佛陀にむかつて「喬答摩よ」友よ」と呼びかけた。佛陀は彼らにいつた。

「お前たちは私にむかつてさういふ言葉を使つてはならぬ。私は如來である。私はお前たちに法を説いてきかさう。私の教に従ふならばお前たちはやがて必ず道果を證得するであらう。」

三十一

比丘たちは口々にいふ。

「喬答摩よ、卿はさきに苦行を修しながらまだ道も見出さぬうちに退轉して飲食の樂をうけたではないか」

佛陀は答へていつた。

「お前たちは小智をもつて輕々しく我道の成ると成らぬとを量つてはならぬ。まづ私のいふことをきくがよい。徒に身を苦しめれば心が愈惱亂する。さればとて、樂欲に耽れば情が染著して離れることができぬ。それ故に苦樂は兩ながら涅槃の因でない。譬へば火を鑽つて之に水を澆げば暗を照す光のなきがごとく、智慧の火を鑽るもまたそれとおなじことである。苦樂の水あれば慧光生ぜず、慧光生ぜざるがゆゑに生死の黑障を滅することができぬ。今もし苦樂を棄て、中道を行すれば心が寂定して能くかの八正聖道を修して生老病死の患を離れることができる。私は已に中道の行に隨つて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たのである」

彼らはいつしか佛陀の顔を見つめて耳を傾けてゐた。佛陀は言葉をついでいふ。



「橋陳如、お前たち心をとめて聽け。五蘊の苦、生老病死の苦、愛別離苦、怨憎會苦、求むるところを得ざる苦、榮樂を失ふの苦橋陳如よ、有形、無形、無足、一足、二足、四足、多足、一切の衆生は悉此の如き苦のないものはない。これらの諸の苦は我を本として生ずる。貪慾、瞋恚、愚癡は皆我を本として生ずる。この三毒は是諸苦の因である。種子の萌芽を生ずるが如くに衆生は之がために三界に輪廻するのである。もし我相及貪瞋癡を滅すれば諸の苦も亦それに従つて斷ずる。もしさうならうと思ふならばかの八正道に由るのほかはない。一切の衆生諸苦の根本を知らぬものは皆悉く生死に輪廻するのである。橋陳如よ、苦應に知るべく、集當に斷すべく、滅應に證すべく、道當に修すべし。橋陳如よ、私は已に苦を知り、集を斷し、滅を證し、道を修したるが故に阿耨多羅三藐三菩提を得たのである。それ故にお前も今當に苦を知り、集を斷し、滅を證し、道を修せねばならぬ。もし人苦集滅道の四聖諦を知らぬときはその人は解脱を得ることはできぬ。四聖諦は是實、苦は實に是苦、集は實に是集、滅は實に是滅、道は實に是道である。橋陳如よ、お前たちは了解したかどうか」

橋陳如は言下に答へた。

「了解しました、世尊」

佛陀は彼を讚して

「阿若多橋陳如」

といつた。かくて阿若多橋陳如まづ法眼淨を得、ついで他の四人も法眼淨を得て佛弟子となつた。

その時佛陀は彼らに問うていつた。

「お前たち比丘、色、受、想、行、識は常であるか無常であるか、苦であるか非苦であるか。空か非空か。はた有我か無我か。」

彼らはこれをきいて阿羅漢果を成し即ち答へていふ

「世尊よ、色、受、想、行、識は實には無常、苦、空、無我であります」

是に於てか三寶始めて具足し、世に六人の阿羅漢があつた。そのうち佛陀は波羅奈斯の長者の子耶舎を度して出家させ、その父母と妻とを優婆塞、優婆夷とした。佛陀は鹿野苑にきてから三月のあひだに五十六人——或は六十人——の徒弟を得た。



佛陀は成道第一年の安居を鹿野苑に過してのち比丘たちに告げていつた。

「お前たちは既に諸の繫縛を離れて世間の福田となることができる。これから各路をちがへて遊行し、慈悲心をもつて衆生を濟度するが宜しい。私も今からひとり摩竭陀の曷羅闍姑利囀へ行かうと思ふ。」

比丘たちは佛陀を拜し、各衣鉢を持って別れ去つた。佛陀が波羅奈斯から曷羅闍姑利囀へ行く路に、伽耶に近い優婁頻螺の林中に、優婁頻螺迦葉、那提迦葉、伽耶迦葉といふ三人の事火外道があつた。佛陀は彼らとその徒弟を教化し、これらの比丘衆一千人とともに優婁頻螺の聚落を出て伽耶尸利沙にむかつた。彼は峩々たる伽耶尸利沙に登つて山頂の一大岩のうへに坐した。五の丘に圍まれた曷羅闍姑利囀の美しい溪谷は眼もはるかにひろがつてゐる。折からむかひの丘の繁みに火がともされた。佛陀は比丘たちに告げていふ。

「比丘たちよ、一切のものは皆燃える。さらば一切のものが燃えるとはなにか。比丘たちよ。眼は燃える。色は燃える。眼識は燃える。眼觸は燃える。眼觸に因つて生ずるところの受も亦然える。」

苦も燃える。樂も燃える。非苦も非樂も燃える。一切のものは皆悉く燃える。それはなんの火によつて燃えるか。貪、瞋、癡、三毒の火によつて燃えるのである。生、老、病、死、愁憂、苦惱の火によつて燃えるのである。眼、耳、鼻、舌、身、意、色、聲、香、味、觸、法は皆等しく悉く燃える。聖弟子如是の法を聞けばこれらのものを厭離し、染著なく、便ち解脱を得、解脱の智生じ、所作已に辨じ、梵行已に立てば復世間に轉生することはないのである」

佛陀はそれから彼らとともに摩伽陀の王頻毗婆羅の都城にむかつた。佛陀は曷羅闍姑利囀につき城外の洩瑟知林に入つて一聖祠の側に止住した。頻毗婆羅王は佛陀の到着をきき、多くの臣民とともに行つて佛陀を拜した。その時人々はかの名高い優婁頻螺迦葉とこの大沙門といづれが師でいづれが弟子であるかを疑つた。佛陀はそれを察して優婁頻螺迦葉にむかつて

「迦葉、お前たちはなにゆゑ火に事へることをやめたのか、なにゆゑ火具を捨てたのであるか」とたづねた。迦葉はそのころを察して答へた。

「私は五欲の樂を求めて火を祭つてをりましたが私はそれを垢あるものと見たゆゑに事火の具を捨てたのであります」

佛陀はまた問ふ



「迦葉、お前はもはや五欲の樂をもつて樂とせぬといふ。然らばお前が今樂むところのものはなにであるか」

九六

迦葉は答へていふ

「私は寂靜を見てをります、そこには生滅もなく煩惱もなく愛憎もありません。私はそれを知るがゆゑに事火の祭祀を樂まぬのであります」

かくて迦葉は座より起ち、佛陀を敬禮していつた。

「世尊は我師、私は世尊の弟子であります」

人々は迦葉兄弟が已に佛弟子となつたことを知つて佛陀に對して喜敬の念を生じた。そこで佛陀は彼らのために漸次に法を説き、人々の心の動くのを見て最後に苦集滅道の教を説いた。

### 三十三

頻毗娑羅王は歡喜に堪へず佛陀を拜していつた。

「世尊われ佛陀に歸依し奉る。われ法に歸依し奉る。われ僧に歸依し奉る。世尊願くは今より後終生優婆塞とならんことを。」

そして王は翌日佛陀及比丘衆に飲食を供養せんことを請うた。佛陀は默然として請を受けた。王は座より起ち、佛足を頂禮し、右邊三匝して辭し去つた。翌日午前、佛陀は法衣を著け、鉢をとり、千人の比丘衆に圍繞されて城に入り、王の宮殿に入つて隨從の比丘とともに座についた。その時頻毗娑羅王は自ら給仕して飲食を供養した。王はまた自分の竹園が都城を距ること遠からず、近からず、常に閑靜で、比丘衆の止住に適することを思つて、その竹園を奉獻せんことを請ひ、座より起ち、手づから金瓶を執り、佛陀の手に水を灌いでいつた。

「世尊われこの竹林園をもつて佛陀を戴ける比丘僧伽に獻す。」

佛陀は默然としてそれを受けた。佛陀はそのうち暫くそこに止住して法を説いた。

九七



この時曷羅闍姑利囀に近い聚落に舍利弗、目犍羅夜那といふ二人の婆羅門があつた。彼等は共に異端の師刪耶闍毗羅底の高弟で親しい友であつたが、刪耶の死後各多くの弟子をもつて人々の崇仰を受けてゐた。併し彼等はその師の説に満足することができず、新に師とすべき人を求めてゐた。ある日舍利弗は途で阿濕婆氏多が僧伽梨をつけ、鉢を持ち、靜に頭を垂れて食を乞うて歩くのに出逢つた。舍利弗はこの比丘の威儀にうたれて、その誰を師とし、誰の教を奉ずるかをききたいと思つたが、今はものいひかくべき時でないと思つて、黙つて後についていつた。阿濕婆氏多は行乞を終つて歸つていつた。その時舍利弗は彼に近づき一禮して會釋の言葉をかはしたのち

「友よ、卿の師は誰であるか、卿は誰の教を信ずるのか」

と問うた。比丘は答へていふ

「我師は喬答摩大沙門である。私は彼の教を受けてゐる者である」

「その教とはなんであるか」

「私は出家してまだ幾日にもならない。到底廣大な師の教を語ることはできない。それゆゑたゞいさゝか偈をもつてお答へしよう

我師の説くところ

法は縁によりて生ず

また縁によりて滅す

一切の諸法は

空にして主あることなし

舍利弗はこれをきいて法眼淨を得、歸つて目犍羅夜那のところへ行つた。目犍羅夜那は彼の顔のいつになく晴々しいのを見てどうしたのかとたづねた。舍利弗は目犍羅夜那のために阿濕婆氏多からきいたところの偈を説いた。目犍羅夜那もそれをきいて法眼淨を得、舍利弗とともにすべての弟子を率ゐて竹園に行つて佛弟子となつた。併し彼等が佛陀によつてあまり高い地位におかれたゆゑに僧伽の古參のなかには平かならぬ者もあつた。そこで佛陀は直に大衆を集めて偈を説いた。

諸の悪はなす莫れ

諸の善は奉行せよ



自らその意を淨くする

これ諸佛の教なり

同時に佛陀は僧伽の分裂を防がんがために多少の戒律を立てた。

### 三十四

かやうにして七年が過ぎた。それは悉達多にとつては苦行の、求道の、提婆達多と耶輸陀羅にとつては初戀の、溺愛の幾年であつた。とはいへ二人の夢も終にさめる時がきた。悉達多は家や父母や妻子や……すべてを棄てたるがごとく六年の苦行を棄て、默想の座よりたちあがつた。そして――佛陀となつた。彼はその光輝ある四十幾年の傳導生活の第一歩、光明赫奕たる佛陀としての第一歩を踏みだした。忽ちにして多くの弟子を集め、強大なる摩揭陀國王の歸依をうけた佛陀の名聲はやがて迦毗羅婆蘇都へも響き渡つた。年老いた首圖駄那王は生前今一度その子を見たいといふ切な願をもつて使を曷羅闍姑利囀へ遣した。佛陀は父王の請を容れ、成道第二年頗勒婁拏月(?)某日、曷羅闍姑利囀より迦毗羅婆蘇都へ、六十由旬の道を二ヶ月の豫定をもつて出發した。

悉達多！ この名は姫と提婆達多とのあひだにいつとはなしに禁句となつてゐた。とはいへその名はもはや耳を掩うてもきこえるほど迦毗羅婆蘇都に喧傳された。そしてその人は餌物をねらふ獅子のやうにしづかに一步一步と近づいてくる。悉達多！ 耶輸陀羅の心は大石のごとくに落ちかゝつてくる何物かに壓されて堪へがたい苦痛に悶えた。併なほ悉達多の名は欠伸にも出されなかつた。



日々はさながら彼女の膝にひとつひとつ積み重ねられる寶石であつた。彼女は深い思に沈んで日に日に瘦せ衰へてゆく。今は提婆達多との會合もかへつてその胸を苦しめるやうにみえた。彼女の手は彼のとるにまかせ、その頬は唇のふるゝを拒まなかつたけれども、それはたゞ冷淡な無頓着であつた。さうかと思へばまたその眼は時には無體に情人の方へひきつけられるやうにみえながら彼女はそれを嫌ふかのやうに強ひて顔を背けようとする。耶輸陀羅が提婆達多を避けようとする傾向はあふたびごとに強くなつた。提婆達多は彼女の胸中を推量しかねたけれどもとにかくその原因だけはよくわつてゐた。そして新なる嫉妬と不安を起した。彼は彼女が今更悉達多に對して無關心であり得ないことが忌々しかつた。彼女が夫を厭惡することは更に一層望ましかつた。提婆達多と姫とのあひだには渡りにくい溝渠ができた。しかもすべてを畫餅に歸させてしまひはせぬかといふ懸念が彼をして敢て渡ることを躊躇させた。彼はじり／＼した。今や彼にとつても日々は寶石であつた。彼女の胸中について彼の想像は縦に様々な方に駈けまはつた。彼はそれらの混亂し、旋轉する、互に矛盾し、混淆する種々な想像をなんとかしてひとつに片づけようとおせつた。とはいへ彼の考は始終同じところを駈けまはるばかりで些の進歩も展開もしない。しかも一方に悉達多が時々刻々に近づいてくるといふことが彼の頭を恐しくいらだたせた。事情は愈最後まで切迫した。永く待たれ

た悉達多が明後日迦毗羅婆蘇都へ到着するといふ知らせの使が首圖駄那王からきた。そして彼は他の一族近親たちとともにこの舊友を迎へるために明日から首圖駄那王の宮殿へ賓客として招待された。



提婆達多は日頃の煩悶と暴飲と不眠とに瘦せた體をもちあつかふやうに亂暴に部屋のなかを歩きまはつた。そして頭をふつたり、舌うちしたり、地だんだを踏んだり、手を振りあげたりした。彼のこの苦痛をみづから求めて陥つたものとは思ひもそめない。相手の悉達多が與へるものと考へる。しかも相手は自分に指もさし得ずひとり七轉八倒してゐる彼をよそ目に見ながら空嘯いてゐるやうな氣がする。さう思へば彼は相手をくひちぎつてやりたいほどの憎惡を感じる。彼はまた耶輸陀羅が彼を悉達多に見かへるのではないかと思ふ。彼は悉達多と姫の昔日のこまやかな情愛を證據だてるやうな最も些末な一舉一動までをあり／＼と思ひ出す。それをその日彼の嫉妬が深く腦裡に刻みつけておいたところの。彼はまた最初の肉慾の伴侶に對する人間の愛着のいかに根強いものであるかを考へる。さうしてゐるうちにそれがもう疑ふべからざる事實のやうに思はれてきた。彼は絶望した。彼はどさりと椅子に倒れかゝつた。彼は手足の指の先まで痺れるやうなけだるさをおぼえた。彼は息をするのさへ懶かつた。

提婆達多は氣をかへてあんまり自分の野暮臭いのを笑はうとした。

「なんだこのさまは」

彼は耶輸陀羅を單に意地と復讐の餌としてねらつた時の氣持をつとめて呼起さうとした。がそれは駄目であつた。彼女は已にながく彼の血となり肉となつてゐた。彼はそれを搾られ、ひき剝される苦痛を感じてゐるのであつた。彼はまた一層あはれな氣休を試みた。

「たとへ一時でも女を手に入れたのは悉達多に對する勝利ではないか」

併しそれが勝利であるとすればするほど相手の勝利は大きくなつた。敵はいはゞ同じ戰に二度勝つたことになつた。彼は自分のみじめに笑止なさまを思つて顔を背けた。人あつてそれを見るかのやうに。

とまたそのそばから未練にも自分に有利なやうな考が浮んでくる。そしてさきに彼女の變心の證據とされたそのひとつ材料さへがまつたく別の色彩を帯びて彼に愉快なやうな解釋を可能にする。かと思へばすぐまたあらゆる弱點が暴露して考は初にもどつて同じ苦しい道筋をたどりはじめる。そのやうにして彼の考は渦に巻きこまれたものゝやうに同じところをまはるやうにみえながら次第に暗い底のはうへ落ちてゆくのであつた。

彼はひどく上氣して頭が破れさうになつた。彼は乾いた唇をなめながらまんじりともせず考へ



つゞけたが、烈しく疲勞を感じたので臥榻のうへに投げだされるやうに横になつた。病的に昂奮した頭が夜のふけるに従つて刻々にさえて氣ちがひのやうに活路を求めてゐる。とはいへ活路は終に見出されなかつた。

## 三十六

提婆達多はとう／＼最初から知つてゐながらことさら觸れなかつた、觸れることをおそれてゐた點に否應なしに出くはさねばならなくなつた。

「耶輸陀羅は自分の戀の手感づいたのではないか」

それは今更霽天の霹靂のやうに彼を驚かした。その卑劣な奸惡な動機。その醜惡な獸的な戀。かつて悉達多の不意の出家のためにも、あやめも分らなくなつておぞくも彼のさした毒酒に酔はされてしまつた彼女が夫の歸來によつて惡醉から呼びさまされて彼の戀の真相を看破したのだと思つた。

「耶輸陀羅は己を嫌つた。卑しんだ。蔑んだ。」

彼はたまらなくなつた。彼自身まさにそれに値する人間であるにもかゝはらず、彼はいかなる種類いかなる程度の侮蔑にも堪へない矜をもつてゐた。彼は絶望の聲をもらした。そして氣ぬげがしたやうに身じろぎもしすにゐた。このときれいにかいだされた泥水のあとへじいつと清水が湧いてくるやうに懺悔の心が彼の胸底に湧いてきた。そして忽ちに胸一杯になつた。彼は彼女の美しさを、



それにひきかへて自分の醜さを思つた。そしてその清淨な彼女を惡念と慾望の餌として骨までもしやぶつた己の罪を思つた。彼は慚ぢ且つ愧ぢた。彼は自分をたゞきつけて踏んで／＼踏みにしつてやりたかつた。彼は臥榻にうつ伏して兩手で顔をかくした。それはさながら神恕を乞ふ懺悔者の姿であつた。とはいへ彼は祈るべき神をもたなかつた。そしてそれだけ彼の惱はやるせがなかつた。その時ふと未だ嘗て思ひもかけなかつた考が彼の頭に浮んだ。

「耶輸陀羅のところへいつて懺悔しよう。さうだ。すつかりうちあけて懺悔してしまはう」

それは彼にとつては破天荒の思ひつきであつた。彼がみづから他人のまへに己を卑くして告白し懺悔する。それはこれまで想像するだけでも屈辱を感じる忌しい考であつた。彼は己の罪過の有無にかゝはらずみづから何人のうへにも遙に高くしてゐた。實にこの時までも彼は彼自身なるが故に何人よりも尊かつた。

彼はじり／＼して夜の明けるのを待つた。そして明方疲勞の極、ほんのすこしのあひだうと／＼とした。そしてなにか息のつまるほど苦しい厭な夢を見た。彼は朝の光がさすと同時に目をさましてあたふたと身じたくをはじめた。しかもこの場合にあつてすら折角容姿をと／＼のへることを忘れなかつた。彼はいつも彼女との會合の前後に久しいこと鏡に向つてゐるのがならひであつた。自分の容姿に對する自信は非常に彼を幸福にした。それはこの最後の時まで彼の忠實な味方であつた。すくなくとも彼自身はさう思つた。彼は侍者にターペンのひとつの襪、髪の毛のひとつもゆるがせにさせなかつた。彼は入念に盛装して風姿堂々と馬車を驅つて迦毗羅婆蘇都へと向つた、流石に懶く力ない眼をとちてしば／＼太息をもらしながら。



その日首圖駄那王の宮殿へ招待された貴賓のうちの重なるものはやはりかつてスブラブツドハ王の迦毗羅婆蘇都訪問の際に集つた名代の王子たちであつた。スブラブツドハ王は招待を受けたけれども悉達多に對する不快のために來ることを拒んだ。それにもかゝらず首圖駄那王は死んだ子の蘇つたのをみるやうな喜のために國王の威嚴も品位も禮儀作法も惜氣もなくすてしまつて、自分ひとり上機嫌になつて、たわいのない溺愛の言葉やきゞづらい息子自慢の百萬遍をとめどなく繰り返した。彼は釋迦族の王といふよりは寧ろ老耄した一個の好々爺であつた。彼は大きな盃から葡萄酒をぐつと呑んでちやうど卓をへだてゝ向きあつてゐる提婆達多のうへに充血したけだるさうな眼をすゑながら種ゆるんだ高調子で話しかけた。

「提——婆——達——多」

提婆達多はそれどころではなかつた。彼の腰は宙に浮いてゐた。彼の頭には耶輸陀羅のことはかなにもなかつた。酒宴はすでに夕刻からながくつゞいてゐるのだ。たゞこの善良な老王に對する愛と同情と禮讓とがからうじて賓客の人々を辛棒させた。とりわけ提婆達多はじれにじれてゐる。

彼が來てから姫はまだ一度も顔を見せない。王はまた執念く彼をつかまへて寸時も放さうとしない。

「提——婆——達——多」

「またか」

提婆達多は思つた。彼はこの老耄のしやつゝらがりとはしてやりたかつた。彼はわざと王の話に冷淡にきゞ流しながら隣席の摩訶那摩に甘蔗酒をついでやつた。跋提喇加は手もちぶさたにもじもじしてはやく賭博場で骰子がころがしたいものだぞと思つてゐた。

「……あれがさういふ聖者になつて歸つてきたとするとなゞの悉達多として迎へる譯にもゆくまい。佛陀は佛陀のやうに迎へねばならぬ。そこで私はこの前代未聞の佛陀に供養するにはまづ孔雀の舌料理などはどうかと思ひついた。」

さういつて王はそれがさも奇想天外の好諧諷であるかのやうにひとりで高笑した。さきから欠伸を嚙み殺してゐた阿菟樓駄はあんまり皆が黙るかへつてゐるのも氣の毒と思つたか、とつてつけたやうに相槌うつた。

「獅子の卵なぞもいかゞでせう」

王は自分の諧諷に反響があつたのを見て益上機嫌になつた。



「なに獅子の卵。これはまた一段と面白い趣向じや。獅子の卵に孔雀の舌料理では流石の佛陀も眼をまはされるであらう」

王がひとりで悦に入つてゐるうちに提婆達多はそつと席をはづして姿を消した。

一一三

三十八

提婆達多は足音をぬすんで案内知つた宮殿の廊下を耶輸陀羅の居間のはうへ急いだ。まだ夜は浅いけれど後宮は海の底のやうに静であつた。たゞどこかの侍女部屋から忍び音に弾する篋篋の調がもれてくる。彼は幸ひ誰にも姿を見られずに彼女の居間の前まで行つたがそこはまつ暗で人のけはひもしない。彼はふと折れ曲つた廊下からうすあかりのさすのに気がついた。そこを曲ればちぎに彼女の寢室であつた。彼は胸を躍らせながら光についていつた。寢室の戸がなかば開いてゐた。彼はそつとのぞいた。姫はこちらへ斜に背を向けて體の左脇を見せるやうな位置をとりつゝすやくと眠つてゐる羅睺羅のうへに身をかがめてその罪のない寝顔を一生懸命にのぞきこんでゐる。提婆達多はあたりを憚つて聲をひそめて呼んだ。

「耶輸陀羅」

彼女は気がつかない。じつと子供の顔を見ながら何かさゝやくやうに唇が動いた。そしてさもさも可愛いらしく、また穩かな眠を妨げるのをおそれるやうにそうつとながいく接吻をその果物みたいな頬に與へた。床のうへに長くひいてゐる彼女の影がふわりとゆれた。提婆達多はそれを見

一一三



て自分がされたやうに胸をうたせた。そしてやゝ聲高に今一度呼んだ。

「耶輸陀羅」

彼女ははつとして身を起しながらふりむいた。そして彼を見るやいなや聲を出さないばかりに驚いて、狼狽して、蒼ざめて、石像のやうに立ちすくんだ。それから宙に浮くやうによろめきながらすこしはなれた自分の臥榻に無意識に腰をおろした。そして彼を見まいとするやうに顔を背けた。提婆達多は前後も忘れてつか／＼と歩みよつた。

「耶輸陀羅」

彼はせきこんだ。聲がふるへた。姫の手をとらうとした。彼女の戦く手がそれをふりほどいた。彼は矢庭に跪いて彼女の膝に泣き倒れた。彼女は逃れようとして身をもだえたけれど彼をおしのけるにはあまりに力弱かつた。はたその兩脚は臥榻に釘づけにされたやうに動かなかつた。提婆達多はうつ伏したまゝしどろもどろにいふ。

「私はあなたを騙した。私はちつともあなたを思つてはゐなかつた。たゞ意地と嫉妬と復讐のためにあなたをとらうとした。私は仕合の日から悉達多を憎んでゐた。そしてあなたをつけねらつた。悉達多の出家をそゝのかしたのは私だ。私は卑怯者だ。私はあなたが若いばかりにあなたを抱きた

いと思つた。私はあらゆる若い女を抱いてみたかつた。あなたが人のものだからなほさら抱いてみたかつた。一度抱いてからはたゞ氣ちがひじみた慾望からさんざんにあなたを弄んだ。私はあなたがたわいなく騙されるのを見てあなたの馬鹿を笑つた。そしてあなたがよせてくださる情をさへうるさく思つた。私はどこまでもあなたをなくさむつもりだつた。慾望のためには肉體を、復讐のためには貞操を。そして思ふさまなくさんだあげくにはあなたをつきはなすつもりだつた。さうしたらいつか私はあなたのまごゝろに動かされてしまつた。私は戀を知つた。それと同時にあなたの美しさがはじめてわかつた。それにひきかへて自分の穢いことがしみ／＼とわかつた。



私はあなたが戀しい。可愛い。有り難い。私は今が今やつと眼がさめた。私は懺悔しにきた。私はこんな穢い者だ。悪人だ。畜生だ。私は甘じて受ける。どんな非難でも、輕蔑でも。たゞ……ただ……どうか私を棄てないで……私はどうしてもあなたと別れるのはいやだ……」

提婆達多は情にせまつて無我夢中に告白した。彼の懺悔は胆汁のごとく苦く腹の底から出た。そのとき彼は頸筋になにか落ちるのを覺えて顔をあげた。耶輸陀羅の涙であつた。彼女は息もつけぬほどに泣いた。無言の幾分が過ぎた。彼は彼女の顔をのぞくやうにしておづ／＼と問うた。

「あなたは私を棄てるのですか」

姫は両手で顔をかくしたまゝかすかに頭をふつた。彼は立ちあがつて彼女により添うて腰をおろしながら横抱に抱きしめてその上氣してゐる耳の根に熱い唇をおしつけた。その時廊下の向うで彼を尋ね捜す人聲が聞えた。彼ははつとして腕をほどいた。

「耶輸陀羅、いつまでもかはらずに」

そして泣き崩れてゐる姫をうしろに残惜しく二足三足戸口のはうへ足を運んだ時に彼女は驚かさ

れた鳥のやうに立ちあがつた。

「提婆達多」

呼びかけながらあとを追つてふりかへる彼の頸にすがりついた。

「もう一度して」

そして彼の胸に顔をかくしてよ／＼と泣いた。彼は身をかがめて涙にぬれた頬に接吻をしてなだめるやうに背をさすりながら

「またあひませう」

とやさしく言葉をのこしてたち去つた。あとに耶輸陀羅は臥榻のうへによろめき倒れて正體もなく涙にむせんだ。提婆達多はさりげなく酒宴の席へ戻つた。彼は酔のまはつた人たちの冗談半分の非難や皮肉を氣輕に巧にうけ流した。彼の良心の影は已にうすくなつてゐた。そこには勝利の得意が頭を擡げかけてゐた。否、彼の懺悔は血の出るほどの眞實であつた。とはいへ彼は一方にあの堪へがたい不安の状態から一刻も早く逃れんがために己が結局の勝利に對する無意識的自信をもつて彼女のまへに懺悔したのではなかつたらうか。今や彼は陥罪にむかつて歩みよる獅子を待つ獵師の心持をもつて悉達多の歸城を待ち設けた。彼は己自ら佛陀たり得ざるのみならず、他人が佛陀であり、



佛陀であり得ることをさへ信じ得なかつたのである。

一一八

四十

佛陀は若き悉達多として光明を求めて出で、走つたその路をその求めたる光明そのものとして歸つてきた、轉輪聖王よりも神よりも偉大なる佛陀は多くの比丘衆を従へて獅子のごとくに迦毗羅婆蘇都へきた。そして城外にある緑の蔭涼しき尼拘樓陀の林に入った。首圖駄那王をはじめ一族近親の人々は親愛なる悉達多を歡び迎へ、歡び迎へられんがために、その他の臣民は、信心深きものは佛陀を恭敬せんがために手にく香華をもちて、餘のものは單なる好奇心をもつて、我もくくと尼拘樓陀の林へ行つた。さりながらこれらの人々は果していかなる光景を見たか。かの昔日の太子悉達多は、この自ら佛陀と名乗るところの人は、彼等が到る處に見出すごとき、精進、禁欲生活に瘦せたる、見すばらしき一個の乞食僧であつた。そしてその左右を圍繞せる貴き弟子たちもまたこれ同じく襤褸に包まれて形容枯槁せる乞食僧の一群にすぎなかつた。管にその外觀が衆人殊に王族の期待を裏切つたのみならず、またその面接の態度が全く想像の外であつた。彼らは皆己等が衷心よりの歡迎を同じ感激をもつて迎へる佛陀——寧ろ悉達多——を胸に畫いてゐた。とはいへ佛陀は悉達多ではなかつた。彼らは昔日の悉達多にあらずして、苦多く涙多かりし幾年月のうちに、かゝる變り

一一九



はてたる境涯において、彼らを迎へて、些の喜もなく、些の悲もなく、これらの愚なる人々に對する慈悲愛憐のほか何等感情の動搖なき一個皎潔なる仙士を見た。しかも彼らはどこまでも佛陀を己が水準までひきさげて考へることをやめなかつた。彼らは不満であつた。彼らはまた家族的地位、年齢の多少をも考へることを忘れなかつた。そのうへ昔の悉達多を。かくして彼らの或者は佛陀を拜せず、何人も飲食を供養することなしに歸つてしまつた。胸中消しがたき不可思議の驚異を覺えつつも。

首圖駄那王の心は重かつた。彼の矜は無慘に傷けられた。彼の幻想は微塵に打碎かれた。彼は一族朝臣はもとより庶民に對してさへ顔向けのならぬほどの不面目を感じた。彼は泣きだしたいほど情なかつた。また腹だゝしかつた。彼は自分が悉達多の歸國を促したことを心から悔いた。彼は今日までおめ／＼と生きながらへたことをかこつた。彼は悶々としてその日を暮した。

耶輸陀羅はこの日片時も羅睺羅をはなさず終日部屋に閉ぢこもつて誰にも顔をあはさなかつた。夜になつて彼女は羅睺羅を自分の臥榻のうへに並んで寝させた。そして絶間なく溺愛の言葉をかけ、屢狂氣のごとく抱擁し接吻して小さなものゝ眠を妨げた。彼女はさめ／＼と泣いた。彼女はひと夜を羅睺羅の寝顔をうちまもりつゝ泣き明した。

#### 四十一

靜な朝になつた。澄みわたつた空を鶴の群が飛んでゆく。森は百鳥の歌に響き、朝風は野の露を吹く。この時迦毗羅婆蘇都の市民たちは、摩伽陀の大王をしも跪しめたる人の、鉢を持ち、目を伏せ、默然として佇みつゝ、家より家へと食を乞ひ歩くのを見た。耶輸陀羅もまた宮殿の窓を開き、涙にくれる眼をもつて、さがなき羅睺羅の怪訝を受けつゝその姿を見まもつてゐた。

佛陀行乞の報を得て首圖駄那王の激情は一時に頭を衝いた。彼は侍臣を叱して直に馬を牽かせた。彼は鐙を踏みはづし／＼したほどせきこんでゐた。彼は馬を飛ばせて行乞のところへかけつけた。彼は馬からとび降りて佛陀のまへにつゝ立つた。そして喘ぎながらも出来るだけ聲を抑へていつた。「悉達多、お前はなぜそのやうに我々を辱めるのか。なぜ行乞なぞするのか。我々には供養ができぬと思ふのか」

王は涙ぐんで聲がふるへた。

「王よ、これは我種族の慣しである」

問はれた人はしづかに答へた。王は益々苛立つた。



「なに種族の？ 我々は摩訶三摩多の裔ではないか。名譽ある我種族のなかで誰がそのやうなことをしたか」

「王よ、卿等は王族である。私の祖先は過去の諸佛である。諸佛は皆食を乞うて布施によつて命をつないだ。それはさておき王よ、人がもし隠れたる寶を見出したならば、まづその最も貴いものを父に捧げるのが子たるものゝ務ではないか。」

そこで佛陀は偈を説いていつた。

起てよ 遂ふこと莫れ 淨く梵行を修せよ 快く善法を習へば 今世後世安樂に住す  
淨く梵行を修せよ 慎んで惡法を行ふこと莫れ 快く善法を習へば 今世後世安樂に住す

王は心和ぎ手づから鉢を執つて佛陀及比丘衆を宮殿へ導いた。一族宮臣たちは悉く出て佛陀を迎へた。佛陀が食を訖つてのち王宮の女子たちは皆來て佛陀を拜したけれども耶輸陀羅のみは姿を見せなかつた。たゞ羅睺羅ばかりがひとり出てきて佛陀の法衣にすがつて

「お弟子にしてください〜」  
とくりかへした。羅睺羅はそれを母に教へられてきたのである。王は耶輸陀羅のおそいのを怪んで

侍女を迎ひにやつた。侍女は顔色をかへて戻つてきて彼女の自刃を告げた。一族の人々は我勝にかけつけた。佛陀は舍利弗と目犍連夜那を從へてしづかに彼女の部屋へ行つた。耶輸陀羅は床のうへに血にまみれて倒れてゐた。佛陀は偉大なる二人の弟子と共に平然として屍骸のまへに立つた。人は驚愕のあまり呆然として徒らに目をみはるのみであつた。ひとり提婆達多は狂氣のごとくかけより、人目もはぢず抱きつき、血みどろの屍骸に顔を埋めて聲をあげて泣いた。人々は皆泣いた。衆衆のほかは皆。その時提婆達多よりもより熱い涙を流すものはなかつた。まことに耶輸陀羅は彼が眞實の心を捧げ得たる最初のものであつた。そして最後のものとなるであらう。



提婆達多は多くの女を愛し、多くの女に愛せられた。併しながらそれはいはゞ彼の跳躍せではやまぬ潑刺たる若き感情の遊戯に過ぎなかつた。彼はたゞ耶輸陀羅に於てかつて夢想もしなかつたまことの戀人を見出した。それは嘘から出たまことであつた。彼女はこの惡病に惱める者に、姉妹となり、母となり、凡のものとあつた。日は耀いた。提婆達多は生れた。彼女は餓えたる彼に醒醐となり、生の力となつた。然るに今その人は彼をおいて死んだ。彼は幾十年の美しき宿をさりつゝある彼女の魂を握きとめようとするかのやうにひしとその屍骸を抱いて涙のかぎり泣いた。彼は彼女の死を悲むよりは彼女を恨むのであつた。

「耶輸陀羅、卿はなぜ私をおいて死んだのか」

これが彼の胸のうちであつた。やうやくにして彼は涙を拭つて起きあがつた。戀人の血にまみれつゝ。そしてそこに、一語をも發せず、一滴の涙をも落さず、冷かにこの光景を眺めて佇める佛陀を見た時に、彼の頭に忽ち恐しい考が起つた。

「この男が耶輸陀羅を殺したのだ」

「耶輸陀羅はこの男のために自分を棄てたのだ」

「こ奴がやつぱり勝つたのだ」

「この襪をさげた男が佛陀といひ戀の勝利者といふ名をほこつてゐるのだ」

「己は此奴の足に踏みつけられたのだ」

彼は嫉妬に燃えた。

「復讐！」

彼の心が叫んだ。咄嗟に彼は顔色をかへて憐を乞ふやうに佛陀の足もとにひれふした。

「世尊よ、悉達多よ、懐しき名に呼ぶことを許したまへ。卿と親しかりし日私は卿の信頼を裏ぎつて耶輸陀羅と密通した。私たちの關係は昨夜までもつゞいた。耶輸陀羅は罪を悔いて死んだ。私は懺悔する。羅睺羅は私の子である」

彼は相手を勝利者たらしめんよりは己とともに粉碎してしまはうとした。羅睺羅が母にばかり似てゐたこと、結婚後十年をたつて思ひがけず出来たといふことはこの絶望的な詭計を眞實らしくするの好都合であつた。彼は日頃かゝる場合を豫想し、かゝる奸計を準備してゐなかつたさうらか。さはれ提婆達多は悉達多が佛陀であることを知らなかつた。あらゆる苦惱の征服者、超越者で



あることを、佛陀はあだかもそこにひとひらの娑羅の葉も落ちざりしかのごとく靜に羅睺羅を従へて尼拘樓陀の林に歸つた。

一三六

提婆達多は己が投じた毒鎗の見事にはづれ、かへつて敵の名の日にく高まるのを見て無念の齒がみをした。彼は相手を嚙まうとして自ら傷いた強狗のやうに愈狂暴になつた。佛陀が三ヶ月の滞在ののち……このあひだに難陀太子も佛弟子となつた……曷羅闍姑利囀へ歸る道すがら、阿奴摩河畔なる阿菟比耶村のあたりの芒果林に止住してゐたときに、提婆達多は更に復讐を企つべく、煮えかへる無念をおさへて、大膽に、厚顔に、佛弟子となるために佛陀のあとを追うていつた。この時彼のほかに釋迦族、拘利族の多くの人々も佛弟子となつた。そのなかには王子阿菟樓陀、首陀羅にして教團の上首となつた剃髮師の優波離もあつた。

## 後 編

一

提婆達多は佛弟子となつた。このうち兇賊毘摩羅にも鎖されなかつた教團の門は提婆達多にもまた開放されてあつた。あらゆる人生の幸福を約束されたる王族の生活をすてはづかに行乞によつて露命をつなぐ比丘となることは彼にとつては、寧ろ死よりも辛いことであつた。彼は敢て自ら進んで比丘となつた。たゞ復讐の機会を見出さんがためにのみ。彼は己我宮殿に榮華を縦にすとも悉達多をして安穩に得意の日を送らしむることは到底忍び得なかつた。それほど彼の憎悪、怨恨……は強く且つ執拗であつた。今や彼の所有としては三衣、鉢、剃刀、針、水漚袋……それしきのものであつた。彼が日々の行乞から歸るにあたつて彼をまつところのものは、よしそれが祇園精舎や竹林精舎のごとき宏壯なる精舎であつたにせよ、些の濇みも潤ひもないたゞの空室であつた。況やその他の場合にあつてはそれは見すばらしい草ぶきの木造小屋、岩窟、そして屢々なんの屏障もない一樹の蔭であつた。彼は權勢や、富や、女や、遊樂や、己の後に見すてたところのものにいたくも

一三七



あてがれた。彼は樂欲の器のごとき青春の時が、しかも今まさに盡きんとしてゐるその時が、死灰のごとき比丘の生活のうち日に／＼過ぎてゆくのを思つて寂しさに堪へなかつた。彼は池や川にはひつて澡浴をする時いつも自分の立派な肉體にじつと見とれた。彼は自分の體を見てさへ慾情の起るのを覺えた。この肉體は若き血に燃えて圓らかに脂づいてゐる。なほ多くの女に抱かるべく。彼は己の張りたる胸板におしつけられ、長い腕かむなにまきしめられて、喘ぎ、泣き、悶ゆる幾多の女あることを思つて炒りつくやうな焦躁を感じる。五體の神経は抱擁のあらゆる感覺を如實に再生する。彼はこれまで弄んだ無數の女のひとり／＼を……そのなかには耶輪陀羅もあつた……その各の場合の形と味をまさ／＼と思ひ浮べる。

比丘となつたものに凡ての世樂は禁ぜられた。今この境涯に於て彼が達成を期し得るところの唯一の野望は教團の最高の權威となつて萬人の渴仰の的となることであつた。この野心と、何事にまれ徹底を好むところの彼の性格からして、彼は最も嚴酷なる禁欲的生活法をとつた。彼は宛ら頭陀行者であつた。そして竊にみづからそれを矜としてゐた。一方にその似非抖擻行に反抗して愈益狂ひたつ、肉體的衰退期にのぞんだ人間の苛立たしい慾情を不問に附しながら。

## 二

提婆達多が耶輪陀羅に對する怨恨は深かつた。彼はいはゞ罪によつて淨められた。姦淫によつて蘇つた。然るに彼女は彼の抱擁をすりぬけて古來多くの惱める者があだかもそこに贖があり忘却があるかのやうにあらそつて赴いたところの死の深淵に身を投じてしまつた。彼女は貞操に關する因襲的思想と戀との二つの手にひき裂かれてしまつた。彼は善かれ悪かれ彼女がまつたく自分のなかにあることを欲したのであつた。彼とともに悉達多を憎み、はたその戀をして高く貞操のうへにあらしめんことを。彼は屢姫を夢みた。ある夜は迦毗羅婆蘇都の後宮に昔ながらの彼女と手をとつて密語をかはした。ある夜は精舎の房に彼女はそつと忍んできて尼師壇のうへに彼の抱擁に身をまかせた。家なく故郷なき漂浪生活の冷かなる假寢の床に彼はそのやうな夢をみることもあつた。そしてその夢からさめて涙を浮めつゝ心に耶輪陀羅を呼んだ。

「耶輪陀羅よ、卿はなにゆゑ私を棄てたのか」

提婆達多は送り狼のやうに佛陀のあとについてこの國よりかの國へ、この町よりかの町へとめぐ



り歩いた。そして到る處恭虔なる人民は佛陀のもとに雲集し、王侯貴人もそのまへに膝を屈するのを見た。彼は敵の強大なることを知るとともに己の敗北の甚しいことを承認せざるを得なかつた。とはいへ彼はどうしても降服を肯じなかつた。復讐！彼の決心は鐵のごとくであつた。彼はまた自分が巧なる欺瞞かと疑ひ、さもなくばひとりぎめの誇稱であらうと思つてゐた悉達多の所謂大覺が眞偽のほどはまだ知らず、意外にも金剛不壞らしくみえるのをみて驚きまた當惑した。彼は悶々として比丘生活の幾年を過した。ひとしく三衣をつけ一鉢に身を委ねたる佛陀の生活はこれといかばかり隔りがあつたか。

結制中佛陀の一日の起居はかうであつた。

佛陀は早朝に起きてそこぼくの時を靜觀にすごしたのち鉢を携へて行乞に出る。行乞より歸つて足を洗ひ比丘衆を集めて法を説く。比丘衆は兩三相携へて法義を究め、或は一人靜處をたづねて修觀する。佛陀は食事のち禪室に入り禪定または休息に時をすごす。正午すこしすぎにふたゝび出て四方より集れる會座の人々に——そのなかには敵意ある外道もあつたであらう——法を説く。人散じてのち澡浴をとり園林を逍遙する。それより比丘衆の觀法研討の次第ならびに疑惑をきき、彼らを教導して日没にいたる。彼らの退くや佛陀は諸天善神のために說法して中夜にいたり、その

のち少時經行してやがて寢につく。



かの雲のごとく水のごとく轉々去來してとゞまらざるその遊行生活に於て、佛陀及びこれに従ふ幾百の比丘衆の止住の處としては、しばしその行く先々の信徒が彼らのために準備した適當な家屋があつた。もしこれなくば彼らは到る處その蔭に雨露をしのぎ一夜を明すにたる鬱蒼たる森林、または畢波羅樹、尼拘樓陀樹を見出さないことはなかつた。それらの止住地のうちには摩伽陀の竹林、憍薩羅の逝多林（タタカ）に於けることき宏壯なる精舎もあつた。實にこの二つは佛陀が生涯幾十の雨期の最も多くを過したところであつたであらう。これらの苑林は大都城の郊外にあつて市中の塵煙に遠ざかり、閑雅寂靜にして修道に好適の地であつた。そこにはいろ／＼の蓮華花さき、椽果樹はかをり、棕櫚はそよぎ、竹葉は翠をしたゝらす。そしてひとたび佛陀の足をとゞむるところ、貴賤僧俗のわかちなく皆この大聖をしたひて來り集り、また招待供養をした。經曰

聖師達多及富蘭那稽首佛足退坐一面向佛言……世尊今出至拘薩羅從拘薩羅至伽尸從伽尸至摩羅從摩羅至摩竭陀從摩竭陀至殃伽從殃伽至修摩從修摩至分陀羅從分陀羅至迦陵伽是故我今極生憂苦何時當復得見世尊及諸知識比丘

提婆達多は夢寐にも復讐を忘れなかつたけれども終に乘すべき機會を得ず隱忍して年月をへるうち、いつとはなしに折々自分の生きながらの地獄ともいふべき苦しい生活にひきくらべて佛陀の澄明平穩な精神生活を我にもあらず羨望する氣持になるやうになつた。そんな時に彼はいつも己の腑甲斐なさを罵り故らに舊怨を思ひ出してはつかに癒えかゝつた傷口をかきさばくやうなことをした。彼はまた己の苦惱の原因を自己の愚痴に歸するやうな氣持になることさへあつた。そんな時にはいつも彼は痴行、惡行、醜行に糜爛した己の淺ましい姿を思つた。彼は自分の腐敗した腸をひきずりだして鼻の先へつきつけてかぐやうな氣がした。殊に比丘となつてからの彼はどうであつたかそこには一切の欲望が禁ぜられてあつた。それだけ彼はみじめにさもしくなつた。彼はいかに他人の受けた一鉢の美食、一枚の新衣を妬んだか。いかにまた尼僧に對して劣情をおこし、みめよき女の門を立ち去りかねたか。そして現在佛陀に對してなにをたくらみつゝあるか。彼は癩に崩れた者がもとの姿にこがれるやうに、出来るものならばこの苦しい記憶を忘却の海に投じて、今一度清淨無垢な提婆達多として生れかへつてきたいとねがつた。彼は凡ての人の眼から逃れたいと思つた。さりながら大地の底にかくれて人の眼は逃れてもどうして己が心の眼から逃れることができよう



か。彼は心の苛責に堪へず精舎の私房、または好んで擇んだところの塚間、洞窟のうちをかけまはり、頭を物に打ちつけ、あるひは癲癩病みのやうにうち倒れて悲鳴をあげた。彼の悔恨は美しいよりは無惨であつた。神人ともに面を背けるまでに。

## 四

提婆達多はまた佛陀に歸依して法悦に入つてゐる他の弟子たちを心から羨んだ。稀には己が罪過を悉く佛陀のまへに告白し懺悔してしまはうかと思ふことさへなかつた。彼は野獸的な悪性のうちに野獸的なうぶな正直をもつてゐた。それは時々彼を己の意志に反してまで光明のはうに歩ませた。併しいつでも彼は今一步といふところでひきかへした。彼には過去の罪業が如實に見られるとほり過去の悪念もさながらに蘇つた。迦毗羅婆蘇都の競技の日は彼にとつて常に現在であつた。彼はしまひにはいつもかう思つた。

「なにがどうしても己は復讐するぞ」

復讐は最後の慰藉であつた。

彼の悔過はかくのごとく烈しかつた。とはいへそれを肯定し支持すべき何物をもたざる彼にとつてはそばからその根帯を危ぶむやうな頼なさがあつた。いはゞ畢竟それは良心と名づくる遺傳的病塊の偶起す發作に過ぎなかつた。それゆゑその發作のすぎた後には彼は健全なるものと悪人にかへつた。そしてさきの悔過を滑稽にして醜惡なる病的苦悶の状態として自ら嘲笑し慚愧する氣分に



すらなつた。そして己の陰險執拗なる復讐計畫に藝術的満足を覺えた。

提婆達多の似非抖擻行は毫末も彼に心の平安をもたらさなかつたけれどもしかも彼はそれによつて幾年の後は教團の内外に淺見なる賞讃を克ち得ることができた。同時に彼獨特の一種熱烈なる雄辯も次第に多くの讚嘆者、歸依者を彼の周圍に集めた。それはまことに一切を見得たり知り得たる者にふさはしき平靜水のごとき辯舌ではなく、むしろ彼の似非を裏ざるところの淺俗野鄙なる熱辯であつたけれども。かやうにして「尊者提婆達多」の名が高まるとともに彼の驕慢は忽ちに増長した。彼は佛陀が彼を大弟子たちの下におき、彼らもまた彼をあまり高く評價しないのを安からぬことに思つた。そして終にいかにもして己覇者たらんとの願望を抱くやうになつた。

ともかくも彼は歸佛後三十幾年をすごした。

ある時佛陀が憍賞彌にゐた時に人民は擧つて佛陀及比丘衆に供養をした。ある日彼らは舍利弗、目犍連、夜那、阿菴樓陀、阿難陀、跋婁、金毘羅等のもとに行つて敬禮したが提婆達多には一瞥をも與へなかつた。彼の矜はいたくも傷けられた。彼は門地、學識、戒行……凡ての點に於て己より劣るとも勝ることのないと考へた人々が犬猫同然なる彼等愚衆によつてまのあたり己の頭上におかれた

のをみた。彼はそれを平生の不平と結び付けて、人民に對する憤懣を、佛陀、及び佛陀によつて彼よりも重きをおかれた弟子達のうへにまでひろげた。多年鬱積した不満は一時に勃發した。彼は終に教團を脱しようと決心した。是に於て彼は摩伽陀の太子、紅顏の阿闍多設咄路を思ひ起し、ひとり佛陀のもとをはなれて曷羅闍姑利咽へとむかつた。



提婆達多の堂々たる風采と、似非戒行と、熱烈にして彩華ある辯説と、使ひなれたる手練手管とは、この思慮なほ浅き、野心満々たる美少年の心を忽に虜にしてみました。阿闍多設咄路は深く彼を尊敬し、爲めに精舎を市に近い丘上にたて、盛に種々の供養をした。彼は太子の厚き外護のもとに日ならずして五百の大衆を得、その勢は隆々として曷羅闍姑利咽を壓した。その時ひとりの比丘が曷羅闍姑利咽から佛陀のもとへきてこの有様を語つた。佛陀は比丘にむかつていつた。

「提婆達多が利養を得るのを見ても決して羨んではならぬ。彼は多くの供養をうけてうたゝ煩惱を増すであらう」

またもろくの比丘に告げていふやう、

「芭蕉は實を結べば枯れる。車馬は子を孕めば死ぬ。提婆達多の利養を貪るのもそれとおなじことである」

そのうち佛陀は大衆を率ゐて竹林精舎に入つた。是に於て曷羅闍姑利咽には二の教團が對峙することになつた。提婆達多はこの時まだ公然獨立を宣言してはゐなかつたけれどもすべてを佛陀の教

團に模して隠然敵國の觀があつた。ふたつの教團はその盛大なること、最も有力なる外護者をもつること……等外觀上些の優劣もないやうに見えた。たゞ提婆達多は佛陀ではなかつた。

ある日佛陀が曷羅闍姑利咽の巷に行乞した時に偶提婆達多も同じ巷に行乞した。佛陀は遙に彼の姿を見てそこを去らうとした。その時阿難陀が佛陀に問うていつた。

「世尊よ、何故こゝを去らうとなさるのですか」

佛陀は答へた。

「提婆達多がゐるゆゑ避けるのである」

阿難陀は訝み問うた。

「世尊よ、提婆達多を畏れられることはありませんではありませんか」

「私は提婆達多を畏れはせぬ。たゞこの悪人と逢うてはならぬからである」

「それならば提婆達多にこゝを去らせればよいではありませんか」

「いや、それにはおよばぬ。思ふやうにさせておくがよい。愚な者に逢うてはならぬ。愚な者と事を共にしてはならぬ。また是非の議論を交へてはならぬ。愚者は自ら非法を行ひ、正律に反き、日に日に邪見を募らす。それゆゑに阿難陀よ、悪知識とかゝりあうてはならぬ。愚人と事に従へば信



もなく戒もなく聞もなく智もない。善知識と事に従へば諸の功德を増すことができる。阿難陀よ、この事をよく心にとめておくがよい」

一四〇

ある時提婆達多は突然佛陀のもとを訪れて五事の嚴則を立てんことを請うた。

- 一 比丘は終生鹽を食す可らず
- 一 比丘は終生酥乳を吞む可らず
- 一 比丘は終生魚肉を食す可らず
- 一 比丘は終生乞食すべし。招待供養を受く可らず
- 一 比丘は春夏八ヶ月は露坐し、冬四ヶ月は草庵に住す可し。屋舎を受く可らず

## 六

提婆達多の提議に對する佛陀の答は、人が自らこの嚴則を守るとは隨意であるが、かやうな律法は凡ての者に對して強ひらるべきでない。年齢、體質にもよることである。その土地々々の習慣もある。心の清淨を得るには樹下と屋内とを問はず、はた行乞と招請供養とを擇ばない。要は欲望に陥らぬことにある。強ひて一定の律法を用ゐればかへつて得道の礙となるといふのであつた。提婆達多がいかなる動機からかゝる提議をしたかは知らず、彼は愈公然獨立の決心を固めた。併しながら彼の老年と順境とは彼の氣分をかほらせた。——彼はこの時已に七十歳をこえてゐた——彼はこの最後の戦をはじめるまへに出来ることならひとたび佛陀と和解が試みたいと思つた。それは實に彼が數十年來の復讐計畫を全く放棄して、美しい關係を、淨き生活をはじめたいといふ衷心よりの願であつた。と同時にまたもはやいくばくもない餘命を已勝利者たり——寧ろ彼のはうに有利らしく見えた實際の形勢が彼にさういふ自信を與へた。——しかも敵に對してかゝる寛容を示し得たりてふ心の満足を感じつゝ平和に得意に送りたいといふ利己的な望でもあつた。そこで彼は最後の勸降狀を渡すべく今一度佛陀を訪はうと心をきめた。この際に於ても降服する者は佛陀であらねばなら



なかつた。

一夕提婆達多はさりげなく佛陀のもとへ行つた。それはちやうど佛陀が比丘衆と語つてゐる時であつた。提婆達多は衣服を整へ、右肩を袒ぎ、徐ろに佛陀の前に進んで佛足を頂禮してのち、跪いて合掌しつゝいつた。

「世尊よ、あなたももうよほど弱られたやうに見える。弟子たちのために説法なさるのも御苦勞のことと思ふ。今後は私がかはつて教團を指導させよう。あなたはたゞ禪定を修してひとり靜に法を樂まれるがよろしい」

佛陀は言下に拒絶した。

「私は舍利弗や目犍連夜那にさへ任さずにある。況んやお前のやうなものに任すことができると思ふか」

これは提婆達多がかつて受けたと稱する侮辱に十倍するものであつた。彼の面目は大衆の前でめちや／＼に踏みつけられた。彼は憤怒に蒼ざめた。彼は佛陀にとびかゝるかと思つた。が自ら威儀を損せざらんがためにじつと怒を抑へた。そして黙然と佛陀を拜してしづかに右邊三匝して去つた。

凡ては終つた。提婆達多の古傷は一時に痛みだした。己の満足するとき境涯にあつては寧ろ善

良鹿のごとき彼はひとたび逆境におかれてはまさに悪狗のごとく打たれれば打たれるほど益々猛惡になつた。彼は斷乎たる決心と自信とをもつて悉達多と戦はうとした。

彼は近頃佛陀の教團を脱して彼に走つた者どもから敵の手もとに彼に心をよせてゐる者がなほ多くあるといふことをきいた。彼は一擧にそれらの者を奪ひさつて佛陀の教團を粉碎せんがために腹心の弟子なる瞿利迦、乾陀驪、迦留羅提舍、三開達多の四人を従へて竹林精舎へと向つた。



それは布薩の日の夕であつた。提婆達多は最初の挑戦をなすべく特にこの日この時を擇んだのである。竹林精舎の大堂には佛陀の説法を聴聞せんとて集つた人々が溢れて佛陀の姿の現れるのを今か今かと待ち設けてゐる。その時彼らはかの提婆達多が四人の弟子をひきつれて威儀堂々と近づいてくるのを見た。多くの人々は虎にねらはれた羊のやうに畏縮した。それほど提婆達多は彼らに畏敬されてゐたのである、彼の提案は佛陀に斥けられ、彼自身また厳しい教呵をうけたにもかゝらず。提婆達多は息をのんでしづまりかへつた大衆のあひだをしづくとほりぬけながら佛陀の不在なのを見て不満を感じた。彼は氣已に敵を呑んでゐた。彼は佛陀のために設けられたる高座のうへにすつくと立つた。四人の弟子は左右に居並んだ。提婆達多は晋吐朗々と宣言した。

- 「一 比丘は終生鹽を食す可らず
- 一 比丘は終生酥乳を呑む可らず
- 一 比丘は終生魚肉を食す可らず
- 一 比丘は終生乞食すべし、招待供養を受く可らず

一 比丘は春夏八ヶ月は露坐し、冬四ヶ月は草庵に住すべし。屋舎を受く可らず

長老たちよ、この五事はこれ法である。これ毗奈耶である。眞の佛教である」

その時折あしくそこには舍利弗、目犍連、夜那等の大阿羅漢たちは誰も居らなかつた。優しい阿難陀は事の危急を見て健氣にも座より立ち鬱多羅僧を著けていつた。

「長老たちよ、この五事は法に非ず。毗奈耶に非ず。佛陀の教に非ず。我に贊する人は鬱多羅僧を著けてたゞれよ」

僅に六十人の長老比丘が鬱多羅僧を著けて立つた。提婆達多は彼らには目もくれず大音聲にいひ放つた。

「我らは今日唯今より悉達多の教團を脱する。我に従はんとする者は來れ」

五百の比丘は聲のしたに立つた。人々の驚愕のうちに提婆達多は彼らを率ゐて意氣揚々とたち去つた。

提婆達多分立の噂は燎原の火のごとくにひろがつた。人々は口やかましく勝手氣儘に是非の論をした。そして彼らは各様々な動機と氣分とをもつてこの新なる佛陀を見んがために提婆達多が教團



を設立したる伽耶尸利沙へと集つた。

一四六

提婆達多は今しもこれらの人々にむかつて説法の最中である。高座の左右には三閻達多等腹心の弟子をはじめ千餘の比丘衆が居並んでゐる。そのなかで先頃竹林精舎から奪ひかへつた五百の新附の弟子が異様に人目をひいてゐる。提婆達多は情に激してゐる。彼の顔は火のやうにほてつてゐる。彼は熱病やみのやうに熱い息をついてゐる。彼の大きな眼は充血してなけば恐れなけば悶ゆることき會座の衆を睨めつけてゐる。彼は人の目には見えぬ何物かを打たんとするかのごとく拳をふりあげながら言葉をついだ。

「……それゆゑに私は一切を放棄した。王子たる權威も、富貴も、望んで得られざることなきあらゆる快樂も……」

彼の面には悲痛の影がひらめくやうにみえた。彼は好んで己の棄てたところのものについて語つた。人々の賞讃をもつてその損失を償はうとするかのやうに。

## 八

「私は釋迦族の一城の主となるべき身であつた。そしてかの悉達多とは従兄弟にして無二の友であつた……」

彼は佛陀を憎みつゝもその血族關係を機會あることに吹聴した。

「私は狩獵や、遊戯や、宴樂に日もまた足らなかつた。加之私はあらゆる學藝に、武技に、拔群の譽をもつてゐた。私はいかなる競技に於ても未だ嘗て後れをとつたことはなかつた」

この時また彼の顔にちらりと影が過ぎた。

「私はそれら一切のものを放棄して一介の比丘となつた。正覺を成せんがために。衆生の福田とならんがために。而して私は大覺を得た。私は佛陀となつた。私は汝等を憐んで微妙の法を説く。然るに汝等愚痴の者よ、汝等は耳聾して法鼓の聲をきかず。目盲ひて慧日の光を見ず。罪業の淤泥にまみれ、淫樂の惡臭をはなちつゝ蛆のごとくに人界を匍匐ひまはる。汝等は猿のごとくに交尾み、猿のごとくに生子、猿のごとくに群居する。而して色慾の肉繩につながれたる互を夫とよび、妻とよび、親とよび、子とよぶ。汝等は五欲の糧を得んがために媚び、諂ひ、匿し、偽り、欺き、誑し、

一四七



誇り、罵り、憎み、嫉み、悲み、怒り、吝み、貪り、盗み、殺し、……ありとある罪惡を犯す。汝等の欲愛に皺める顔はさらに狡智に歪む。汝等はまことに猿よりも醜惡に、猿よりも奸惡である。汝等我唾を啗ふにも足らざる奴輩よ、汝等は生死に輪廻してやまぬであらう。汝等はまさに畜生道に墮ちるであらう。汝等は餓鬼道に墮ちるであらう。汝等は大紅蓮の氷に凍え、大焦熱の焔に焼かれ、阿鼻の底に叫喚しつゝその時はじめて私を思ふであらう……」

彼はなほ何事をかいはうとしたが激情が舌を縛した。彼の唇は徒にふるへた。突如彼は席を蹴つて立ちあがつた。そしてふたゝび彼らを見まいとするかのやうに身を翻して去つてしまつた。人々は黙々として歸路についた。重い、惱ましい、病むごとき氣持が彼らの胸を壓した。彼らは歡喜と力とを得るかはりに手痛い筈を感じた。それは慈悲の教誡ではなくして憎惡の咆哮であつた。彼らはこの新なる佛陀を畏敬したけれども愛慕することはできなかつた。提婆達多は人間を輕蔑し、厭惡した。彼は自らあらゆる醜惡なる人間性の所有者、經驗者であつたがために凡ての人間は彼の眼にさながら汚穢なる五臟六腑のまゝに見えた。彼は寧ろ會座の衆に向つて自分を罵つてゐるのであつた。そして彼の苦しい心が纔にそこに慰藉を見いだした。

## 九

## 冬のひと日

阿闍多設咄路は今しも提婆達多を拜して辭し去つた。提婆達多は草庵の戸口に立つて馬上に躍る太子の姿をいつまでも見おくつてゐた。そして太子の影が彼方の林にかくれて見えなくなつた時に彼はやうやく扉をとざしてひそかに太息をついた。太子は曷羅闍姑利咽と伽耶尸利沙とのあひだに、尼連禪那河の近くにある莊園へ泊りがけで狩獵にくる時にはいつでもかうして提婆達多に敬意を表しにくるのであつた。彼は特に佛陀の、若くは提婆達多の教にのみ一向專念に歸依するといふ譯ではなく、在來のいづれの宗派、學派をも或程度までに信じた。たゞ就中秋霜烈日のごとき提婆達多の説法と、その堂々たる威儀と、巧妙なる迎合とが深く彼を悦したのである。かやうに彼は互に調和しがたい彼此の教を難なく同時にとりいれてすこしもその矛盾撞着に苦しまねばかりか、それはそのまま彼を心から幸福にしたやうにみえた。いはゞ凡ては彼の燃えさかる青春の香爐に投入られ、馥郁として人を酔はすところの紫煙と化しきつたのであらう。それはさうと提婆達多は草座に腰をおろしてふたゝび太息をもらした。彼はいつものとほりさんぐに太子を叱責し罵倒した。彼



は太子と賤民とに於て少しもその呪詛的な態度をかへなかつた。寧ろ太子に對して殊に烈しいやうであつた。とはいへ彼は今しかの年少輕佻なる聽聞者を教呵し去れる聖者とも見えす、さながらうち敗れたる者のごとく悄然とうなだれてゐる。そはこの風姿颯爽たる紅顔の太子は常に提婆達多をして己が過ぎし歡樂の日を思ひ起さしめるのであつた。嗚呼金色に耀ける日、芳しき酒にも似たる日、その日に彼は憧れてやまない。その日はすでに遙に遠ざかつた。その日はふたゝびくることはない。彼の齡はいぶせき草庵のうちにくはゝり、肉體は幾枚の襤褸のしたに朽ちはてた。ひとたび彼を見棄てたる「青春」の手弱女はもはや彼の胸にかへることはないであらう。よしや閻浮提の富を積むとも、赫々たる佛陀の名をもつて招くとも。彼は昔日の我が佛ともいふべき阿闍多設咄路を見るたびにこの思ひをなした。彼は嚙み裂いてやりたいやうな妬ましさを覺えた。そして狂氣のやうに太子を罵つた。彼は懺悔にことよせて太子の遊蕩生活をその口にしがたき點までも語らせすにはおかなかつた。彼は醜惡なる熱心をもつて貪りきいた。そして益嫉妬を燃した。恰も疥癬患者がその瘡蓋を掻きむしつて愈痒さを増すやうに。しかもこの嫉妬あるがゆゑに一層太子は彼にとつてなくてならぬものとなつた。さりながらかゝる烈しい嫉妬も彼をして太子を憎ましめることはできなかった。なぜならば彼は太子を戀したゆゑに。

## 十

提婆達多は阿闍多設咄路を戀した。併しながらこの時已に七十をこゆる高齡に達してゐた提婆達多が太子に對して壯年者のするとき肉的な戀をよせたとは考へられない。とはいへ彼は出来るならばしかあらんことを望んだであらう。さはれこの戀は到底成るべくもなかつた。彼はいかなる思ひをもつて、年老いて見る影もない己、徒に名のみ佛陀にしてその實一介の乞食僧にすぎない己を顧みたか。もし今昔ながらの花やかなる釋迦族の王子であつたなら！もしさうならば彼は必ずこの美少年の心を蕩かして眩を交へて己を戀人と呼ばせすにはおかなかつたであらう。彼はいはゞ閻人の焦燥を感じた。

いふまでもなく阿闍多設咄路は提婆達多をその聖僧らしい點に於てのみ敬愛した。かの隼のごとくひたすらに飛翔してやまぬ太子の若き心は己れ世樂に耽溺しつゝもあくまでも痛快徹底的な提婆達多の説法と戒行との故に彼を尊崇した。提婆達多の戀は絶望的であつた。彼はそれを欠伸にも出すことはできなかつた。彼は最後まで「聖僧」を装はねばならなかつた。彼は丁度耶輸陀羅に對して「友情」を利用したと同様な矛盾に出くはした。併し彼女の場合にはその矛盾を絶大なる力をもつて



解くものがあつた。それは若き性の相違であつた。美しい魚がうまくとおびきよせられて「友情」の餌をふくんだときに彼女はそこにその友情を裏切るところの不義な戀慕の鉤のあるのを見出した。とはいへ時はすでに遅かつた。それは恐しい「異性」の刺を有する鉤であつた。逃れるすべはなかつた。提婆達多の醜い、力強い「男」が耶輸陀羅の美しい、か弱い「女」をつかまへてはなさなかつた。彼女の「女」は彼女の必死の抗争にもかゝはらずいつしか彼の「男」に身をまかせてしまつた。太子の場合これと異り、そこに何等不可思議の聯鎖が望まらるべくもなかつた。事情は簡單である。太子の敬慕の條件が破れる時即ち關係は斷絶する。提婆達多はこの矛盾に苦んだ。けれども彼はこの有利な情勢を空しく遂げ難い戀の煩悶のうちに看過するやうな者ではなかつた。彼ははやくも太子の胸底に、老衰して一個の好々爺となり、霸氣も經綸も失ひはてゝ、たゞ歸依三昧に餘命を送れる父王の統治に對する大なる不満、焦慮の潜んでゐるのを看破した。そこには一國の統治者として爲さねばならぬ内外無数のことが手をつけずに放擲してあつた。これは英邁にして己が理想に猛進せんとする年少氣鋭の太子の眼にはまことに坐視するに堪へぬ状態であつた。

提婆達多は太子に對する嚴しい教呵を目たゝぬやうにやめてしまつた。そしてそのかはりに彼は青春の過ぐることはやく、凡ての快樂は捕へぬうちに飛びさりつゝあるといふことを常に力強く説きかさせた。また自分が餘命幾くもなくして信仰深き太子の光輝ある治世を見ることもおぼつかないといふことを再三くりかへした。佛陀がこの夢みるごとき若者に人生の無常を説くになんの妨があらうぞ。たゞ提婆達多はそれに對して我々のとるべき道についてはことさらに沈黙してそれを太子の判斷にまかせておいた。

長いあひだの焦慮と躊躇のゝち阿闍多設咄路は終に頻毗婆羅を幽閉して自ら摩伽陀の王となつた。



阿闍多設咄路は腕を拱いて部屋のなかを歩いてゐたがやゝあつて苛立たしく侍臣を呼んだ。そしてその姿が戸口に現れるやいなやがみくくと怒鳴りつけた。

「耆婆伽はまだもどらぬか」

侍臣は戦々兢兢々として畏りながら答へた。

「大王よ、耆婆伽はまだもどりませぬ」

阿闍多設咄路は不興げに眉をよせた。そしてなにかいはうとしたがそれも懶さうに口をつぐんだ。彼は頗で指圖して侍臣を退かせた。阿闍多設咄路は日頃渴望してゐた王位にのぼつてからなにか始終不満、不快、不安に責めさいなまれてゐる。彼は確に己が理想に直往邁進した。そしてともあれ善政を施した。摩揭陀の前途は光明に耀いてゐた。大多數の臣民は彼を歡呼し悦服してゐるやうにみえた。が、彼はすこしも悦ばなかつた。彼の胸のうちにはなにかしらひつゝこい、根強い、癌のやうなものがわだかまつて内部から絶えず彼を苦しめた。彼の心は病んでゐた。そして物に觸れ、事にあたつて痛んだ。彼は恐しく短氣に粗暴になつた。それはさうと彼は今何故に耆婆伽を待ちかね

てゐるのか。彼は篡奪ののち復辟をはかる者の現れるのを懼れて禍根を永久に断たんがために父王の弑虐を思ひたつた。そこで父王が彼の命じた些細な獄則を守らないのを口實にして——口實ばかりではなく彼は眞に怒つたのであるが——さらぬだに乏しい食物を絶對に断つてしまつた。彼は父王の餓死を今日か明日かと待つてゐたが、不思議にも年老いた父王は思ひのほかながく命をつないでこの日もまだ生きてゐる。これも彼の不機嫌な理由の一つであつた。彼はそれが自分に不愉快な、他人に不評判な仕事だと思ふだけそれだけはやくかたづけてしまひたかつた。それで彼は先刻その専門的智識と彼に對する忠誠とに十分な信頼をおいてゐる侍臣の耆婆伽に命じて父王の命がまだどれほどつゞくかを檢分にやつたのである。彼は最初ひと思ひに父王を殺してしまはなかつたことを心から後悔した。

老王はどうして命をつなぎとめたか。流石にこの善良な不幸な人のうへには阿闍多設咄路の力をもつても如何ともしがたい人々の同情が集つた。そして嚴罰をもつて脅すところの禁令と、一味の者の油断なき監視とにもかゝはらず、時折何人かゞはづかた食物をその牢獄に投げられるのであつた。格別の慈悲をもつて日に一回だけ老王を見舞ふことを許された阿闍多設咄路の母章提希夫人は身に麩蜜を塗つていつてはひそかに老王を養つたといふ。老王の同情者らはいかうして日に日に弱つ



てゆく老王の命をつなぎつゝ、阿闍多設咄路の胸に恩愛の情の蘇るのを頼りなく待つてゐるのであつた。

十二

耆婆伽は頻毗婆羅の寵臣であつたと同時に阿闍多設咄路の寵臣でもあつた。彼は老王に忠誠であつたとほり阿闍多設咄路にも忠誠であつた。彼は機會あるごとに面折苦諍して阿闍多設咄路の眠れる良心を呼びさまさうとした。それは屢阿闍多設咄路を激怒させたけれどもしかも彼は己凶悪なるにもかゝらず誠實耆婆伽のごとき者を愛した。先王の同情者は阿闍多設咄路の王位篡奪の後次第に彼から遠ざかり、彼もまた彼らを遠ざけねばならなかつた。そこで現に彼の周囲にあるのは彼の一味徒黨の者ばかりであつた。彼は彼らを愛することも信頼することもできなかつた。そのなかでただ耆婆伽のみが確に彼を裏切らないところのものであつた。その直言は耳にさからはぬではなかつたけれども追従者の詔諛のやうに厭惡を催させることはなかつた。

耆婆伽は來ない。阿闍多設咄路は彼を呼びにやらうとしたがすぐに思ひかへしてやめた。老王の有様を出来るだけ人に見せたくなかつたのである。

耆婆伽は來た。彼は王の不機嫌を見てとり恭しく跪いていつた

「大王よ、遅なりました。老王様からいろ／＼お話がありましたので」



耆婆伽は見るから正直らしい温厚な顔をしてゐる。賢さうな廣い額、長く胸に垂れた鬚、そしてそのかた方の目もとには大きな鬚ほくろがある。

「耆婆伽、私はお前を父上と長談義をさせにやつたのではない。お前はなぜ自分の役目だけをすませてもどつてこぬか」

「大王のお慈悲を願ひます」

「宥す。父上の様子はどうか」

阿闍多設咄路は面を和げた。一刻もはやくそれがききたいので。

「もう三日のほどもいかゞかと思はれます。それにつきまして……」

「……………」

「それにつき是非とも御聽許の願ひたい儀がござります。老王様の仰せには、もう幾日の命でもなすと思ふ……」

耆婆伽は我を忘れて聲をあげて泣いた。阿闍多設咄路は苦々しげに顔を背けたが流石にこの可憐な者を叱り退けることはしなかつた。耆婆伽は涙を拭つてやうやく言葉をつづけた。

「それで御存命のうちにたゞ一度大王とお話がなされたいとのこととござります」

阿闍多設咄路の顔色は見る／＼かはつた。耆婆伽は哀願の眼をあげた。

「老王様の今はお望でござりますゆゑ……この耆婆伽もとも／＼に大王のお慈悲を願ひます」

「ならぬ」

阿闍多設咄路は父王を見るに堪へなかつた。かつその傷ましい姿を見ることによつて折角の決心を鈍らすかもしれないことをおそれた。彼は眼をたち耳を揺うてしやにむに計畫を遂行してしまはうとするのであつた。



耆婆伽は涙ながらにくりかへした。

「お言葉をかへして恐れいりまするが老王様の最後の……」

「ならぬといつたではないか」

「大王よ、今一度御思案を願ひまする。あの有様になられた老王様の今はのきはのお頼たのまを無碍にお  
御けになつたといふことがきこえましたならば、おそれながら人民どもは大王を何と申上げませう  
か。人民とは申しませぬ。老王様の御恩顧をうけました宮臣たちはもとより、この耆婆伽とてもお  
なじことでござります。これは決して老王様のおためのみならず大王の御身のうへのためにも耆婆  
伽が命にかけてお願致しまする」

阿闍多設咄路の胸は亂れた。彼はいかにすべきかを知らなかつた。彼はたゞその場から逃げだ  
したいやうな気がした。やゝ久しくして彼は氣のぬけた棄鉢な調子でいつた。

「どうなりと勝手にせい」

耆婆伽は嬉しさあまつて言葉もなく王を拜して退いた。

やゝあつてなにかの異變を豫感するかのやうに不安に緊張してゐる阿闍多設咄路の眼のまへに蓬  
髮垢面の生靈のやうな頻毗婆羅王の姿が現はれた。彼は擔荷にのせられて運ばれてきた。そして耆  
婆伽と侍臣の肩にかゝりながらやつと足を運んで倒れるやうに座についた。阿闍多設咄路は隨で指  
圖して二人を去らせた。奇怪なる父子はさしむかひになつた。頻毗婆羅は己が幾十年のあひだ摩伽  
陀の大王として坐りなれたその師子牀に凶惡無道の我子が新なる大王として坐つてゐるのを見た。  
阿闍多設咄路は始終眼をそらして父王のほうを見まいとした。それは羞恥よりも、同情よりも、まづ  
この見苦しい姿に對する厭惡であつた。それは彼の濃き肉親なるがゆゑになほさらさうであつた。  
彼は病狗のごとき味方よりも虎のごとく美しき敵を愛した。老衰のうへに餓死に瀕し、訴ふるに處  
なき身の不幸に打たれたる頻毗婆羅王はそのまゝ絶えいつてしまふかと思はれたが感情の力がから  
うじて彼を蘇らせた。彼はかすかな、思をこめた聲で呼びかけた。

「阿闍多設咄路」

呼ばれた人は答へなかつた。苦しい沈黙がつゞいた。そのあひだ老王は溺愛と怨恨と、憐愍と忿  
怒との混淆した名狀しがたい氣持ちをもつてじつと我が子の背けた顔を見つめてゐた。

「阿闍多設咄路、お前は何故私をこのやうなめにあはせるのか」



阿闍多設咄路はなにか眼にみえぬものに首をねぢむけられるやうにそろ／＼と父王のはうへ顔をむけた。

「あなたが國王としての義務を忘れ、國政を放擲して顧みなかつたからです」

「私は義務を忘れたといはれる覺はない。が、それはどうでも宜しい。それならばなぜお前はそれについて私に注意してはくれなかつたのか。もしまたお前が自分で國政をとりたいたならばなぜ穩がにうちあけて私に話してはくれなかつたのか。お前の望とあらば私はいつでも喜んで位を譲つたであらうものを……」

老王は暫く息をやすめてゐた。

#### 十四

老王は言葉をついだ。

「私はとうから佛陀に歸依してゐる。そのうへ私はもう老衰した。それゆゑ心のうちでは常に退位を望んでゐた。併し折角夢現に楽しんでゐるお前に國王といふ徒に嚴しい空名の齋す勞苦を覺えさせたくないと思ふばかりに一日一日とのばしてゐたのである。それをお前はなんたることぞ……なぜお前は私にうちあけてはくれなかつたのか」

「……………」

「そのうへお前はこの頃日々の食物を斷つて私を餓死させようとする。阿闍多設咄路、お前はいつたいこの私をお前の何だと思ふ」

今までさしうつむいてゐた阿闍多設咄路はこの時きつと老王を見た。そして昂ぶる感情をおさへ、努めて王者の權威を保ちつゝいつた。

「父上、私はあなたが私の父、生みの親であることをよく知つてゐる。併しながらあなたが私の何であらうと、また私の即位の手續がどうであらうと、現在私は摩伽陀の國王である。それ故この國



内に於ては何程些細な事といへども私の意に反して行はれてはならぬ。否、出来得べくんば全き閻浮提をも私の意のまゝにしようと思ふ。それを何事ぞ、あなたは私の命じた獄則を破り、牢獄の壁に登つて窓から佛陀を遙拜した。國王の命令の當不當は何人も、殊に一個の囚人たるあなたの論議すべき限りでない。それは左右なく遵奉されねばならぬ。しかも私は出来るだけの寛容をもつて三度もくりかへし戒告を與へた。そして三度めには確にことわつておいた筈である。これが最後の戒告である。これをしも無視されるならば斷然食物を斷たれるであらうと。然るに不都合にもあなたは依然として犯則をつゞけた。それゆゑ私は私の命令を、厚意を蔑視した者に相當なる、寧ろ寛大なる刑罰として食物を斷つた。饑餓は畢竟肉體的苦痛と生命の問題に過ぎない。國王に對する侮辱の應報としてはあまりに輕きに失しはしまいか。私はあなたが感謝の涙をもつて刑罰をうけることを信じて疑はなかつた。」

阿闍多設咄路は昂然としていひ放つた。とはいへその時彼の胸底にはせつない羞恥の念が潜んでゐた。彼はその言語道斷ではあるが一見堂々たる表面的理由のほかには全然利己的な卑劣な隠れたる理由のあることを忘れることができなかった。

老王の瘦せほゞけた顔にかつと血の色がさした。併しあくまで我が子の愛に溺れた彼は必死と心

をしづめて、欲望と驕慢に焼け爛れた我が子の胸にどうぞして今一度恩愛の情を呼びいけようとした。

「それならばそれでよろしい。私にも考はあるがそれはまづ後のこととして、私は是非ともお前にきかせておきたいことがある……」

「私はいづれ遠からず死ぬ身であるが、これはお前のためのみならず後にのこるお前の母のためにも話しておきたいと思ふ。阿闍多設咄路、お前もよく心をとめてきいてくれよ」



「私たちは結婚してからながいあひだ子といふものがなかつた。それゆゑお前ができた時の私たちの喜びはどのやうであつたらう。國中には未曾有の大赦を出して多くの罪人を放免した。祝宴は夜を日についであげられた。それは私たちばかりの喜びでなく摩伽陀ちゆうの喜であつた。それからもう一にも二にもお前のためであつた。お前のためにばかり私たちは生きてゐたやうなものであつた……」

「お前は生れるなり大層ひ弱かつた。そのために私たちはどれほど心を痛めたかしれぬ。薬といふ薬は残らず呑ませた。手あてといふ手あては悉くつくした。お蔭でお前はどうぞかうぞ成長した。成長するに従つて丈夫になり背丈もすら／＼とのびて今見るやうなお前になつた。それを見る私たちの心はどのやうであつたらうか。どれほどお前を頼もしいものにしてゐたらうか。お前は私たちのあひだの深い愛情のたつたひとつの生きた記念物であつた。夫婦の愛情が混淆し融合してお前といふ眼に見える生きたものとなつて私たちのまへに現れる。そして私たちの愛情の正しい産物であることの承認を求めるかのやうに私たちをその特殊の關係に於ける名によつて父よ母よと呼ぶ。そのか……」

れをきく時の私たちの思ひはどうであつたらう……」

「私たちはお前の顔かたちやものごしのうちにお互に似てゐる點を綿密にさがしました。またお前の性質のうちにも明にお互の争はれぬ面影を見出した。そしてそれが益お前を忘れたいものにした。私たち夫婦のあひだにもまたお前に對しても無情や冷酷などいふ忌しいものは露ほどもありはしなかつた。それをお前はどこから、誰からうけついでそのやうな恐しい心をもつやうになつたのか……」

「私はお前のためにこのやうな有様になつた今でさへお前を愛してゐる。深く／＼愛してゐる。そのお前が私を……私はどうしてもお前の本心から出たことゝは信じられない。これは必ずや一時のふとした氣の迷ひかまたは二三の恩知らずな悪人どもの卑劣な教唆から起つたことにちがひない。さう思つて私は日夜神佛の加護を禱つてゐた。然るに何たることか。お前は現在眼のまへにかやうな私の姿を見ながらすこしも悔悟の色がみえない。阿闍多設咄路、お前はきいてゐるのか。お前は私のいふことが耳にはいらぬか。お前はもう一度もとの阿闍多設咄路にかへつて私たちを喜ばせてはくれぬか。さうすれば私たちは決して今度の事のためにお前を悪く思ふやうなことはせぬ。可愛いもとの阿闍多設咄路だ。大事なもとの阿闍多設咄路だ。お前は年をとつてもう望みも甲斐もなく



なつた私たちのたつたひとつの望み、たつたひとつの頼り、私たちの身がはりであるものを。お前は第二の頻毗婆羅である。第二の韋提希である。私たちはお前に於て生きのびる。お前に於て若がへる。私たちはこれほどお前を思つてゐる。これほどお前を力にしてゐる。」

老王は疲労と涙に妨げられ、かた手に額をさへへて息をついてゐた。

## 十六

「それをお前は無體にも私を捕へて獄に下したばかりか些細な獄則を守らぬというて、それはお前にはなんの迷惑にもならず、それにひきかへてかやうな境涯におちた私には何よりの慰藉である世尊を遙拜したといふことの理由で日々の食物を斷つてしまつた。さうしてお前は私の死ぬのを今か今かと待つてゐる。私はありがたい世尊の教を片時も忘れはせぬ。今更僅の餘命にさしたる執着はもつてをらぬ。それにもかゝはらずこのやうな身心の苦をうけながら何故生きながらへてゐると思ふか。人は未練といはよいへ。私はどうぞしてもとの阿闍多設咄路にかへつたお前の顔がひと目みて死にたいと思ふからである。またひとつにはお前にすゝぎがたい親殺しの悪名を負はせたくないばかりにである。韋提希とてもおなじことである。家來たちもさうであらう。韋提希は私を見舞ふ度毎に體に麩密を塗つてきては私を養つてくれる。また恩を忘れぬ者のしわざであらう。誰ともしれずあの高い牢の小窓から折々食物を投げ入れてゆく。私はそれを食うて今日まで命をつないでゐた。かうして私たちはお前の心の改まるのを待ちに待つてゐた。併しながら私はもう自分の命の旦夕にせまつてゐるのを知つた。それ故私は何もかもお前にうちあけてどうぞしてもとの人間にたち



かへらせたいと思つてきたのである。阿闍多設咄路よ。もと／＼どほり私たちの阿闍多設咄路になつてはくれぬか。これが私の一生の頼みだ。どうぞきいてくれ。どうぞきいてくれよ。」

老王は我が子にむかつて手を合せないばかりであつた。阿闍多設咄路は一言の答もせず眉をよせて顔を背けてゐる。彼の胸中にはふたつの感情が烈しく戦つてゐる。この溺愛者に對する愛憐と厭惡と。彼はなんといひいづべきかをしらなかつた。老王は今か今かと答へを待つてゐた。併しいつまでたつても答へがないのをみて彼はそれを拒絶と考へた。彼はかくまで誠心こめた哀願が無情に卻けられたので赫として詰めよつた。

「阿闍多設咄路、お前には耳がないか。親の恩がわからぬか。お前の體は髪の毛の先までも兩親のものではないか。お前がさうして安樂に日を送つてゐるのもみな親のお蔭ではないか。お前は私たちに産んで育てゝもらつたのではないか。お前にはこれほどのことがわからぬか」

阿闍多設咄路は詰責の言葉をきくとゝもに勇氣を恢復した。憎惡が彼を支配した。彼は感情をおさへて冷にいつた。

「父上、私たちはこれまで幸にして一筋の道を一緒に歩いてくることができた。が、今不幸にして右と左に別れねばならぬ時がきたやうに思ふ。私たちはいさぎよく別れようではありませんか」

## 十七

「私はまづ即位について私がいかにあまりに燥急に且つ粗暴であつたことをあなたのまへに慚愧し陳謝する。次に私はあなた方からうけたひとかたならぬ愛育について心から御禮を申上げる。私は恩知らずではない。恩を忘れた者でもない。さりながらこの點に關する私の思想感情はさやうに單純ではない。私はあなた方の私に對する愛情について感謝以外のあるものをもつてゐる。私はすこしくもの心づいてからはあなた方の全く盲目的な愛情に對して深い憐愍と厭惡とを感じるやうになつた。あなた方は溺愛に痴れて阿闍多設咄路を梵天の子のやうに思ひなした。その智に於て、徳に於て、才に於て、容姿に於て。そしてそれを自分にもひとにも誇られた。御覽なされ、私は決して梵天の子ではない。憐むべき一個人の子である。私はあるがまゝの私を愛してほしい。見苦しき憫笑すべき恩愛の愚痴が縦につくりだした私の幻影を愛してほしくはない。また私は第二の頻毗婆羅よ、第二の韋提希よと徒に親愛なる名に呼ばれつゝ實は老衰無力となつたあなた方の手足となつてあなた方の欲望をみだし理想を完成するところの格好なる奴僕として信賴され鍾愛されることに對して大なる不満を感じる。しかもかゝる利己的な愛情に對して感謝を要求さるゝに於ては私の不満は終



には憎悪と變ぜざるを得ない。私は何よりも先づ私であらねばならぬ。私は第二の頻毗婆羅たり、第二の章提希たることに些の興味も名譽も感ずるものではない。また私は一般に父母の子に對する情愛について根強い厭惡をもつてゐる。とはいへ情愛のうすいことにはもとより平かであり得ない。此點に於て私は進退兩難の立場にある。何故といふか。父母は、いや今はお互についてののみいへば宜しい。それはあなたの言葉によつても明かであるとほりあなた方は私をあなた方の醜惡なる性慾行爲の紀念物として……」

「阿闍多設咄路、お前は何を……」

「まづおきくなされ。あなた方は私を

あふやうな感情をもつて……」

「これ、お前は親にむかつて……」

「お控へなされ。私はあなたのいふことをきいた。あなたもしまみまで私のいふことをきかねばならませぬぞ。私はさやうな情愛に對して深い厭惡と輕蔑とを抱かざるを得ない。最後に、私は見らるゝとほり現世の幸福を擅にし得る境涯にあり、現に存分それに耽溺してゐる。それにもかゝはらず私はいかにしてもうち消すことのできぬ生の苦痛を覺える。私は生を呪ふ。飽くまでも呪ふ。青

春の歡樂、王者の權威、富貴……それらは私の感ずる生苦の半をも償ふに足らない。私はこの享樂の最中に於て幾度眞實生れざりしことを希つたか。しかも私は死によつて不生の昔にかへり得るや否やを知らない。よしそれが可能なりとしても私の生るゝと同時に牛蝨ヒメのやうに皮肉に食ひ入つた生の執着は到底私をして自ら生命を斷つことを得しめない。また私がそれを爲し得たからといって父母たるものはこゝに若干年のあひだその子をかゝる苦惱に生みつけた責めを免れることはできぬであらう……」



「父上、あなたは恩といふ。それはなんの恩であるか。あなた方は私、阿闍多設咄路をしてあなた方が讃嘆するやうにみえるこの人界に生れいでしめんと慈悲をもつてのゆゑに私を生んだのであるか。否、あなた方はたゞ單に己の

のゆゑに、或は得手勝手なる

ゆゑ

に のである。そのうへなほだいそれたる僭越と厚顔をもつて人に恩を賣らうとする。恩とは何か。それはこの世に生をうけたることをもつて無上の幸福とするものにむかつて用ふべき

言葉である。私にとつては讐である。私は敢ていふ。父母はその子の生るゝと同時にその足下にひれ伏して罪を謝すべきである。そして彼らの一生をとほして懺悔の生活を送るべきである。私のこの父母に對する厭惡、輕蔑は私が

とゞもに始つた。まことに私ごとき子の生れた

のはあなた方にとつて大なる禍であつた。私自身にとつては更に大なる禍であつた。もとより時には私もこの世に生れたことをもつて今少しく宿命的のものと考へないではない。併しながらそれは寧ろ單なる思想である。私は現在目前の事實上の責任者、犯罪者として父母を呪はざるを得ない。とはいへ私は己の妻子に對してはどうしてもこの思想感情を適用することができない。それは決し

て卑怯ではない。正直な事實である。そこに恐しい矛盾がある。無慚な撞着がある。私は残忍な事實の爪で頭からふたつにひき裂かれる。そしてこの苦痛をなめさせるものは畢竟やはり父母である。父上、よくおきゝなされ。生殖の罪は人間のいかなる罪よりも罪である。それは實に篡奪よりも弑虐よりも更に大なる罪である……」

老王はもはやきくに堪へなかつた。彼の絶望は忿怒となつた。

「それは何事だ。不孝者め。罰あたりめが。お前のやうな者は私の子でない。頻毗婆羅の子でない。貴様は成達羅の子だ」

「黙れ」

阿闍多設咄路は立ちあがつた。そして劍に手をかけた。彼の顔は蒼白になつた。が、心にくゝもちつと怒をおさへた。息のつまるやうな沈黙がつゞいた。やゝあつて彼は侍臣を呼んでしづかに父王を指しつゝいつた。

「今より頻毗婆羅を大不敬の罪によつて獄に下す」

老王はふたゝび擔荷にのせられ放心のさまでつれだされた。

阿闍多設咄路は直に韋提希禁足の命令を下したのちまた荒々しく室内を歩きはじめた。彼は精液



をしぼりつくしてくしゃくしゃの皮囊となつた父母に對して吐くやうな厭惡を覺えた。彼はせめて父母が肉體だけなりと美しかつたらと思つた。彼はまた苦惱、汚穢、恥辱、淫慾の口から反吐のごとく吐きだされた己の體を思つた。そして穴にでもはひりたい氣持ちになつた。彼はまた父母の膝にすがつてかきくどき怨みたかつた。彼は一方に父母に對する奇怪なる思想感情に毒されながら他方に異常に深い子としての情愛をもつてゐた。彼はやさしくありたかつた。孝養をつくしたかつた。しかも彼をして冷酷無情ならしめるものは父母その人であつた。たとへば彼らは故意に彼の禁令を無視した。そこで彼は餘儀なく、正當に、冷に、——残酷にはない——義務を果すところの愉快をさへ感じつゝ相當の刑罰を加へた。これは彼の畸形なる性格のひとつであつた。

彼は頻毗婆羅のまへに阿闍多設咄路を主張したけれども己のまへに頻毗婆羅を承認することができなかつた。

## 十九

老王の投ぜられた牢獄はなかば地中へ掘りさげた奥深い長方形の石室で、戦時には人質を監禁しておくために、平時には重い國事犯囚を入れるために用ゐられるもので、人命の極めて安價な當時にあつては、殊に囚人の生命などにあまり多くの注意がはられる筈はなく、自然この石牢は人間がながいあひだ生活するに堪へられるやうな具合には造られてゐなかつた。こゝは天井も、壁も、床もすべて粗削りのまゝの石で、一方の壁にばかり、それも人の手のとどかないところにたつたふたつ、ひとつは入口に近く、ひとつは奥の隅に近く、人頭大の風通し兼明り通りの圓い孔があいてゐるだけで、その他には廊下に向つた入口の、一面に金具を打つた頑丈な戸にあけてある四角な孔、それは見廻りの牢番が囚人の様子を見たり、食物を與へたりするための孔から乏しい間接の光線がこの中に棲む不幸な人間に惠まれるのみであつた。それゆゑこの牢獄はいつも暗くじめく／＼して無数の蛭蟻の巢となり、守宮や蝙蝠の隠家になつてゐたので、變に濕氣臭いばかりでなく、むつとするやうな蝙蝠特有の臭がしみこんでゐた。

ふたゝびこゝに投ぜられた老王はすでになかば狂亂してゐた。彼は烈しく阿闍多設咄路を呪ふか



と思へばまたさも恩愛の情に堪へぬらしく溺愛の言葉をくりかへした。そして力ない聲をからして我子の名を呼びつゞけた。この地下の牢獄から國王のところまで、厚い石壁をとほしてその聲がとどきでもするかのやうに。彼の信仰は今や狂信となり偏執となつた。彼は今にも餓死しようとする弱りはてた體の力を骨と皮ばかりになつた手足の指にあつめて石壁の凸凹をたよりに高い孔のところまで攀ぢのぼらうとする。そして蟻のやうにからうじてすこしはひあがつたとおもふとは力がつきてどさりと落ちる。暫くは起きあがることもできずに死んだやうに倒れてゐる。と、またひよろひよるとたちあがつて石壁にしがみつく。その孔からは遙に佛陀の止住せる娑栗陀羅矩吒の山が見えるのであつた。

阿闍多設咄路は老王がまだ執拗にそれをやめないことを知るや即刻その窓をふさいでしまふやうに嚴命した。併し命令がまさに實行されようとしたときに彼はそれを取消してあらためて囚人に左の旨を傳へさせた。

「それは國王が慈悲をもつて囚人をして天日の光を仰がしめんがために設けた窓である。國王の禁令を蔑視し、その好まざるところを爲さしめんがために設けたものではない。囚人をして一層よくこの旨を了解せしめんがために、また己にいづる罪のいかに己にかへるかを知らしめんがために、

窓はこれまでどほり開放される。そのかほりに囚人の足のうらを削りとらせる」

彼はまた次の言葉をつけくはへた。

「記憶せよ、成達羅の子は何よりも侮辱を惡むことを」



阿闍多設咄路の外護のもとに提婆達多は旭日昇天の勢を得た。彼の特色ある熱辯と、より嚴峻なる生活法とは一部の者によるこぼれ、且つ彼が佛陀よりすぐれたものである證據のやうに考へられた。のみならず彼が新王の歸依をうけてゐるといふことは彼の周圍に彼に對する、及び、間接に新王に對する多くの追従者を集めた。彼は王をとほして意のままを行ふことができたであらう。いはゞ生殺與奪の權を得たやうなものであつた。けれども彼はその絶對有利なる地位を利用して年來の仇敵悉達多を殺さうなどゝは夢にも思はなかつた。それは決して彼の執拗にして徹底的な復讐心を満足させるものではなかつた。悉達多はその死によつて寧ろ彼の好敵手となることも敗北者とはならぬであらう。彼はそれよりは絶望的な逆境のもとに敵をして飽くまで敗北者、失脚者の苦痛屈辱をなめさせつゝ己勝利者として相手の無慙な笑止な有様をちつと眺めてやりたかつた。彼の望は達せられたかのやうにみえた。佛陀の教團は一朝にして頻毗婆羅王の無盡藏の供養を失つてしまつた。そのうへこれまで佛陀に屬してゐた人々は僧俗の別なく日に日に提婆達多のはうへとうつゝてきた。併しながらこの形勢はあまり長くは續かなかつた。提婆達多は佛陀の慈悲にかふるに人間に對す

る烈しい憎惡をもつてゐた。彼は不斷の叱責者、呪咀者であつた。彼のもとにあつて人々の心は惱んだ。それは偉大なる指導者の手にすがつて暗黒より光明へと導かれる足弱き者となるのではなくして、狂暴なる主將に率ゐられて惡戰苦闘しつゝ終には破滅に陥る兵卒となることであつた。人々の心は漸く彼をはなれた。かうなると人々が阿闍多設咄路に對して竊に抱いてゐた不快も間接に彼に禍した。多くのものは提婆達多をすてゝ佛陀に復歸した。一個偉才ある人間より佛陀のはうへ。傳ふるところによれば舍利弗と目犍連夜那とは提婆達多に誘惑された五百の比丘を救はんがために伽耶尸利沙ガヤシリスへ行つた。その時恰も說法中であつた提婆達多は二人を見て彼らも終に己の教團に入るために來たものと思つていつた。

「お前たちはさきには私の新則を認めなかつたが今かやうにして來たのは遅いながらもよいことである」

二人は默然として座に着いた。提婆達多は舍利弗にむかつていつた。

「私はすこし疲れた。お前かはつて說法せよ」

これは佛陀の口吻であつた。かくて彼は退いて僧伽梨を疊み右脇に臥して眠つた。そのあひだに目犍連夜那は神通を現し、舍利弗は諄々と法を説いて五百の比丘をして法眼淨を得しめ、直に彼ら



を率ゐて佛陀のもとに歸つたといふ。

佛陀に復歸した者のうちには今やかへつて忘恩的に提婆達多に對して惡語を放つ者さへすくなくなかつた。或者は彼を罵つて欺瞞漢だとまでいつた。まことに彼は欺瞞漢であつたであらう。さりながら彼らを欺いた者は提婆達多よりは寧ろ彼ら自らではなかつたらうか。人々のかやうな仕打は益提婆達多をして人間を呪はしめた。彼はもはや衆生の濟度のために現れたる佛陀にあらずしてそれを滅さんがために來れる鬼神のごとくにみえた。そしてそれが愈彼を孤獨にした。

二二一

阿闍多設咄路はもとよりこの形勢を悦ばなかつたけれど、さりとて己の權力を用ゐて佛陀の教團に壓迫をくはへるやうなことはしなかつた。彼は佛陀及びその教團そのものに對して格別惡感をもつてゐなかつたのみならず、そのやうなことをして人々の不平を誘發するのをおそれた。しかも彼は可憐にも依然として提婆達多に對して尊崇をつゞけてゐた。併し形勢は益面白くなかつた。ある日佛陀が結栗陀羅矩吒の山陰を經行してゐた時に、山上から大石が落ちてきてその破片が佛陀の足を傷けた。それを世間では提婆達多のしわざだといひはやした。またある日阿闍多設咄路の象の那羅祇梨があれだして折あしくその邊を行乞してゐた佛陀に危害をくはへかゝつた。それは幸に事なくすんだが人々はそれを阿闍多設咄路と提婆達多の企だと噂した。そのうへ惡象は佛陀の慈悲にうたれてしづまつたのだとまでつけくはへた。さきに愚痴と輕薄をもつて一時に提婆達多に靡いた者共は今やおなじ愚痴と輕薄をもつて佛陀をもてはやした。この時提婆達多のもとに残つてゐたのは瞿利迦、乾陀驪、迦留羅提舍、三聞達多、其他少數の弟子及び俗信徒と、阿闍多設咄路とその追從者ばかりであつた。提婆達多の心は寂しかつた。



「私は結局敗北者であつたか」

これは幾度となく彼の胸におこる苦しい問であつた。

「私は敗北者として死なねばならないのか」

實際彼の健康は近頃急に衰へた。さしにも強壯であつた彼の肉體を不斷の煩惱が焼きつくしてしまつた。彼は自分の死期の遠くないのを豫想するやうな氣がした。この時にあたり美しい阿闍多設咄路の訪問は彼にとつて唯一の慰藉であつた。彼の戀はいやました。

提婆達多の教團の者が冬四月のあひだの住居とする見すばらしい名ばかりの草庵は峩々たる伽耶尸利沙の裾のはづかに平坦な部分にあつた。その一群の草庵の背面に襲ひかゝるやうに峙つた凹字形の岩壁の、そのひとつの凸出部の鼻に、古來諸仙の隱栖となつた大きな洞窟があつた。岩壁に包まれた草庵からは曷羅闍姑利咽の方を見渡すことができなかつたが、この洞窟からは眼下に展開する摩伽陀の大平原のたゞなかに、その都城をかこむところの美しい五つの山を雲煙糝糊のうちに望むことができた。提婆達多は修禪といふ口實のもとに屢この洞窟に入つて曷羅闍姑利咽のかたを望み見ては人知れず阿闍多設咄路に思ひを焦すのであつた。彼は屏風立の岩壁の腹に自然につくられた棧道ともいふべき斷續した岩角をとび渡つて今日もまたこゝに姿をかくした。洞窟のはしへで、見お

ちせば眼のまふやうな幾十丈の斷崖、そこに繩梯子のやうに垂れさがつたすばらしい葛蘿、そのさきのからみついた牙のやうな岩角は折々翼を休めてゆく鷺の糞に汚れてゐる。斷崖のつきるところから次第に緩漫に傾斜して扇形にひろがつてゐる裾、それは日光も風雨もとほさぬほどに鬱蒼とした森林に蔽はれて、眼にみえぬ溪流の音が涼々ときこえてくる。その裾が平地につゞく邊からは漸く森林が疎らになつて、間々に耕地や牧場や池沼や溝渠やまじつてゐる。そして一望際涯なき平野のなかに、今しも煮えたぎる熱海のごとく濛々とたちのぼる陽炎の潮の裡に、かの曷羅闍姑利咽はかくれてゐるのである。



美しい五つの山は曷羅闍姑利咽を繞つてゐる。そこにはあまたの温泉が湧き、寶石が出る。曷羅闍姑利咽は美しい溪谷に跨つてゐる。そこは大摩伽陀の都にして紅顔の王阿闍多設咄路の居るところである。隊商の群は東より西より南より北よりあつまつてくる。彼等は象牙や黄金や香料や絹布や藥品や甲冑を積んでくる。曷羅闍姑利咽は旭のごとくに耀き、また蓮華のやうに榮えてゐる。

提婆達多は曷羅闍姑利咽を戀うた。それは乾闥婆城のごとくに空に浮んで幻に見える。

「阿闍多設咄路はあそこにゐるのだ」

「阿闍多設咄路はどうしてゐるのであらう」

阿闍多設咄路は父王を幽閉して以來影のごとくにつきまとふ不安に責められて出遊することも全くなくなつた。自然伽耶尸利沙の精舎を訪れないことすでに久しいのである。

「阿闍多設咄路は新に召入れた女に溺れて私のことなどは忘れてしまつたのであらう」

提婆達多は阿闍多設咄路の若い腕に抱愛される女を思つて妬ましさ堪へなかつた。

「阿闍多設咄路」

提婆達多は恍惚とそなたの空を望みながら我を忘れて呼ぶ。そしてまた捕へられた獣のやうに窟内を行きつもとどりつする。彼は阿闍多設咄路が彼を訪れる時の様子を思ひだす。阿闍多設咄路は時には馬車を驅つてくることもあつたが多くは見事な栗毛馬に乗つてきた。彼は幾度その嘶きに胸を躍らせたか。阿闍多設咄路はひらりと鞍をはなれ、馬を木蔭につなげて精舎のはうへ進んでくる。そして彼のまへに近づくや五體を地に投じて彼の足を頂禮する。彼は踵に阿闍多設咄路の柔い掌を感ずる。その體は赤らみかけた果物のやうに水々しくすらりとしてゐる。若き王は微笑を浮めてすこしくはちらひながらも流石に威儀をたもちつゝ問訊の言葉をのべる。その男らしい眉のあひだには氣高い憂愁の影が見える。とはいへその大きな涼しい眼は青春の力と喜に耀き、甘やかな頬には馨しい血の色が漲つてゐる。汗ばめる肌をつや、香油の匂、瓔珞のきらめき、彼はどうしてもそれを忘れることができない。若き王は退き坐して彼の教誡をきく。そのさかしい眼は恭虔と熱心と讚嘆とにまじろぎもせずみはつてゐる。そしてあまりに厳しく教呵される時には面はゆげにせつなげにうなだれてそのうぶな胸の底から懺悔するかやうにみえる。そのやうにして聴聞しをはつたのち重くるしい感情に悩みながら、伏目にたちあがり、しづかに彼を三匝して歸つてゆく。その時彼はうつも阿闍多設咄路をひきよせて抱きしめたい思をするのであつた。



「阿闍多設咄路よ、お前はいつまで私を待たせるのであるか」  
提婆達多は戀慕に悶えつゝ屢幾時をこの洞中にすごした。

## 二十三

夜である。阿闍多設咄路の心は暗かつた。優陀耶跋陀羅が四五日來烈しく指を病んでゐるからである。彼のまへには若い夫人が泣き叫ぶ幼子を抱いてゐる。韋提希夫人もゐる。耆婆伽もゐる。老夫人は頻毗婆羅王のこのために見る影もなく瘦衰へてゐる。阿闍多設咄路は子供のひき裂かれるやうな泣聲に顔をしかめた。それをきくのがたまらないのだ。彼が己に對する父王の愛について父王に語つた時の言葉をかりていふならば、彼は自分の性慾行爲の最初の貴い記念物として優陀耶跋陀羅を盲目的に愛してゐた。彼は摩伽陀を棄てるとも優陀耶跋陀羅を棄てなかつたであらう。彼は夫人の手から子供を抱きとつて膝へのせた。右手の人さし指が赤黒く腫れあがつてぶら／＼になつた爪のあひだから膿汁が流れだしてゐる。あらゆる呪も、耆婆伽の手をつくした治療も、すこしも驗がみえない。もはや施すべき方法もない。指も手頸も腐れおちるにまかせねばならぬ。彼は子供の手をとつてちつと指先をみつめてゐたがやがてそれを自分の口へ入れて強く吸ひはじめた。悪性の毒のうつるのも恐れずに。子供は體を拗つて火のつくやうに悲鳴をあげる。阿闍多設咄路はしつかりと抱きしめてきつく／＼吸ひつゞけた。そして口中に吸出されるどろ／＼の膿をかたへの器に吐



出した。その時彼はわつと泣崩れる老夫人の聲をきいた。彼は驚いて泣きふす母を見た。そしてそれが我子のためだと思つて嬉しさを覺えた。老夫人は大逆の子の生んだ孫ながら流石に優陀耶跋陀羅を可愛がつてゐたので。阿闍多設咄路はひとりごとのやうにいつた。

「私はかうしてなほしてやらう」

その時老夫人は涙にむせびながらいつた。

「阿闍多設咄路、お前の小さい時に父上はそのやうにしてお前の指をなほしてくださいました」

阿闍多設咄路は覺えずすこし畸形になつた左手の小指の爪をみた。そしていつまでもそれを見つめたまゝ、ひと言もいはなかつた。やゝあつて彼ははら／＼と涙をこぼした。そして夢遊病者のやうにたちあがつた。

「父上のところへ」

彼は譚語のやうにいひながらよろ／＼と歩きだした。そして耆婆伽を先に、老夫人を後に、曲り曲つた廊下をとほり幾つかの階段を降りて牢獄のまへへきた。牢番ががちや／＼と錠前をあけた。がんじょうな戸がごろ／＼と鈍な濁つた底力のある音をたて、重たさうにあいた。まつ黒な牢獄が大きな口を開くと同時に一種異様の臭氣が冷い息といつしよに吐きだされた。阿闍多設咄路は己を

呑まうとする巨怪のまへに立つたやうにたちろいだ。彼は耆婆伽のもつ燈火に足もとを照されながら急な石壇を牢のなかへ降りた。

「父上」

物音もせぬ。

「父上」

まつ暗な奥のはうから反響してくる。阿闍多設咄路はなにか黒いものがものもいはずに飛びかゝつてきさうな氣持がした。

「大王様」

耆婆伽がおど／＼と呼ぶ。彼らは呼びながら奥深くはひつていつた。そしてあの明り通りの孔のしたに肉の露出した血まみれの足のうらを見せてうつぶせに倒れてゐる老王の死骸を見いだした。阿闍多設咄路は母とよもに屍體にとりついて聲をあげて泣いた。耆婆伽も石床にうち倒れて泣いた。壁石に生々しくへばりついてゐる血は足を削られてもなほ攀ぢのぼることをやめなかつたこの囚人が死んでまだ間もないことを語つた。



「殘伽の南岸に於て衆生を嚮割するとも決して何等の惡報もない。殘伽の北岸に於て大施會をなして一切衆に施すともまた何等の福報もない」

阿闍多設咄路は富蘭那迦葉の言葉を胸のうちにくりかへしてゐた。

阿闍多設咄路が本心にたちかへつて大敵を發し父王を厚葬したのを見て人々の心は老王を悲むとともに彼をゆるした。とはいへ彼の心はなか／＼彼をゆるさなかつた。優陀耶跋陀羅の指は不思議に癒えたけれども彼はすこしも樂まなかつた。苦悶はやむ時もなかつた。神經は益病的に鋭くなつた。彼は絶えず妄想に襲はれた。人々の私語は日に／＼無遠慮に大膽に露骨になつてくるやうな氣がした。誰とも知れず到る處で自分を非難してゐる。そして何か不穩な謀計が秘密にたくらまれてゐる。彼は母と妻と頑是ない優陀耶跋陀羅と耆婆伽のほかほもう誰も信ずることができない。今にも玉座の下から火が燃えあがりさうな不安を感じる。身のおきどころがない。足のふみどころがない。彼は夜晝とない危惧に惱んで顔色蒼白になつてゐる。彼は父王の最後の有様を幾度となく夢に見る。瘦せ細つた父王は血みどろの足のうらを見せて石床にうち倒れてゐる。彼はいつもその冷い耳

に口をあてゝ聲をかぎりと呼んだ。すでに遠く飛びさつた魂を呼びかへさうとするかのやうに。彼はこの心の苛責より救はれたさに所謂外道の師を訪うて道を問うた。——彼はもはや提婆達多を訪はなかつた——併しながらあるひは宿命を説き、あるひは決定論を主張し、または善惡因果を否定する等の彼等の教へは彼に何等の満足も慰藉も與へなかつた。彼が沈思してゐるところへ耆婆伽が醍醐と、藥粉をまぜた蜜漿とをもつてきた。

「お藥をもつてまゐりました」

阿闍多設咄路は氣がつかない。

「大王よ、お藥をもつてまゐりました」

「お、耆婆伽か」

阿闍多設咄路は耆婆伽のきたのが嬉しかつた。耆婆伽は醍醐を盛つた黄金の皿と藥蜜をいれた玻璃の高杯をさゝげた。王はそれをうけとつて不承々に醍醐を食ひ、それからちよつと藥に口をつけたばかりで呑みさしの高杯をかたへにおきながらいつた。

「私は藥にも飽きたが六師の説法にも飽きはてた。末伽梨拘隄梨弗も阿耆多翅舍欽婆羅も迦羅鳴鳩迦旃延も尼乾陀若提弗も私をすこしも満足させない。私は今富蘭那伽葉の言葉を考へてゐたと



ころである」

「大王よ、何故世尊のところへはおいでになりませぬか」

耆婆伽は頻毗娑羅王在世の時から深く佛陀に歸依してゐた。

「佛陀か」

王は己が提婆達多の熱心な外護者であつたことを思つてなんとなく氣おくれがした。

「大王よ、世尊は今私の菴沒羅園で雨安居をしてをられます。佛陀の教をおきよになれば必ず御憂惱も去るにちがひござりませぬ」

王はやゝ久しく沈吟してゐたが終に説得されて同意した。

二十五

阿闍多設咄路は佛陀を訪ふべく那羅祇梨に乗つて宮殿を出た。降りつゞいた雨が今宵珍しく霽れた。澄明な空に満月が皎々と照つて濡れた土のうへに木々が黒玉の影を落してゐる。城市を圍む山の彼方に稻妻がほのめいて微かに遠雷の音がきこえる。頭をふり耳をあふつてのつしと歩みながら那羅祇梨は大きな踵に氣持ちよく泥濘の冷えを感じる。王は月光の溢るゝ象轎のうちにゆられながら流石にいかほどか爽快を覺えた。やゝあつて王駕は城外程遠からぬ耆婆伽の菴沒羅園についた。前驅のものは手に手に炬火をふりつゝ林のなかへ進んでゆく。菴沒羅の巨木は縦横に枝をひろげて黒黒と繁りあつてゐる。雫が散る。空氣はしつとりと淀んでゐる。どこにか果の落ちる音がした。那羅祇梨は歩度をゆるめ鼻をあげてしきりに嗅いでゐたが突然何物かを威嚇するやうに恐しく咆えた。抑揚のない力強い聲がこうくと笹に響く。阿闍多設咄路の心はをのゝいた。彼は事にかこつけて幾度か象をとめさせた。彼は耆婆伽を疑ひはじめた。終にたまりかねて耆婆伽をそば近く呼びよせて己が罪過でも語るやうにおどくと聲をひそめていつた。

「耆婆伽、お前は私を騙すのではあるまいな」



耆婆伽は直にその意味を察した。彼は心から病王を憐れんだ。そしてやさしく答へた。

「大王よ、常に閑静を樂むのはかの沙門の法であります」

阿闍多設咄路もそれを知らない譯ではなかつた。

「御懸念なされますな。やがて精舎でござります」

間もなく精舎が見えた。阿闍多設咄路ははじめて安堵した。彼は象輻を降り、劍を解き、徒歩して精舎の門に入った。千二百五十人の大衆の止住するこの精舎はさながら空堂のごとくに静であつた。阿闍多設咄路は耆婆伽を顧みてとうた。

「世尊はどこに居られるのか」

「あの高堂の獅子座のうへに居られるのが世尊であります」

阿闍多設咄路は講堂のところで足を洗つて上にあがつた。彼は佛陀のまへにすゝみ佛足を頂禮してのち退いて佛陀にむかつて坐つた。阿闍多設咄路はそつと佛陀を見あげた。佛陀は靜に彼を見おろしてゐた。その刹那、王は心の底より畏敬と歡喜の湧きおこるのを覺えた。冷なる智慧をかぎりなき慈悲があたゝめ、慈悲の醜き激越を明なる智慧がおさへて、満月のごとく淨く圓なる佛陀の威容にうたれ、王の五體は我にもあらずをのゝいた。王は佛陀にむかつていつた。

「世尊よ、わたくしは今おたづねしたいと思ふことがあります。宜しいでありますか」  
佛陀は答へた。

「王よ、たづねたいことがあるならばたづねるがよろしい。」